
普通の人を送る日常

未吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通の人を送る日常

【Nコード】

N5693X

【作者名】

末吉

【あらすじ】

この話は、世界観がめちゃくちゃな所に住む主人公の日常である。とにかく、平和なお話である。

はじまり（前書き）

初投稿なので、なにぶん至らぬところがあると思いますが、よろしくお願いいたします。

はじまり

はじまるよ

注意。

これから始まるお話は、普段脇役みたいな人たちに焦点をあてたものです。あまりにもありふれているので、面白さを保証できません。それでも良いのでしたら、どうぞご覧下さい。あと、世界観がとんでもないことになっています。ご了承ください。

ついでに言いますと、読者たちの『普通』とは違う感覚の人たちなので、おかしいな? と思っても見逃してください。

それでは、『普通の人を送る日常』のはじまりはじまり。(パチパチパチ!)

はじまり（後書き）

感想をよろしくお願いいたします。

一 五月中旬のある日（前書き）

普通って、なんでしょう？

一 五月中旬のある日

『普通』という言葉の定義は『当たり前』。僕はこう思う。
なぜなら、俳優やタレント、お笑い芸人がテレビに出ていること。
これも普通。

僕みたいに何も個性らしいものが無い人の事。これも普通。
勝手に人の中心にいる人。これも、彼らにとっては普通だ。
まだほかにも事例をあげられるけど、これらを見ただけで「普通」
の利便性が分かる。

なぜこんなことを最初に述べたかというと、『普通』という言葉
がいかに汎用性に優れているのかを分かってもらうため。

でも僕は、この言葉が嫌いじゃない。
だって人によって意味に違いがあるのは当たり前だと思っているか
ら。

「……という訳なんだけど。二人ともどう思う？」

「そんな感じだよな。……っていうか、いきなりどうしたんだ？」

「……………それをテーマとして書けば、課題が終わる。」

僕が言ったことに対して、二人がそれぞれの反応を示した。

あ、僕の名前は池田連^{いけだれん}。今年で十五になる中学三年生だ。

自分の身体的特徴は何もない。いわゆる、普通だ。

身長は平均男子よりちょっと低いくらいで、体重は完全に平均。

髪型は特に何もしていない。

体つきも中肉中背。得意なものも苦手なものも何もないという、完
全に『特徴なし』。眼鏡をかけてるわけでもないから、本当に特徴
が無い。

……………毎度のことながら泣けて
くるね、これ。

気を取り直して。

次に、僕の話聴いていた二人の友達の紹介でもしようか。

僕の話にいち早く感想を言ってくれたのが、僕の友達の岡田庄一。おかだしょういち

僕と同じクラスで、三年間一緒だった腐れ縁。庄一の特徴を挙げるなら、彼もまた「普通」。

ただ、髪型が特徴的で、オールバックにしている。本人曰く『カッコよくね?』だって。

僕に訊かれても困るんだけど。

そして、もう一人が木村圭。きむらけい彼は二年生のクラス替えで同じクラスになり、友達となった。

彼も普通だけど、特徴的なものがいくつかある。

一つ目。まず無口。

彼は普段寡黙を貫いていて、答える時は必ず間が出来る。その上、無表情。

二つ目。情報がはやい。

どこで聴いてくるのか分からないけど、僕達はその話をする時には既に裏付けが終わっている。本当に、どこで聴いてくるんだろう? 他にもあるけど、そろそろ話を戻そうか。

「どうしてって、前に庄一が言ってたじゃん。『普通ってなんだろうな?』って。」

庄一が訊いてきたので、僕は答えた。

「そうだった?」

「……それは本当。」

庄一が首をひねると、圭がつぶやく感じで言った。ちなみに、今は昼食の時間で、僕達は自分たちが使っている教室で食べている。給食っていう制度があったらしいんだけど、今や完全に自分たちで持ってきて来いって感じになっている。

だから、僕達は弁当を持ってきて、席を移動して、集まって話しながら食べている。

先程の圭の発言で会話が止まり、食べることに集中した僕達は、廊下側が何やら騒がしいことに気付いた。

「ん?」「あれ?」「...?」

そう思って僕達は廊下側に視線を向けると、何やら言い争っている人達がいた。しかし、

「またあいつらか。本当に懲りねえな。」

「あれがあの人たちの『普通』だよ。」

「……あの二人は犬猿の仲。よって、その取り巻きの人達も同じ。」

僕達は騒がしい原因が分かったので、再び食べることに集中した。

ちなみに、言い争っているのは清水久実しみずくみさんと寺井堇てらいすみれさん。二人とも学校内で一、二を争う美少女だ。そして彼女らが喧嘩をする原因が……、

「大変だなあ、あいつ。」

「……リア充死ね。」

「怖いこと言わないでよ、圭。それと、庄一の言う事にも一理あるね。毎回大変だね、中島君。」

僕が言った中島君である。

彼の名前は中島元なかしまはじめ。このクラスでよくあの二人に絡まれる人。どうして絡まれるのかというと、彼に対する好意を二人とも持っているから。どうして二人が中島君に好意を持っているのかというと、圭曰く『色々あった。』んだって。詳細はまた今度ね。

あ、肝心なこと言うの忘れてた。

清水さんは超能力者、寺井さんは魔術師、中島君はそのどちらでもあります、どちらでもない。

.....

その君。今『こいつの頭おかしくなったのか?』と思っただろ。

本当にいるんだよ。この世界には普通の人もたくさんいるけど、超能力者やロボット、魔術師なんかは当たり前。他のところだと幽霊が実体化してるところがあるんだって。結構シュールだよな。

閑話休題。

「……これもいつものこと。」

「そうだね。」「そうだな。」

僕達は、最初に見ただけであとは食事をすることにした。すると、庄一がふとこう言ってきた。

「なあ、お前ら。好きな人っているか？」

「は？」

「……………」

いきなり何を言い出すの庄一？と思って、

「何を言い出すの庄一？」

と僕は訊いた。すると庄一は、頭をかきながらこう言った。

「いやな、俺、好きな人ができたんだよ。」

「そうなの？」 「……振られるのがオチ。」

庄一が言ったことに対して、僕達の反応はバラバラだった。そして、
「圭。なんだと？」

圭の言葉で庄一がキレそうになった。

「落ち着いてよ。で？ 庄一、誰の事が好きになったの？」

それを僕が抑えて話を促す。これも普通だ。

庄一は言いにくそうに、

「と、隣のクラスの藤井さんだ。」

「ああ、あのおとなしそうな人か。可愛いといえば、可愛いかな？」

「……騙されるな。あいつは化粧であそこまで可愛く見せているだけだ。」

庄一の好きな人を聴いた僕達の反応は、またもバラバラだった。しかも、圭。君、とんでもないこと言わなかった？

圭が言ったことに庄一がまたもキレそうになった。

「なんだと！？ 証拠見せろや！」

「お、落ち着いてよ、庄一！！ みんな見てるから！！」

ちよっとみんなから注目を浴びたけど、特に何も言われなかった。良かった良かった。

と思っていたら、圭が一枚の写真を机に置いた。

「……………証拠。」

「これが、か？」

と言って、庄一はその写真を見た。

て言うか、圭。君はその写真をどこで撮ってきたんだい？

そんな僕の心の中のツツコミも知らず、圭は弁当を食べていた。僕も食べてるよ。

写真を見て圭に返した後、庄一は弁当を食べながらこう言った。

「女って、怖いな。」

一体どんな写真だったのだろう？と思ったけど、もうすぐ午後の授業が始まるので、話題に出さなかった。

一 五月中旬のある日（後書き）

続きます。

五月中旬のある日（2）

午後の授業が始まった。僕達の学校は中・高とエスカレーター式なので、受験が無い。

という事で、高校の授業をちょっと先取りするという事になる。でもそれは冬からなので、今は普通に中学三年の授業を聴いている。

この日の午後の最初の授業は、超能力を持っている人以外は自習。僕達の授業は、主に超能力者や魔術師に影響されている。つまり、一日で二回は自習があるという事。

ちなみに、中島君は何故か超能力の人達に連れて行かれた。これもいつものことだ。そして必ず寺井さんが荒れる。これもまたいつものこと。更に言うと、魔術師の時は魔術師に連れて行かれ、清水さんが荒れる。これももはや日常。

それで僕らはというと、

「また荒れてんなあ、寺井さん。」

「……構うなら一人で逝って来い。俺を巻き込むな。」

「僕もちよつと……。」

「誰がそんなことするか。それと圭。行って来い、の字が違う気がしたんだが、気のせいかな？」

「……気のせい。」

現在大人しく自習しています。元々、僕達の席は近いので、こうして話しながら自習できるんだよ。僕達三人とも窓側ね。

自習をしながらも、僕達はおしゃべりを続けていた。

「なあ、久しぶりに連の家行こうぜ。」

「そうやって僕のところでご飯食べるんでしょう？」

「それはついでだって。お前のところの方が面白いだろ？」

「……毎度のことながら、連の両親は面白い。」

「息子に言う言葉じゃないよね？それ。」

「で、いいのか？」

「うゝん……別に問題はないよ。ただ」

「ただ？」

「昼時にピンポイントで来ないでよ？つくるの大変なんだから。」

「……了解した。今度は昼前から行こう。」

「圭。食べるの前提だよね？」

「分かったよ。自分たちで昼食べてからにするよ。」

「それならいいよ。」

これで会話が終了してしまったので、僕達は勉強に集中していった。ちなみに、何故か僕の家で遊ぶときは二人が昼時に来る。しかも、材料を持ってきて。そして、その材料で僕が二人の昼食をつくる。どうして僕なのかというと、両親が家事や財産管理を一切やらないから。そのせいで、僕は家事全般が得意なんだ。

中でも、料理の腕が他の人曰く「超一流シェフと同じかそれ以上」なんだって。僕は本職の人に勝っていると思わないけどね。

五月中旬のある日(3)

家庭科の実習では、エプロンづくりや三角巾づくりを他の人より手早くかつ綺麗に仕上げてしまったので、先生は哑然としていた。

その上、一年の頃の調理実習では僕が進んで一人の班になって先生に「一人で大丈夫なの？」と心配されたけど、そんな心配をよそに僕は一人で料理を完成させた。どの班よりも早く。

それを見届けた先生やほかの生徒は驚き、僕が料理をしながら使わなくなった器具を片付けていたのを見て、さらに驚かれた。その後、僕が食べていたら先生が「味見しても良い？」と言って僕がつくった料理を食べて、数分硬直した後に「各自つくり終わった後は、食べてから片付けて教室に戻ってね！」と泣きながら走り去っていき、しばらく学校に來なかつた。

それからというものの、家庭科の調理実習の時は、先生が僕に味付けのポイントを熱心に訊きに來る。あとは……班になった人(一年の時は一人、二年の時は庄一と圭、三年も同じ予定。)以外の人が、たまに料理を食べに來る。そして、食べた後は何かに感動したような感じで戻っていく。どうしたのかな？

これは置いといて。今は自習だ、自習。

そう思って勉強していると、庄一が思い出したかのようにこう言つた。

「そういえばよ、お前らの好きな人って誰？」

その言葉に、僕達は一瞬固まつた。

「何をいい出すの？」

「……俺はいない。」

そう言うと、庄一は真面目な顔をして、

「俺だけ言うのって、なんか不公平じゃね？」

と言つた。

「あれは君が自分で話題を振ってきたんだよね？僕達は別に言わな

くていいんじゃない？」

「∴そうだ、そうだ。」

そう僕達が抗議すると、庄一は「うっ！そ、そうだったな。」と言
ってこの話題は終わった。

そうしていたら、授業が終わった。なので、自習に使っていたも
のを片付けて次の授業の準備をした。

五月中旬のある日(3) (後書き)

感想をよろしくお願いします。

五月中旬のある日（4）

放課後。僕達三人は部活にも何も入っていないので、一緒に帰った。ただ、それは校門前までで、校門を過ぎたらそれぞれ道が違う。

「今日も中島が修羅場ってたな。」

「大変そうだったね。」

「……爆ぜろ。」

圭へのツツコミはスルーして、

「また明日ね。」

「おう。」「…また。」

と言って三人ともバラバラに帰っていった。これもいつもだね。

ちなみに、件の中島君だけど、彼はあの二人のおかげ（せい？）

で放課後は三人で何かやっているんだって。圭が言うには『…悪党退治』だって。ま、この詳細も話せたら、という事で。

僕は、いつもの道を歩きながら冷蔵庫に何が残っているのか思い出していた。そして、残っていたもので夕飯の献立がつけられるか考えた。

何パターンか考えて、明日以降の食材がなくなるという結論が出たので、僕はダッシュで家に帰った。

「ただいま……。」

「連、お帰りー！！」「お帰りー！！」

ドアを開けて呼吸を整えていたら、両親がいつものように来た。

ここで僕の両親の紹介をしよう。

僕の両親の職業は普通の会社員で、家事を全くしない駄目夫婦だ。それでも、会社では個人業績一位、二位を二人で独占しているんだって。以上、両親の説明でした。

「それにしても、どうしたんだ？ 走って家に帰ってくるなんて。」

「そうね。何があったの？」

僕の表情を見て、両親はそう訊いてきた。僕は息を整え終えてから

言った。

「今日の夕飯で冷蔵庫の中身がなくなるから、明日以降の食材を買ってこないといけないから走って戻ってきたんだよ。」

その言葉で両親は「そ、それはマズイ!」「買ってこなきゃ!」と慌てていたけど、途端に落ち着いた。この後の台詞はもう覚えていたので、僕は先手を打った。

「二人とも、夕飯の前に買い物行くから荷物持ちお願いね。」

「「え〜」。」

「さっさとしないと夕飯遅れるよ!!」

「「イエッサー!!」」

相変らずノリはいいんだから。そう思いながら僕は、荷物を部屋に置いて財布を持って家を出た。

家を出てから。

「連。何買うんだ?」

「とりあえず、肉と野菜と魚と卵、後は調理済みの料理を何個かと、冷凍食品。」

「随分あるわね。」

「冷凍食品と卵以外は商店街で買えるから、先にスーパーに行こうか。」

という訳で、僕達はスーパーに行くことになった。

・・・・・・一般的には、僕が荷物持ちなんだけどね。

スーパー内にて。

僕が普段から買っている冷凍食品+これがあれば楽になりそうな冷凍食品を買って、卵のところに向かっていると、ぼったり中島君と出会った。

「あ、中島君。今日も大変だったね。」

「あ、君は池田君。どうしたんだい?」

「僕は明日の買い出し。君は?」

「僕はお使いだよ。まったく、うちの両親は人使いが荒いんだから。」

「うらやましいよ。家事やってくれるんでしょ？」

「そういえば、買い出しって言ってたけど、両親は？」

「お菓子コーナーにでもいるんじゃない？」

「え？」

中島君の間の抜けた返事が聴こえたので、僕は「また明日ね。」と言って卵が置いてあるところに向かった。

残された中島君はというと、

「そういえば、池田君って料理上手いんだった。食べたことないけど。家でも作っているからかな？ 董の料理の先生になって欲しいな。」

と呟きながら、本来の目的通りお使いをすることにした。

「二人とも、買い物終わったから荷物持つの手伝ってよ。」

僕は会計を終えた後、お菓子コーナーに向かったら、やっぱり僕の両親がいた。

両親は、僕の声で名残惜しそうにお菓子を見ていたけど、僕が持っていた荷物を持ってくれた。

「二人とも、商店街いくよ。」

「その代りなにか買っても良いか？」

「そうね。何か欲しいわね。」

貴方達は子供ですか？ と思って思わず口に出しそうになったけど、これはいつもの事なので、

「商店街でね。」

と言って僕達は、スーパーを後にした。

商店街にて。

「ヨォ連！！何買ってくる？ ステーキ用の肉か？」

「いやそれじゃなくて。いつものお肉が欲しいんだけど。」

「なんだよ。たまには奮発したらどうだ？」

「それやると両親がそれ以外食べなくなるから。」

「お前も大変なんだな。分かったよ。いつものだな。」

僕は肉屋で買い物をしていた。

ここは、僕が小学生のころから買い物をしている場所。スーパーが出来ても、ほとんどの主婦（夫）はここで買い物をしている。

あ、両親は二人で買い物してるよ。二人で千円なら何を買ってもいいという条件を出して商店街内に放置している。ま、何かあったら携帯電話に連絡してくれるように言ってるから大丈夫。

「毎度ありー！また来いよ！！」

「うん！」

と言って僕は、次の店へと向かった。

その後、八百屋と魚屋をまわってそれぞれで買い物を済まして、両親に電話した。

『もしもし、連？こっちはまだ終わってないんだが。』

「どこ？」

『駄菓子屋。』

「そっち行くからそこで買い物しててね。」

『動く気はないから。』

と言われて電話が切れた。

これだから、息子の僕がしっかりしないといけないと思っちゃうんだよね。

年相応の悩み事したいなあ、と思いながら、僕は駄菓子屋さんに向かった。

「いらっしゃ・・・連か！久し振りだな！」

「相変わらず口調が男前だよ、ミネルバさん。」

「ははは！お前も相変わらず両親に苦労してんじゃない。……お前さんの両親ならあっち側にいるぜ。」

と言って指を指すミネルバさん。僕はお礼を言いながらそこへ向かった。

ここの店の名前は『藤井駄菓子店』。この商店街が出来た時からある古株で、改築、増築を経て、三階建てで一階一階のスペースが広い構造になった。なので、駄菓子の種類が凄多い。今は、千種類ぐらいあったような気がする。そのおかげで、結構色々な所からここに買い物へ来る人が多い。

ちなみに、ミネルバさんはこの店の一階の店員で、ロボットである。ここで働いている理由は、『こういうところで働きたかった』からだって。

そして向かった先にいたのは、案の定、僕の両親だった。しかも、かごの中には結構な量（しかも安い物ばかり）が入っていた。

「もういいんじゃないの？」

と僕が呆れていると、

「まだだ。あと四百円は使える。」

「そうね。正確に言うなら四百三十円ね。」

と商品の値段を見ながら答える両親。

これを食材の買い物の時に発揮してくれないかな。と僕は思った。

今更だけど、我が家の財産管理や家計簿も僕がやっている。

理由は、放って置くとあの両親が変な買い物をしてくる恐れがあるから。

なので、両親の小遣いも僕が渡している。僕？小遣いなんてないよ。家の事で一杯だから、余裕がないしね。

あ、それでもたまに自分の買い物をしたりするよ？その時は自分で貯めていたお金を使うから、文句は言われないしね。

このことを言うと、庄一たちに「お前、完全に主夫だな。」「…：納得。校内頼れそうな人一位。」と言われた。圭の最後の台詞が気になったけど。

話を戻そうか。

尚も悩み続けているので僕はこう言った。

「それぐらいいいでしょ？また今度買い物に来るときに、その四百円繰り越せば。」

その言葉にめざとく両親は反応し、

「「それはいい考えだ！」」

と言って二人でレジに向かった。……仲はいいんだけどね、あの二人。

そう思いながら、僕は後を追った。

帰り道。

「結構買ったな。」

「そうね。」

「約六百円でそれだけ買えたことに僕は驚いたよ。」

ニコニコ顔の両親と対照的に、僕は驚いていた。

まあ、これも我が家にとっては普通だから何も言わないけど。

そう思いながら僕達は家に帰った。

「「「ただいまー。」」」

家に帰ってきてまずやること。それは食材を冷蔵庫に移すと同時に、使う食材を冷蔵庫から出すこと。僕は慣れた手つきでそれを行い、両親はテレビを見ていた。缶ビールを開けながら。

もう慣れたので、何も言わずに夕飯づくりに取り掛かった。

ここからの描写を簡略化すると、

夕飯をつくり終え、テーブルに並べ、両親と一緒に食べながら今日の話をし、風呂を沸かした後に食器を洗い、それが終わったら部屋に戻って、財布を戻したり明日の準備をしたりして、それが終わった後風呂に入って、最終的に今日の出費を家計簿に書いて僕は寝た。

これが僕の日常。そんな変わらないものが僕は好きだ。みんなもそうでしょ？

人物紹介 その一（前書き）

今回は、主人公たちの紹介です。

人物紹介 その一

池田連（15）・・・このお話の主人公。一言でいうなら、ものすごい苦勞人。容姿、成績ともに普通だが、家事スキルだけは一般人より上。特に、料理の腕は超一流の料理人をも凌ぐと言われている。そうなった理由は、単に両親がズボラなだけなわけだが。趣味は読書のみ。家事は特技。

岡田庄一（15）・・・連の友達。連とは中学一年のころからの腐れ縁で、とても仲が良い。彼も普通の人だが、髪型をオールバックにしている。とても友達思いで、義理堅い。ちなみに、身体能力がとても高い。

木村圭（15）・・・同じく連の友達。連と庄一とは中学二年のころに知り合い、それから仲良くしている。普段は無口、無表情である。話すときはほとんどが本音である。また、情報通でもあり、連たちが訊いてきたときにはその真偽がわかっている。

連の両親・・・彼らは普通のサラリーマンだが、社内業績は夫婦で首位を独占している。そのせいなのかどうか知らないが、家事を全くやらないし、基本的に変な買い物をしてくることが多い。ただし、最近はそんな買い物をしてこなくなったみたいだ。

中島元（15）・・・連のクラスメイト。彼も苦勞人。しかし、連には及ばない。とある事情から、警察に協力している。基本的に温厚であるが、友達を傷つけた者に対しては、自身の能力を使って報復をする。ちなみに、彼は鈍感ではあるが、それにはきちんとした理由がある。連たちとは違い能力者であるが、彼の能力は謎である。

清水久美（15）・・・同じく連のクラスメイト。彼女は元の幼馴染であり、彼のが好きである。熱心にアプローチをするが、当の本人は全く気が付いていない。また、彼と同じく警察に協力しており、自身の能力を持って犯人は捕まえている。超能力者で美人。

寺井堇（15）・・・同じく連のクラスメイト。とある事件をきっかけに元のが好きになり、清水とはライバル。また、自身が魔術師なのでそれもあいつて、基本的に清水とは仲が悪い。大金持ちでおしとやか、さらには美人という欠点がなさそうな感じの彼女だが、とんでもない欠点が存在する。

人物紹介 その一（後書き）

人物紹介は、話が進むにつれて挿入していきます。

二 六月下旬のある日（前書き）

嫉妬って、人間が最も陥りやすい感情ですよね。

二 六月下旬のある日

朝。学校の教室にて。

「それにしてもよ、先週と先々週にあの三人いなかったけど、なにがあったんだ？」

いつものように授業が始まる前に僕達三人は喋っていたら、庄一がそう言った。

「しかも、それまで騒がれていたゾンビ騒ぎもなくなっちゃったしよ。」

「そうだよね。しかもこのクラスに何故か一人増えてるしね。」僕は頷きながらチラリと廊下側を見た。

そこには、今日新しく転校してきた、レイジニア・ゼロという少女（レイシア人・ネクロマンサー）が早速中島君争奪戦に参加していた。ちなみに、結構美人で、最初の挨拶が『ハジメの嫁のレイジニア・ゼロよ。これからよろしくね。』と笑いながら言った時には、圭を含め複数の男子と寺井さん、清水さんが殺気立っていた。僕は本気で死ぬかと思った。

僕と同じように廊下側を見た圭が、ポツリと言った。

「……………羨ま…何でもない。毒殺したい。」

「いや。素直に羨ましいと言えればいいじゃん。それに、毒殺したいなんて冗談でも言うもんじゃないよ。」

と僕はツツコンでみたけど、圭にスルーされ、庄一は何も言ってくれなかった。

本気、じゃないよね？ね？

と、気まずい雰囲気の流れたところで圭が口を開いた。

「……………詳細が聴きたいなら、放課後にいつもの場所で。」それを受けて僕達は、

「応。分かった。」「うん、いつもの場所だね。」

と言った。その時に、授業が始まったので僕は教壇に視線を向けた。

一校時目が終わり、僕は次の授業の準備をしながら話していた。「それにしても、レイジニアさんって頭いいね。」

「だよなあ。さっきの時間に指された時だって平然と答えてるもんなあ。しかも正解してたし。」

「そうだね。」

と言いながらレイジニアさんの席を見ると、人だかり（主に女子）が出来ていた。

「まあ、珍しいわな。転校生ってのは、いつだって。」

と庄一が言っていたら、今まで会話に参加していなかった圭が口を開いた。

「……いつ殺す？」

「ちょっと待って。誰を殺すのかは大体想像できるけど、そんなことしたら清水さん達に殺されちゃうよ。」

「分かっている。けどな、男にはやらなきゃいけない時があるんだ！僕が止めようとしたら、庄一まで話に加わった。そしたら、その話に反応したクラスの男子がこちらに集まって、

「だよなあ。」 「なんだお前ら、中島の事殺るのか？」 「だったら俺も混ぜろ。」 「俺もだ！」 「あいつだけってのは許せねえしな！」 「そうだそうだ！」

収拾がつかなくなっていた。

僕はもう諦めて、授業の準備をし終わったら寝ることにした。

そんな僕の事は放って置かれて、庄一と圭が中心となって話し合いが始まった。

「おい、いつやるんだ？」

「昼休みでいいだろ。」

「でもどうするんだ？中島に接触するにしても、結構大変だろ？」

「……そこは中島の性格を利用する。」

「あいつはお人好しだからな。」

「でもその後はどうする？接触した後は？」

「そこは即行連行して、人が来ない場所に連れていけばいいだろ。」

「その場所は？」

「俺、いい場所知ってるぜ。」

「よし！次の授業の休み時間は班分けと場所の確認だ。解散。」

庄一がそう言ったと同時に先生が来た。

先生は「早く席に着きなさい。」と庄一たちを注意して授業を始めた。

六月下旬のある日（2）

二校時目が終わった休み時間。僕は途中からしかノートを書いてなかったので、誰にノートを借りようか悩んでいた。本当は、圭か庄一に借りたかったんだけど、終わったと同時に何処かへ行ってしまった。次は魔術師の人たちの授業があるため、僕達は自習。それを利用してノートを書き写したかったんだけど男子はみんないなくなってるし、女子も魔術師の人はいないから、ここにいるのは超能力の女子たちと、レイジニアさん。それと、僕と同じで普通の女子。さてどうしたものかと悩んでいると、

「何か悩み事でも？」

と声をかけられた。

その声に顔を上げるとそこにいたのは

「レイジニアさん？」

そう、レイジニアさんだった。

「憶えてくれたの？やっぱり珍しいから？」

僕が名前を呼んだだけで、レイジニアさんはそう訊いてきた。確かに珍しいけど：

「最初の発言で忘れる人はいないんじゃない？」

「そう？」

そこで不思議がらないでよ。とツツコミたかったけど、僕は最初に言われた一言が気になった。

「ねえレイジニアさん。」

「なに？」

「どうして僕が悩んでると分かったの？」

そう僕が訊くと、レイジニアさんは笑い出した。

「ちよっとお、笑わないでくれる？」

「ご、ごめんなさい……………ちよ、ちよっと思い出しちゃって。」

「もう。」

何を思い出したのかはあえて訊かない。だって、藪をつついて変なものが出てほしくないから。

ひとしきり笑った後、レイジニアさんはこう言った。

「で？ 何に悩んでるの？」

僕の質問はスルーですか。と言いたかったけど、彼女はまたスルーするだろうと思ったので、言わなかった。そして改めて彼女の容姿を意識してしまった。

そのせいで、

「ちょ、ちよつとさっきの授業の事でね！」

最初と最後がおかしくなった。この気持ち、わからないかな？

すると、レイジニアさんはクスリと笑ってこう言った。綺麗だなあ。

「さっきの授業？ どこ分からない所でもあったのかしら？」

「いや、違うんだ。ノートを半分取り忘れてね。」

こうなったら正直に言うしかなかった。そしたら、
「そうなの？ それだったら貸してあげるわよ？」

と言って、レイジニアさんは自分の席に戻ってノートを取って来てくれた。

「はい。」

「あ、どうもありがとう。」

僕はレイジニアさんにお礼を言ってから、ふと気になることを訊いてみた。

「ねえレイジニアさん。」

「まだなにか？」

「どうしてこんなことしてくれるの？」

そう訊くと、レイジニアさんはちよつと考えてから、こう言った。

「ハジメのおかげかしら。」

「え？」

「ハジメが『人の気持ちは憎しみだけじゃない！！ 優しさだってあるんだ！！』って言うてくれたから。こうやって一人でも多くの人

と仲良くなろうとしてるの。」

中島君ってたまにいいこと言うよね。そう思っ僕はこう言った。

「何があったか知らないけど、今は楽しいでしょ？」

僕が言ったことにレイジニアさんはちょっと驚いたけど、

「そうね。ハジメのおかげで楽しいわ。」

と言っ自分の席へ戻っていった。

僕はというと、レイジニアさんから借りたノートを書き写すことにした。

授業が始まっってから十分後、男子連中（魔術師以外）が戻っきた。

でも、結局は誰も注意しなかった。面倒だから。僕はレイジニアさんのノートを書き写していたから。

レイジニアさんのノートはとても分かりやすかった。字もきれいだし、要領よくまとめられている。僕も一応「綺麗」にまとめているけど、彼女はそれより上だった。

そのおかげで、書き写すのにそう時間がかからなかった。

僕がノートを返そうとしていたら、庄一たちが席に着いたので、僕は自習道具の下にノートを置いて勉強してるふりをした。ノートを広げてるだけなんだけどね。

庄一と圭が席に着いてから、僕は訊いた。

「ずいぶん遅かったね。」

「ああ。色々決めなきゃいけなかったもんでな。」

「……いつでも決行可能。」

なんだかすごいことになったなあ、と思っながら僕は一応忠告することにした。

「二人とも、やる気はないの？成功しても失敗しても大変なことになるからね？」

「止めんじゃねえぞ。俺達はどうやるしかないんだ。」

「……男の敵の抹殺での死は本望。」

でも駄目だった。この二人はやる気満々だった。恐らく、このクラ

スの男子は僕を除いて全員が中島君を殺そうとするだろう（比喻でも揶揄でもなく）。

この後の男子の末路が想像できてしまったため、僕は暗澹たる思いだった。

六月下旬のある日(2) (後書き)

男子の暴走がひどすぎる (笑)

六月下旬のある日(3) (前書き)

男子の暴走って、FFF団に似てますよね。

六月下旬のある日(3)

三校時目が終わり、この後の授業が終われば昼だと思いながら僕はレイジニアさんの席へ向かった。ちなみに、他の男子は何処かへ行ってしまった。恐らく最終確認をしているのだろう。

「レイジニアさん。」

「なにかしら？えーっと、さっき話したのは分かってるけど、名前は覚えていないの。教えてくれない？」

そうだろうと僕は思っていたので、改めて自己紹介をした。

「池田連だよ。連でいいよ。」

「そう、レンね。もしかして、さっきのノート分かりづらかった？」
そう訊いてきたので、僕は必死に否定しながらこう言った。

「ち、違うよ！！とても上手にまとめられていたさ！終わったから返そうとしていただけだよ！」

「あ、そうなの？それならよかった。」

と、安心した様子のレイジニアさん。

いい人に見えるけどなあ、と思いながら僕は、レイジニアさんにノートを返した。

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

用事が終わったので、僕は自分の席に戻って授業が始まるまで待つことにした。明日からの男子の立場がなくなるなあ、と思いながら。

男子が戻ってきたのは、始まる五分前だった。

中島君は、男子の行動にちょっと疑問に思ったみたいだけど、特に気にしていなかった。

僕は心の中で、中島君にごめん、と謝ってから授業に集中した。その間も、僕はどうしようか考えていた。クラスメイトの奇行（凶行）を、どうやって防ごうかという事を。

まず、女子に言う。これは男子の立場が危うくなるのと同義なの

で却下。

次、というかこれしかないんだけど、僕が何とかするしかない。一番手っ取り早いのは、狙われる本人に告げる事なんだけど、これをやっても結局最初の案と結果が変わらないので考えていない。

僕はノートを取りながらそのことを考えていると、

「池田！！これに答えてみろ！！」

僕が指名された。

あまりにも突然だったため、僕は思わず、

「ひゃ！はい！？」

と言ってしまった。

やっちゃったー！と僕は心の中で思った。辺りを見ると、みんながクスクスと笑っていた。

先生も苦笑しながらこう言った。

「池田。考え事でもしてたのか？それより授業に集中してほしいんだが。」

僕は恥ずかしい気持ちになりながらも、

「あ。すみません。」

と言った。

「まあいい。それで？この答えは？」

先生が指した問題を、僕は何とか答えて座った。これっていつも緊張するんだよね。

その時に、庄一と圭が僕に言ってきた。

「なんだよさっきの声はよ。」

「……女子みたい。」

僕は二人に呆れながら言った。

「そのことはいいよ、もう。ていうか、君たちのせいなんだけど。」
そう言うと、二人とも首をかしげながら先生に視線を戻した。

全くもう。そう思いながら、僕も黒板に視線を戻した。
どうやって奇行を阻止しようか考えながら。

六月下旬のある日(3) (後書き)

人の執着心って正直怖い。

六月下旬のある日（4）

そして、昼食の時間。

結局、いい案が出ないままこの時間が来てしまった。

もうなるようになれ、と僕は投げやりに思って弁当を出した。

中島君を除いて、他の男子はどこかへ行ってしまった。きっと待ち伏せする気なのだろう。

その中島君はというと、清水さん、寺井さん、レイジニアさんに囲まれていた。

これなら心配いらないね。そう思って、僕は一人で弁当を食べようとした。

したんだけど………………………。

誰かが見てる気がしたので、僕は食べるのを中断して辺りを見渡した。

見ていた人はすぐに見つかった。

中島君が、こちらに助けを求めるように見ていたからだ。

目が合った。

その後の反応が凄かった。

中島君は僕の席の所まで机をよけながら急いできて、女子三人は中島君の行動に取り残されたみたいだった。そして、僕の席について早々中島君はこう言った。

「一緒に弁当食べない!？」

「へ？」

いきなりだった。僕はちょっと驚いたけど、女子三人の方が驚いていた。

でも、中島君の目が必死だった。

どうしてなのか疑問に思ったけど、一人で食べるのも味気ないと思ったので「いいよ。」と言った。

それを聴いた中島君はものすごいホッとした顔で、庄一が座って

いた席に座って、僕と対面する形で弁当を広げた。

僕はその弁当を見て思わず言った。

「結構入ってるね。」

その言葉を聴いた中島君は、ちよつと僕の弁当を見て、

「僕の両親が『たくさん食べて立派になりなさい。』って言うからね。そういう君だっておかずに沢山あるじゃないか。」

と言った。僕は苦笑しながら言った。

「これは単純に夕食と朝食の残り。両親の弁当にも同じものが入ってるよ。」

「そういえば池田君って自分で料理作ってるんだっけ？」

そう僕に訊いてくる中島君は、僕の事を尊敬のまなざしで見ているようだった。

僕は弁当を食べながら言った。

「そうだよ。君は両親がつくってくれるんでしょ？ いいね。」

「そうかな？」

そうやって話しながら弁当を食べていたら、

ダン！！×3

僕らは包囲されていた。

「元君？^{はじめ}どういうことですか？」

「ハジメ、言い訳を聴こうかしら？」

「元？^{はじめ}どういう事か説明してもらおうわよ。」

そう言った順は右から、寺井さん、レイジニアさん、清水さん。

どうやら、中島君の行動のせいで怒り心頭のようにだ。そして僕はトバッチリ。

中島君は必至に説明しようと頭を働かせるみたいだ。僕は被害者なので何食わぬ顔で昼食を食べていた。

そして、考えがまとまったのか中島君が言った。

「たまには男子同士で食べるのもいいかな、と思ったんだよ。ほら、いつもみんなと食べてるでしょ？」

その言葉に対して、

「私は今日が初めてなんだけど。」

レイジニアさんが言ったことによって、また考えざるを得なかった。仕方ないのかな？と僕は思いながら中島君を助けることにした。

「僕が誘ったんだよ。昨日スーパーで会ったときにね。」

その僕の言葉を受けて、女子三人は中島君に問い詰めるように迫り、中島君はコクコクと頷いていた。

それで女子三人は納得したみたいだ。でも、その後の行動には僕は驚いた。だって：

「ならお邪魔しても良い？」「お邪魔しても良いですか？」「邪魔するわよ。」

と言って僕達の周りの席に座った。って、確認の意味ないじゃん。そうしていたら、いつの間にか僕と中島君の周りに女子三人が囲んでいた。

つ、つらい・・・・・・。

そう思いながら僕は、昼食を再開した。そうしていたら、ふと信じられない光景が僕の目に映った。

「ねえ元^{はじめ}？これとそれ、交換しない？」

「いいよ。」

「じゃあ。私から行くわよ。はいあゝん。」

凄いね。中学三年生にもなると公衆の面前で「あゝん」ができるんだね。

あまりにもびっくりしたので、僕はマジマジと見てしまった。

それに気付いた中島君は、清水さんに慌ててこう言った。

「ちょっと久実！？池田君見てるから！いや、誰かが見て無くてもやめてほしいんだけど！？」

それを聴いた清水さんは不満顔で言った。

「いいじゃない。私達の愛が認められるんだから。」

「僕は認められて欲しくないんだけど！？」

中島君。大変だね。

僕は同情しながら自分の弁当を食べていた。そしたら、今まで黙

つっていた寺井さんが、

「は、元君！^{はじめ}私のも食べてくれませんか！？」

と言ったら、僕とレイジニアさん以外の箸が止まった。

？どうかしたのだろうか？

レイジニアさんもそう思ったようで、

「どうしたのよハジメ。どうしてスマレの発言で肩が震えているのかしら？」

と訊いていた。

あ、本当だ。よく視ると二人とも小刻みに震えてる。しかも、汗をかいてる。

寺井さんの弁当には何があるのだろうか？

ふと疑問に思ったけど、さわらぬ神になんとやら。僕は追及しなかった。

代わりに、レイジニアさんが中島君に訊いた。

「スマレの弁当は何かあるの？」

すると、中島君はパニクリながら言った。

「い、いや、べ、別に！？何もないよ！？」

それならどうしてさっきは震えていんだい？

簡単に追及出来るくらいのボロが出てきたけど、聴かなかったことにした。

これに業を煮やしたのか、寺井さんが中島君に迫って、

「いいから食べてください！！」

「フゴォ！？」

自分の弁当のおかずを、中島君の口に入れた。

すると、

「ゴファ！！」

という音と共に、中島君が机に倒れこんだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕とレイジニアさんは互いの顔を見た。清水さんは「うわっちゃあ……………」と言いながら天を仰いだ。

食べさせた寺井さんかというと、

「ど、どうですか？」

中島君の様子を気にせず味の感想を訊いていた。

これを見た僕とレイジニアさんは寺井さんに聴こえない様に清水さんを交えて話していた。

「(ちよつとクミ、スマイレの弁当でもしかして……)」

「(まずいの?)」

「(まずいもんじゃないわ。もはや兵器よ。ちなみに、あれは手作りよ。)」

「(……どうやってたらそんなものができるのかしら?)」

「(意図してつくれるものじゃないよ。)」

「(私に元をとられたくないからじゃない?)」
要するに嫉妬ですか。

それだけでよくあんなものが出来るね、と僕は他人事のように思った。

と、何とか意識が回復したらしい中島君が、

「う、うう。い、池田君。君のおかず欲しいんだけど……。」

何故か僕の弁当のおかずを要求してきた。

え?ここで?

その言葉に女子三人も驚いた。なので、

「「「どうしてこいつなの!」」」

見事にハモった。……これは泣きたくなるね。

そんな僕の気持ちを知らずに、中島君が言った。

「池田君の……料理は……おいしいんだ。久実と堇は知ってるよね?」
それにもかかわらず、

「え?」「そうなんですか?」

疑問で返された。

これが普通の反応だと思うんだけど……。

そう思っていたら、レイジニアさんがいきなり、
「レン。これ、もらうわよ?」

と言って僕のおかず（卵焼き）を一つ食べた。

モグモグモグ……………」

レイジニアさんが食べている間、清水さんと寺井さんはじっと見ていた。

僕はというと、

「大丈夫？中島君。」

「いつものことだから何とか……。」

中島君の心配をしていた。中島君の顔がまだ青かったから。

これを見て僕は何もできないと分かったので、大人しく食べようとしたら、レイジニアさんが食べ終わったみたいで、二人が感想を訊いていた。

中島君はというと、

「そういえば……二人は同じクラスになったことないんだっけ……。」

と言っていた。同じクラスになっても、多分僕の事は知られていないと思うよ。

「どうだったの？」

「どうなのですか？」

それを受けたレイジニアさんは、数秒沈黙してから口を開いてこう言った。

「……………おいしいわ。」

「「え？」」

「ね、いったでしょ？」

レイジニアさんが言った時に、何故か誇らしそうにする中島君。僕はというと、

「へえ〜。」

完全に他人事だった。

なので、そのまま食べていると、清水さんと寺井さんも僕のおかず（今度は唐揚げ）を一つずつ、勝手にとって食べた。僕のおかずがなくなっちゃうんだけど。

そして、食べた二人は、

「「おいしい!!」」

と、叫んでいた。その声で辺りはこっちを見たけど、それも一瞬の事で、すぐに集まっていた人たちの会話を再開させた。

そして、叫んだ二人はというと、

「あなた!どうやってたらこんなおいしいものがつくれるの!?!」

「よろしければ教えていただけませんか!?!」

「お、落ち着いてくれませんか!二人とも!!」

僕に詰め寄ってきたので、僕はこう言うしかなかった。

六月下旬のある日（4）（後書き）

主人公が一番苦労します。

六月下旬のある日(5)

そうやっていたら、

ガラッ!

「くそっ! 結局来なかったぜ! どこにいったんだ? ……ん?」

「……………いつもならあそこに来ていた。……………何?」

「え?」

庄一と圭が他の男子と一緒に教室に戻ってきた。そして、僕と目が合った。

……………

「さらばだっ!」

と言って、僕はあらかじめ開けておいた窓(風通しを良くするため)から外に出て、ベランダを走っていった。

残された中島君たちは、僕の行動が理解できなかったのか固まってしまい、庄一たちは

「……………連を連れてこおおおい!」

「「「「おっしやーーーーー!」」」」

と言って同じく窓から出てきた。……………数人は。

残った人たちは、固まっていた中島君に気付いたみたいで、

「「「「標的発見!」」」」

「「ヤレ。」」

「「「「イエッサー!」」」」

というやりとりをして、中島君に襲い掛かっていたみたいだった。みたい、とは、僕がその現場を見ていなくて声だけだったわけで、どうしてかという、僕は逃げていたからで。それもどうしてかという、

あの状況を何も知らなければ勘違いされるよね。

そんなわけで、僕はベランダの端まで走ってから、跳んだ。文字通

り、ベランダから校庭へと。

「冒険するもんじゃないね――――！！」
ダン！！

「~~~~~~~~ッ！！！！」

何とか着地できたけど、僕の両足にすごい衝撃が来た。……後の授業、保健室で過ごせそうなくらい痛かった。

僕を追ってきた男子は、まさか飛び降りとは思わなかったのか、その場で少しためらったけど、結局教室に戻っていった。

僕は、戻ったとしてこれからどうしようか考えながら教室に戻ろうとしたら、

「「「うああああ！！」」」

という声とともに男子が窓から出てきた。僕はその光景を見てこうつぶやいた。

「あゝあ。こうなっちゃったか。明日からどう合わせていこうかな？」

そして、よく視るとその中に圭と庄一がいた。というか、僕と中島君以外の男子が全員、宙に浮いていた。

僕は、その光景を見て『やっぱり僕は普通だな』と思いながら、まだ痛みが引かない足で教室に戻った。

教室に戻ると、未だに男子たちは宙に浮いていた。そして、自分の席に戻ると、中島君が訊いてきた。

「池田君、大丈夫？　ていうか、怪我しなかったの？」

「ベランダから飛び降りる、という発想に驚くのが普通だと思うんだけど。」

「そうかな？」

どうやら、僕が決死で飛び降りたのは中島君にとっては普通だったようだ。

つくづく住んでる世界が違うと思いながら、僕はさっさと弁当を

食べていった。その光景を見た中島君とレイジニアさんは、

「あ！もうすぐ授業だ！」

「ならさっさと食べないとね。その二人も男子にかまってないでさっさと食べなさい。」

と言って自分達の弁当を食べ始めた。その言葉で我に返ったのか、庄一たちをベランダに降ろしてから、二人も弁当を食べ始めた。

こうして、騒がしかった僕達の昼食は終わった。寺井さんの意外な一面と、男子の立場がなくなったことによって。

・・・・・・・・・・・・・・・・明日からどうしよう？

六月下旬のある日(5) (後書き)

男子が暴徒と化しました。

六月下旬のある日(6) (前書き)

ふとした疑問って、すぐに忘れるんですよね。

六月下旬のある日(6)

さて、午後の自習の時間。(要するに、超能力の人達専用の授業) 昼の行動のせいで、早くも男子の立場がなくなりつつある。さらに、清水さん達の警戒心が一層高まったことにより、うかつに中島君に近づけなくなった。

これからの行事でまともれるのかな？

ふとそんなことを考えてしまうこの頃。僕は自習中にもかかわらず、何もやっていなかった。

そしたら、

「連もそう思うだろ？」

「え？あ、ごめん。聴いてなかった。」

「だからよお、このままやられっぱなし、てのも癪じゃね？」

「もうやめた方がいいよ。これ以上やったら明日からの立場がなくなるよ。」

「……それでも、やらなきゃいけない時がある。」

すると、圭も会話に参加してきた。その気持ちを他の事に注げないだろうか？常々僕はそう思う。

そんなことを思っていたら、庄一が僕に訊いてきた。

「そーいやよ、お前どうして中島たちと昼食食べてたんだ？」

「……答えようによっては対象に入る。」

圭の言葉に、僕は反射的に「なんの？」と言いたくなっただけど、きつと僕にとってうれしくないものだろう。

さてどう答えたものか。そう思って僕は、考えてからこう説明した。

「一人で食べようとしたら中島君が来たんだよ。一緒に食べない？って。」

ある程度の事実を言わないで、ありのままの事を言った。なんとなく、そうした方がいいと思ったから。

その説明で、二人は納得したみたいだ。

「昼の時はスマン。」

「……同じく。」

こうやって僕に謝ってくれたから。

「いいよ。それよりさ、気になることがあるんだけど。」

と、僕がそう言うと、

「気になること？中島なら二年の頃から同じクラスだろ？……あ、そうか。連は知らないんだっけ。あいつ、去年は引きこもってて学校にはほとんど来なかったんだ。しかも、来るときは必ずお前が休んでた時。当時の俺と圭はお前たちの関係を疑ってみただけだよ、全く見つからなかったから偶然だと思ったんだよな。」

「……（コクン）」

庄一が説明してくれた。あれ？そしたら……………、

「どうして中島君は僕が料理上手だって知っていたの？」

そう。僕と中島君が入れ違いで学校に来ていたのなら、僕が料理上手だってことは知らないはずだ。それなのに、どうして知っていたのだろう？

その疑問は、圭が教えてくれた。

「……当時、クラスの連中が連の話題で盛り上がった時があった。その時に、中島が来てその話を聴いていた。だから知っていてもおかしくはない。」

僕がいないときにどういう話をしていたんだろう？

そう疑問に思ったけど、触れて良い事はなさそうだったのでかわりに、

「どうして中島君は引きこもっていたの？」

中島君のことを訊くことにした。

これに答えたのは、もちろんというか、圭だった。

「…進級前に起こった、暴走事件を引き起こしたから。」

「ああ。あの事件か。当時本気で怖かったな。今は憎い標的ではないけどな。」

「諦めなつて。……そうなんだ。あそこまで立ち直れたのは色々な意味で凄いね。僕だったら自殺してるんじゃないかな？」

「……それは言える。」

「否定してくれない？」

「まあまあ。」

僕の冗談を本気で肯定した圭。それをなだめる庄一。

きっと、僕にとっての圭と庄一がそうであるように、中島君もまた清水さんと寺井さん（レイジニアさんはちょっと違うかな？）のことを大切な友人だと思っているんじゃないかと、僕は思う。

そうじゃなきゃ、今学校に来ていないだろうから。

六月下旬のある日（7）（前書き）

今回は、元たちが時系列でいう二週間前に遭遇した事件の、裏事情です。

六月下旬のある日（7）

放課後。僕達はいつもの場所に集合していた。

「久し振りだね。ここ。」

「そうだな。さっさと行こうぜ。」

「……周囲には誰もいない。」

圭が周囲の確認をしたので、僕達は学校の敷地内の隅にある、地下室へと続く道があるドアを開けて入っていった。

これを見つけたのは圭だった。

本人が言うには、ここに入った時には既にあることは知っていて、何度か使っていたんだって。僕と庄一は友達の証として教えてもらったんだ。

今では、僕達三人が誰にも聞かれない話（事件の裏事情など）をする時や、集まってなにかする時に使っているんだ（先生達にも知られていない。）。

地下室へと続く道を歩きながら、僕達は話した。（圭は懐中電灯を常備していて、圭を先頭に、僕、庄一の順である。）

「しかし、この地下室って何のためにつくられたんだ？いつも使ってる部屋だって、最初見た時は机と椅子だけだったろ？」

「そうだね。他にも部屋があるみたいだけど、なんか薄気味悪くて近寄れないよね。」

「……昔、ここは軍事基地だったらしい。」

「え？」 「マジかよ？」

「……………」

それっきり、圭は何も言わなかった。

しかし、軍事基地、か。僕はなんとなく納得できる気がした。恐らく庄一もそうだろう。

そして、

「……………ついた。」

「毎度のことながら、緊張感があるよな。」

「そうだね。」

と言って、僕達はいつも使っている部屋に入っていった。

その部屋は、僕達三人が入っても大丈夫なくらいの部屋の広さ。最初は腐った机と椅子だけだったけど、僕達が掃除や色々を持ち込んでいたために、一人暮らしの部屋と勘違いされてもおかしくない部屋になっていた。

僕達は、自分たちが使っている椅子に座った。ドアに近いのが、庄一。奥にいるのが圭。僕は二人の中間。そして、それぞれの荷物も椅子の近くに置いてある。

「庄一、掃除したら？」

「家に置いといたら、両親に何言われるか分からねえからここに置いてるんだよ。そういう連は……本当に少ないな。たまには何か買ったらどうだ？」

「僕の財布はそんなに余裕がないんだよ。しかも家計の事で大変なんだから。」

「……完全に主夫。」

「というより、執事か秘書、または使用人だろ。」

使用人は財産管理などしないんじゃない？……と僕は思う。

そんなことより、

「圭。今日の朝言ってたこと聴かせてよ。」

と僕は言った。圭は頷いてから、説明しだした。

「ん？」

「どうかしたのレイジニア？」

「何か言われそうな気がしたのだけれど……気のせいかしら？」

「そう？」

「……まあいいわ。それより、行くわよハジメ！」

「待ちなさいよ！！」「待って下さい！！」

ここからまた修羅場となる、なかじまはじめ中島元であった。

「…まず、先週まで騒がれていた、ゾンビの件。」

説明の初めに圭がそう言った。すると、庄一が、

「ああ、あれだろ？誰がやったのか分からない連続殺人。で、現場で目撃されたのはゾンビで話題になったやつ。」

と言ったことに圭は頷いて言った。

「…あの騒動の被害者は、みんな共通点があった。それは、七年前に起こった『レイシア地域連続殺人』の容疑者に挙げられ、結局証拠不十分で釈放された容疑者たちだった。」

レイシア地域連続殺人。これは子供だった僕でも知っていた。

この事件での死亡者は延べ百人超。この事件は特異性が三つある。まず、その死亡者の人数。次に、犯行手段。一人でやるにはだいぶ大がかりな方法だと言っていた。そして最後は、犯人達が特定されたにもかかわらず、証拠不十分で釈放されたことだ。

「でもどうしてそいつらが殺されたんだ？」

庄一は、圭に対して訊いてみた。それに対して圭は、

「……ここから先はオフレコ。」

と言って説明した。

「……七年前のあの事件で、目の前で両親が殺された少女がいた。

その名前は、レイジニア・ゼロ。」

「！？」

なおも説明は続いた。

「…その少女は警察に保護された。そして、犯人の特徴を覚えていた。それが」

「……犯人特定に至ったものか。」

圭の説明の途中で、庄一が口を挟んだ。その言葉に対して、圭は頷いた。心なしか、二人ともいつもより口調が暗い。

それは無理もないことだ、と僕は思った。いつものように事件の裏話を聴いていただけなのに、こんな悲しい過去を知るなんて。

それでも、圭は説明を続けた。まるで、最後まで説明するのがこ

の事件に対しての供養だというように。

「…しかし、それもむなくそいつらは釈放された。その時に、少女は絶望したのだろう。この世界に。だから……」

「自分で復讐することにした。」

「…そうだ。しかし、これには協力が必要だった。」

「七年もたつてりゃ、人は変わっちゃまうからな。」

「……そこで、彼女を誘った人物がいた。それが、クレス・光秀・ヒルハルト。」

ところどころ僕達は口を挟んでいたけど、圭は説明していき、知らない名前が挙がった。

「誰？」

「…表向きは俺達と同じなんの力もない青年。裏では、人を言葉巧みに操るペテン師。そして、裏社会では『罪をつくる者』クライム・メイカーと恐れられていた。さらにいうと、こいつが、七年前と今回の事件の首謀者。」

「「!？」」

僕達はまたしても驚いた。こんなにも早く今回の真犯人が出てくるとは思わなかったからだ。

「…クレスは、七年前の事件の後始末を彼女の復讐という形で済ませ、自分は高みの見物をしていた。」

こうやって、若干想像の部分が入るけど、圭の言っていることは正しいと思う。なんたって、情報の整理、収集、気持ちの推測が、圭の最も特徴的なことだから。

「…この騒動が始まったのは、三週間前。中島たちはその一週間後に情報収集と犯人の追跡をしていた。そして、彼女―レイジニア・ゼロと対決し、彼女を捕まえた。その時にクレスの卑劣な攻撃により、中島たちは彼女と引き離され、クレスは消えていった。その後、クレスのアジトを見つけて侵入し、レイジニアを人質にするもあえなく逮捕。現在クレスは刑務所におり、彼女は被害者という事により、学校で経過観察となっている。」

これで、この事件の説明は終わり。にもかかわらず、圭は何か言いたそうな顔をしていた。

「まだあるの？」

「……………今回、とても不思議な現象が起こったらしい。確証はとれていない。」

「珍しいな。お前が確証をとっていないなんて。」

「……………クレス曰く、『世界が崩れた景色を見た。』だそうだ。恐らく中島の力だろうが、全く不明。過去類のない話だと言っていた。」

中島君の力がなんなのか。それを調べてみたいと圭は思っているんだろうな、と僕は考えた。

これで、一つ目の話は終わった。

「なるほどな。いつもよりヘビーだったが、理解はできたぜ。……………中島の勇姿で惚れたんじゃないやあ、俺達が勝手に憎んでるだけだな。……………さて、いかにして説明しようか？」

感想としてこんな事を言う庄一。説明する対象は、クラスの男子。言う事は、「俺達の非を認める」こと。

「まあ、庄一ならできるよ。頑張れ。」

「……………クレス並みの話術。」

僕はそんな彼を応援するだけ。すると、庄一がこう言った。

「おいちよっと待て。連はいいとして、圭。お前も考えろ。お前も俺と同じなんだからな。」

言われた本人は、

「……………次の話をする。」

話題をそらした。

「次って？」

「……………レイシア地域連続殺人の件。」

「なんで今更？」

と庄一が訊いたら、圭はちよっとだけ笑った表情をつくりながらこう言った。

「いい質問。……………先も言った通り、今回の事件とこの事件はつなが

っていた。まず、真犯人。次が、そこに出てくる登場人物。最後に……人の心。」

「「は？」」

圭が最後に言った言葉に、僕達は揃ってクエスチョンマークを頭に浮かべた。

「どうということだ？」

そう庄一が訊いたら、

「…順を追って説明する。まず、レイシア地域集団殺人の概要から。この事件は、ある日その地域で同時に人が死亡するという事件が起こった。その日の死亡者は三人。次の日も同様に死亡者が現れる。その数は倍の六人。そうして日を追うごとに死亡者は増えたある日、一人の少女が保護され、犯人たちの特徴が分かり、逮捕した。これで、最初と次の説明は終わった。残るは…」

「最後の、人の心。これはどうして出てきたの？」

圭の説明が最後の方になったので、僕は訊いてみた。

「……その逮捕者で、一人だけ今回殺されなかったやつが居た。なぜなら、そいつは釈放された後に殺されたからだ。」

そう言った圭は、その人に対して尊敬の念を送っていたみたいだった。そして、話は続いた。

「……推測だが、そいつは釈放された後、日記か何かで自分の罪を認めることを書いて誰かに送ったのだろう。そして、自首しようとしたら……」

「仲間に殺された。」

僕がポツリと言った言葉に、圭は頷き進めた。

「それは人の心、罪の意識が存在して、なおかつ勇気のある行動をしようとした人がいた。それを中島達はレイジニアに伝えたのだろう。レイジニアはそれを知って抵抗をやめ、大人しく捕まることを選んだ。」

「なるほど。」

「だから人の心なんだ。」

僕達がそう言うのと、圭は「だからお前達とは仲良くできる。」と言
ってから話していった。

「二人の考え通り、彼女もまた罪の意識に、その時苛まれただろう。
だから、捕まるという行動にでた。これで、すべてのキーワードが
今回と七年前でつながった。」

最後に圭は、「……七年前の事件の動機は、『人が大量に死ぬこと
があったら世界はどうなるか』だったそうだ。」という言葉で締め
くくった。

六月下旬のある日(7) (後書き)

人の思いは強いですね。

六月下旬のある日（8）

僕はその言葉に怒りを覚え、庄一は壁に向かってパンチを繰り出した。

「くそっ！じゃあなんだ！？あいつの実験のせいであんなに人が死んだのか！？そのせいで殺しをする必要のない人が殺しをしたのか！？関係のない人が沢山死んだのか！？」

庄一はそう言いつつ、壁に向かってパンチを撃つのをやめなかった。そのうち、壁に血がついていった。

僕達は、それを止めずに見守っていた。ここで何か言っても無駄だと分かっていたから。

手から血がポタポタと流れ落ちていった時、庄一はようやく落ちて着いた。

「落ち着いた？」

「ああ。包帯かなんかないか？」

「……ここにある。」

そう言って、圭は包帯を庄一に渡した。

その包帯を巻きながら、庄一は言った。

「…仕方ない。中島をやる計画は止めだ。明日は中島と寺井達に謝るか。」

その言葉を受けて僕達は、

「……庄一がそう言うなら。」「これで元通りになるのかな？」
と言った。

それから僕達は、少し喋ってから家に帰った。

「ただいま。」

と言って、僕は家に入った。時刻は五時くらいだから、両親は帰ってきていない。あの人たちの帰ってくる時間はまちまちで、僕が普通に帰ってくるときにはいる時もあるし、十時くらいに帰ってくる

日もある。そういう時は連絡が来るから分かるんだけど。

「さくってと。自分の部屋に行ってからにしようっと。」

そう言っ僕は、階段を上がって二階にある自分の部屋に向かった。この家は二階建てで、二階は両親と僕の部屋がある。一階が日常生活をするための場所。

僕は自分の部屋のドアを開けて、中に入った。

「……と言っても、何かあるわけじゃないしね。」

僕の部屋にあるもの。それは、勉強机とベッドと本棚とタンス。

床には何も散らかってはなく、綺麗。

ベッドは、シーツの乱れなどなく、綺麗。

本棚には、料理本と小説。それと、家計簿として使ったノート（過去十年くらいでノート三十冊超）が綺麗に並べられている。

タンスには、自分で買った服が綺麗に畳まれて入っている。

そして勉強机は、机の上には何も置いてなく、収納できるところには教科書や書き終わったノートが収納されている。

僕は、鞆を机の上に置いて明日の準備をした。そうでもない夜にはできないからね。

それが終わってしまったので、僕はベッドで横になって天井を見ながら考えていた。

レイジニアさんの過去。今回の事件のこと。七年前の事件のこと。

中島君の力のこと。

そして、明日の男子はどうなってしまうのか、という事。

.....切実だ。

そんな考えが頭をよぎったので、僕は一階で夕飯の準備をすることにした。気分転換としてじゃないよ？もうすぐ夕飯の時刻だったからだよ？

夕飯の準備が終わった時、

ピンポン！！

玄関の方からチャイムの音がした。

僕は、宅配か何かかな？と思って、判子を持っておきながら「は

「いい。」と言って玄関へと向かった。

「どちらさまですか？」

そう言いながら僕は玄関のドアを開けた。そしたら、やはりいうか案の定、宅配便だった。

「こんばんは！コミレ宅急便です！！荷物をお届けに上がりましたので、判子をお願いします！」

その人は段ボールの箱を持ちながらそう言った。

僕はその宛先と送り主を確認してから、

「分かりました。」

と言って、判子を押して荷物を受け取った。

宅配人は、「確かにお届けしましたー！」と言ってトラックへ戻っていった。

それを確認した僕は家に入って、リビングへ荷物を持ってきてからそれを開けた。

「これは確か……ああ！やっぱり！僕が頼んだものだ！やっときた！」

その中身は、僕の好きな作家の新作小説だった。商店街にも本屋さんはあるけど、僕の好きな作家は、マイナーすぎて店に置かれていない。注文すればいいんだろうけど、そうするといつ届くか分かるまで本屋に行かなくちゃいけないくなるので、やらないでネットで注文する。

そうすれば、指定した日時に届くし料金は先に払っておけば問題ない（自分で貯めたお金だよ）。

僕は段ボールの箱をいつもより早く片付け、早速読もうとしたけど夕飯を食べてからにしようと思い、本はテレビに近いテーブルの上（テーブルは二つあって、片方はテレビに近く、片方はキッチンに近い。）に置き、一人で夕食を食べた。

六月下旬のある日(9) (前書き)

池田家に訪問者が・・・・・・。

六月下旬のある日（9）

食器を片付け終わって、早速読もうとしたら、電話が鳴った。

電話が終わってから風呂沸かさないといけないとなあ、と僕は思いながら電話に出た。

「もしもし池田です。」

『あ、連？』

「父さん？何か用？」

『もうすぐ帰る。母さんも一緒。』

「分かったよ。風呂沸かして、料理温めて待ってるから。」

『助かるYO！』

そう言われた僕は戸惑ったけど、電話が切れたので言った通りの事をやった。

風呂を沸かして、つくった料理を温めた。ま、たいして時間は必要なかったけど。

それらが終わったので、僕はテレビに近いテーブルに置いてある本を読み始めた。

ちなみに、好きな作家は水蓮さん。この人が書く小説はとても面白いんだよ。認知度は低いけどね。

今までの作品でお気に入りなのは、『虚空の暮らし』。簡単に内容を説明すると、主人公が過ごしていく日常が、本当は誰かの夢の中だった、というお話。

これを読んだとき、僕はこの人のファンになった。

なぜなら、その本の世界観に引き込まれてしまったからだ。

どこからが現実で、どこからが夢なのか。それを考えさせられる本だった。

これを庄一たちに読ませたら、「途中でこんがらがった。」「…：凄い。」と、それぞれ感想を言った。ちなみに、圭も水蓮さんのファンになった。分かる人には判るんだね。

それで、今僕が読んでいるのがその人の新作『日常が変わった日』。圭が新作の情報を教えてくれたおかげで、僕は何度もネットをチェックすることもなく予約できた。そのせいで忘れてたんだけどね。もう一個付け加えると、圭は水蓮さんの情報を調べたけど、僕は教えてもらわなかった。

好きな作家の秘密なんて知りたくないでしょ？って思うのは僕だけ？

ま、それは置いといて。その小説の冒頭を読んでいたら、チャイムが鳴った。

僕は、しおりを挟んで玄関に向かった。

そして、玄関のドアを開けた後こう言った。

「おかえり。」

「「たっ、だいまー！」」

と言った後、両親がこう言った。

「ほらほら！！君も入りなさいって！！」

「そうよ！別に問題ないから！」

「え？も、もしかして『すんごい頼りになる息子』って……」

ん？お客さんかな？そう思ったけど、両親の後ろにるのが誰だか分からなかった。

こんな時間に客を連れてくる方が間違ってるような気がするんだけど。そう僕は思ったけど、たまに庄一と圭が泊まりに来るので、何も言わなかった。

「さっさと家に入ってよ。料理冷めちゃうよ。」

こう僕が言うと、両親は自分で連れてきたお客さんのことなど忘れ、さっさと家に入っていった。それで、残されたお客さんを見て、僕は驚いた。

「え！？な、なんで、寺井さんが！？」

なんと、僕の目の前（両親が連れてきたと思われる）にいたのは寺井董さんだった。しかも、よく視ると荷物を持ってきた。

僕、最近疲れすぎたのかな？幻覚が見えてるみたいなんだけど。とかやっていたら、寺井さんが口を開いた。

「あ、い、池田君。えっと、その…こんばんは。」

「あ、こんばんは。」

寺井さんが挨拶をしてきたので、僕は反射的に挨拶をした。けれど、僕はそれで終わらせなかった。

「というか、こんな遅くに何の用？親が心配してるんじゃない？」
こう僕が言ったら、

「そうですけど…ちょっと頼みたいことがあったので…」
と、寺井さんが言った。

僕に頼みごとって。なんか今までもそうだけど、僕って苦労しかないのかな？とこれからの人生について悲観になりながら、僕は寺井さんに、

「それは家に入ってからにしてくれる？」

と言って家に入らせた。……………今度は僕が狙われそうだと、本気で思いながら。

六月下旬のある日(9) (後書き)

生きるってなんでしょう？

六月下旬のある日（10）

「お、お邪魔します・・・。」

そう言いながら、寺井さんは家に入ってきた。そして、僕はリビングに案内した。

案内してる時、僕は寺井さんに訊いてみた。どうして僕の所に来たのか、ということ。

「でもどうして僕の所？というか、良く場所が分かったね。」

対して、寺井さんはちよつと困った顔をしながら、

「住所は調べましたけど、ここの近くまで来て分からなくなりました。オロオロしてたらあなたの両親が『君、もしかして迷子？だったら家にくればいいさ。すごい頼りになる息子がいるから。』と言ってきて、私を案内してくれたんです。」

すごいね、僕の両親は。もしかすると犯罪者とも仲良くなれるんじゃないかと思う。いや、犯罪者だと知らないで仲良くなってそうだ。

そう思いながら、僕はリビングに着いた。すると、

「相変わらずおいしいなあ！」

「そうね！」

料理を食べている両親がいた。……ビールを片手に。

僕はその光景を無視して、寺井さんをテレビに近いテーブルにあるソファに座らせて話を聴くことにした。

「で？どうして僕の所に？」

「あ、それはですね……。」

寺井さんが話をしようとしたら、電話が鳴った。

「ちよつと待ってて。」

そう言って僕は電話に出た。

「もしもし池田です。」

『あ、池田君？僕だけど。』

「中島君？何か用？」

この時僕はどんな用か分かっていた。だってこんな時に中島君が電話してきたってことは…

『うん。ちよつとね。そこに董がいるんじゃないの？』

「あ。やっぱり？」

『やっぱり、って…そこにいるんだね？』

「うん。というか、よく僕のところだって分かったね？」

『帰りに董が「池田君に教えてもらおうかな…」？』って言ったから。』

「へえ。」

寺井さん、行動早すぎ。と、僕がそう思っていたら、

『董は決めたら行動するのが早いからね。』

と、中島君は言った。僕は訊いてみた。

「それで？これからは？」

『うーん……。ま、いるのが分かればいいよ。あとは僕が何とか言つとくから。』

「そう。……って、え？もしかして、寺井さんを泊めろって事？」

『そういうことになるね。』

「普通、判明したら連れ戻すんじゃない？」

『だって、僕の命がこれからも危うくなりそうじゃない。そんなことしたら。』

「……………」

分かってはいたんだけどね……………。

『頼むよ！これからの僕の命が懸かっているんだ！』

悪党退治より身近な脅威。僕はこの時どちらが危険なのかすぐに察知できた。

「……分かったよ。それだけでどうして僕の所に来たのか大体わかったから。」

『ありがとう！！』

「でも明日僕が大変な目に遭いそうなんだよね……。」

『あ………。それに関しては何とかするから。また明日。』

「うん。」

はあ。なんだか変なもの引き受けちゃったな。そう思いながら、僕はリビングに戻ったら、

「じゃあ堇ちゃんは、連とはクラスメイトなんだな！」

「はい、そうですけど……。」

「ねえねえ。すみちゃんって、好きな人いるの？」

「え！？そ、それは……。」

酔った勢いで質問してるだろう両親と、それに律儀に答える寺井さんの姿があった。

僕はこめかみに手を当てながら言った。

「何やってるの？二人とも？」

そしたら両親が、

「なにつて、仲良くしたいから質問してるだけだが？」

「そうよ？」

と、ビールを片手に言った。

……明らかに酔っているね。

そう直感した僕は、二人を二階に強制的に移動させた。

六月下旬のある日(10) (後書き)

こんな両親どうですか？

六月下旬のある日（11）

「ごめんね、寺井さん。あんな両親で。」

「大丈夫ですよ。それに、楽しそうじゃないですか。」

両親を二階へと強制移動させた後、僕と寺井さんは改めて話をすることにした。

「ところで、誰が電話してきたのですか？」

「え？ ああ。中島君から。」

そう言うと、寺井さんの顔が曇った。

「でも大丈夫じゃないかな？ 中島君は「連れ戻す気はないから。」って言ってたから。」

僕がそう言うと、

「また迷惑をかけちゃいました……。」

寺井さんは落ち込んでいた。それを見た僕は、

「『落ち込むな。落ち込む暇があるなら進め。後ろではなく、前へ。気が重いかと思うな。進むとは過去を忘れることではない。過去から学んで前へと行くことだ。』」

「え？」

僕が言った言葉に、沈んでいた寺井さんは顔を上げた。

「これは僕の好きな小説の言葉だね。タイトルは『海の家』。僕が落ち込んだ時に読んだりするんだよ。」

「それ……作者の名前、水蓮というんじゃないですか？」

「え？」

寺井さんが作家の名前を当てたことに、僕は驚いた。

「どうして知ってるの？」

「私も読むですよ。それに、私の母ですから。書いてる人。」

にっこりと笑う寺井さん。笑ってる顔がきれいだなあとthinkながら、僕はさらっと言われた事実を聞き逃さなかった。

けど、

「その話をしたいけど、今は寺井さんが来た目的について話をしようか？ 寺井さんは料理を教えてもらいに来たんだよね？」

ようやく話を戻すと、寺井さんは驚いた。

「元君はじめから聴いたんですか？」

「いや。僕の所に来るんだったらそれ位しかないから。」

それくらい僕だって知ってるからね。

すると、寺井さんは僕に頭を下げた。

「お願いします！ 私に料理を教えてください！」

初めから引き受けるつもりだったので、

「いいよ。」

と、あっさり言った。そしたら、寺井さんが嬉しそうに、

「ありがとうございます！！」

と言って僕の手をつかんだ。

僕は女の子特有の空気と手を握られた感触のせいで、ものすごい焦った。そして、

「じゃ、じゃあ、お風呂に入ってからにしようか。」

そう言うしかできなかった。

寺井さんがお風呂に入っている間、僕は食器を片付けて、明日の下準備をする準備をして、二階に上がって今は使われていない部屋に寺井さんのための布団を敷いたりした。その後、僕は自分の部屋に戻り、今日届いた本を本棚に置いて風呂に入る準備をしてから一階に戻った。

一階に戻った時、寺井さんはお風呂から上がっていた。

「いいお湯でした。」

「そう？ 二階にある名前のない部屋が寺井さんの寝室だから。そこに荷物を置いてからにしてね？ 僕はお風呂に入ってくるから。」

「す、すみません。何から何まで……このお礼は必ずしますので。」

「そう言って寺井さんは二階に上がった。僕はそのまま風呂に入り」

行った。風呂に入る前に洗濯物をしながら。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、

両親の服どうしよう？

風呂から上がって、着替えてからリビングに戻った。

そしたら、寺井さんがいた。パジャマにエプロン姿という奇妙な姿で。

僕はツツコミをせずに、

「じゃあ、僕の手伝いで覚えてもらおうか。」

と言って、料理を始めた。

して思ったこと。

寺井さんは真面目にやればできる。

「これでいいですか？」

「ああ、うん。これで明日の朝の下準備は終わりだから、もう寝ようか。」

「はい。」

いいお嫁さんになるなあと思いつながら、僕も二階に上がった。

六月下旬のある日（11）（後書き）

次回、主人公のちょっと変わった日常が出てくるかな？

六月下旬のある日（12）（前書き）

すみません。次の話で出てくることになりました。

六月下旬のある日（12）

次の日。

いつもの時間（午前五時半）に起きて、着替えないで下へ向かった。そして、リビングへ行って冷蔵庫を開けて、今日の朝食と昼食の弁当用のおかずを作り始めた。

それをやっていると、寺井さんが起きてきた。

「おはようございます。早いですね、池田君。」

「ああ、おはよう寺井さん。」

そう言って僕は料理を作っていた。そしたら、

「あれ？これにクエン酸とか入れないんですか？」

と寺井さんが訊いてきた。

……え？クエン酸？

「寺井さん。料理にクエン酸入れないからね。というか、化学薬品なんていれないからね？」

そう言うと、寺井さんが逆に驚いた。

「え！？料理に化学薬品入れないんですか！？」

「当たり前だよ！？」

もしかして味付けの意味を間違えてるんじゃないのかな？その時僕はそう思った。

僕の言葉で寺井さんはショックを受け、「そ、そうだったんですか：」と言った。

これで何とか中島君の命は救えるかな？と僕は思いながら、四人分の弁当と朝食をつくった。

いまだに落ち込んでいる寺井さんに、僕は弁当を渡しながら言った。

「はい寺井さん。これ君のお弁当。今度から薬品を入れずにつくればいいよ。そうすれば中島君も喜ぶだろうから。」

その言葉で、寺井さんは顔を上げて

「……ハイッ！」

と言った。ウンウン、やっぱり寺井さんは笑顔が似合うね。

その後、僕と寺井さんは朝食を食べ、寺井さんが食器を洗い、僕は洗濯物を干していた。

その時、両親が起きてきた。

「昨日はそのまま寝ちまった。……おはよう。」

「そうね。……って、会社に遅刻は出来ないわね。」

そう言って、両親は朝食を食べてから洗面所に向かって行った。

僕は洗濯物を干し終えたのでリビングに戻ったら、寺井さんが食器を洗い終えて片付けまで終えていた。

その光景を見て、僕は泣きそうになった。

そんな僕を見て、寺井さんは驚いてこっちに来た。

「ど、どうしたんですか!？」

「い……いや……な、なんでも、ないよ。ただ」

「ただ？」

「こうやって手伝ってもらったのは、初めてだなあと思って。」

その言葉に寺井さんはさらに驚いた。

「そ、そうなんですか？」

「うん。両親は僕にまかせっきりだし、変なもの買ってきそうになるし、たまにまともな買い物したと思ってたら見事に裏切られるし……」

寺井さんが絶句してる中、僕はとりあえず言った。

「家の事が大変だから自分の事なんか考えられないし、どこか遠出しようにも両親が真面目にやれるか心配だし、間違っってヘンなもの持って来たらそれこそ大変だから。」

そう僕が言うと、寺井さんが泣きそうになっていた。

「す、すごい苦勞をなさっているんですね。」

そう言いながら、どこからか取り出したハンカチで涙をぬぐっていた。その光景を見て、僕はこう言った。

「言いたいことは分かってるね？父さん、母さん。」

「え？」

寺井さんが僕の見ている方向を見ると、そこには両親が立っていた。

「そんな風に私達を見ていたのか……ちょっとだけショックだな。」

「そう思われても仕方ないんじゃない？」

「もうすぐ会社。」

僕がポツリと言うと、

「連！言い訳はしないが、とりあえず戸締りはしといてくれ！」

「あなた、弁当忘れてるわよ！！」

「なに！？」

と両親は慌てて準備して、会社に行ってしまった。本当はまだ時間があるのに。

両親が言った後、僕はそんなことを思いながら笑った。

そして、ひとしきり笑った後、

「僕達も学校の準備しないかね。」

と言って二階に行った。

リビングにて。

「あれ？池田君、行かないんですか？」

僕が制服ではなく私服なのに、寺井さんは疑問に思ったようだ。

僕は詳しく言う必要はないと思っているので、

「今日は遅れていくと連絡はしてるから。」

と言ってはぐらかした。

なおも疑問に思っていたみたいだけど、寺井さんは「行ってきた。」と言って学校へ向かった。

僕は椅子に座って、チラシをじっくりと見て財布の中身の確認と、戦場へ向かう準備をしていた。

教室にて。

「董。どこいったの？あんたの両親から昨日、電話があったのよ？『董はどこに居るのか知らないのか？』って。」

「あ、ごめんね、久実。色々あって……」

「ま、いいけどね。」

と言って清水は自分の席へと戻っていった。しかし、

「あいつら、懲りないのかしら？」

昨日のメンバーが中島の下にいるのを見て、清水は寺井を連れてそっちに向かって行った。

「おい中島。」

「え！？ な、なに？ 岡田君？」

「……話がある。」

「木村君も？」

「俺もだよ。」 「俺もだ。」 「ていうか、昨日お前を襲おうとした奴ら全員だな。」

「みんな、どうしたの？」

「実はな……」

と庄一が言おうとしたら、
「ちよつと男子！！ あんた達、昨日の今日でまたやろうってわけじゃないわよね！？」

「そ、そうでしたら、ゆ、許しませんからね！」

清水と寺井が割って入ってきた。

「ちようどいい。清水に寺井も聴いてくれ。」

そう庄一が言ったので二人は

「は？」 「え？」

と、間の抜けた声を出した。

状況を飲み込めていない中島は、

「なに？ みんなどうしてそんな真剣な表情なの？」

庄一たちの表情が真剣なことに疑問を持った。

そこで庄一は中島達に頭を下げてから、こう言った。

「昨日の事、あれは俺達が悪かった。首謀者は俺と圭だ。煮るなり焼くなり好きにしてくれ。」

それに続いて圭が頭を下げ、他の男子の中には土下座をする奴もい

た。

そして、

「「「すみませんでした!!」「」「」」
と言った。

謝罪された本人たちといつの間にか話に加わっていたレイジニアは、

「どうするの？ハジメ。」

「うーん。僕には被害はなかったから、別にいいよ。昨日の事は。」
「相変わらず甘いね、元^{はじめ}。」

「いいじゃないですか。でもこれに懲りたら二度とやらないでくださいね?」

そう結論付けたという。

「分かった。一応男だ。それならいい。」

「……約束する。」

その結論を受けて、男子全員は約束した。そして、先生が来る前に自分の席に戻った。

その時に、レイジニアと中島、清水は席が一つ空いてることに気付いたが、気にしなかった。

先生が出席確認をしてる時、

「あ。今日は池田の奴遅れるんだった。理由が『家庭の事情で』だそうだ。何か知ってる奴いるか?」

と言ったが、誰も答えなかった。庄一と圭はもちろん知っていたが、言う気はなかった。

一校時目が始まる前。

「許してもらえたな。」

「……連は今頃何してると思う?」

連がいない、という事は多々あるので、二人は特に気にしていない。二年の時間が一番ひどかったと庄一は思っている。

「さあな。そんなことよりあいつが来た時に、あいつがノートを写せるようにこれからの授業を受けようぜ。」

「……だいぶお世話になっているから、それくらいなら問題はない。」

そう言って、二人は授業を受け始めた。

六月下旬のある日(12) (後書き)

友達思いの二人・・・かな？

六月下旬のある日(13) (前書き)

な、長い・・・・・・。

六月下旬のある日（13）

「まだ開店時間には早いけど、そろそろ行こうかな。さっさとしないと負けそうだから。」

そう言って僕は、戸締りをして家を出た。

そして、ついた場所はおなじみのスーパー。開店前なので人が少なかったけど、何人かの主婦たちはもういた。

この人達も狙ってきてるのかな？と僕は思いながら、その集団に近づいた。

「おや？ 久し振りじゃないか、あんた。学校はどうしたんだい？」

「久し振りですね。今日はいつものようにサボってきましたよ。」

「堂々と言えるもんじゃないでしょうに、全く。」

「学校より、今はこっちの方が大切なんですよ。あ、久し振りなんでお手柔らかに。」

「手加減なんかしないよ。前にそれやって大分かさらわれたからね。」

「そうね。子供だと思って油断してたわ。悪いけど、前回の様にはいけないから。」

近くにいた主婦の人が知り合いだったので、僕は話しかけてみた。そしたら、その隣も知り合いだったので、僕は喧嘩腰になってしまった。

「そう言う貴方達こそ、前々回はものすごくおとなげなかったじゃないですか。」

「何言っているんだい。あれが普通なんだよ。」

「そうよ。あなただって、そう言いつつ結構な買い物してたじゃない。」

そうやって話していると、自然に何を買いに来たのかという話になった。

「今日は何を買いに？」

「あたしは醤油と油。それに鶏肉と卵かな。そっちは？」

「わたしは野菜を中心に鶏肉を買いに。あなたは？」

「僕ですか？僕はですね……牛肉と野菜、魚と卵、あと醤油も。」

「結局、あんたとはやるってことだな。」

「そうですね。負けませんわよ。小さな主夫さん。」

「僕も負けませんよ。」

そう言って、僕達は今か今かと待ちわびていた。

ちなみに、開店時間は九時。その三十分ぐらい前に来ている人数は僕を含めて十人弱。この人達の狙いは、開店直後に行われる不定期・非公式のタイムセール。だから僕も学校をサボってまで来ているという訳だ。

それを知っているのは、庄一と圭のみ。特に圭にはこのタイムセールの情報を教えてもらっている。本当にいい友達を持ったよ。

同時刻、教室。

庄一と圭は、黒板に書いてることをノートに書き写していた。

圭に至っては、先生の話で必要なことも書いていた。

その授業が終わり。

「いつになく集中したな。」

「……友のためだから。」

二人はそんなことを言っていた。なんだかんだいって、友達を大切に思っている二人である。

そんな二人に、近づいてくる人がいた。

「ねえ、レンってどこにいるの？遅くなるって言ってたけど、何かに巻き込まれてないかと思って。」

「ん？レイジニアか？連に何の用だ？」

「…連なら心配はいらない。」

近づいて来たのは、レイジニアだった。それに気付いた二人は、いつもの口調で言った。

そうしていたら中島も来て、レイジニアの援護をした。

「いや、心配するって。どこに居るのか教えてくれない？」

それに対して、庄一たちは頑固だった。

「去年も似たような感じで連はいなかったけど、誰も訊かなかったぜ？今更なんだ？ヒーロー面か？」

「……理由は分かるが、本当に今更。本人にも口止めをされているから、何も言えない。」

明らかに喧嘩するようにも取れる言葉だった。

それに対して、いつの間にか寺井と清水まで来ていた。

「そんな言い方は無いんじゃない!？」

「そうですよ!酷いじゃないですか!」

二人はそのままこの話に混ざった。しかし、

「あー、やめだ、やめ。こんな話しても時間の無駄だ。さっさと授業の準備しようぜ。」

「……あいわかった。」

「それはいつの時代のセリフだ？」

と言って、二人は授業の準備をしだした。

結局、残された四人はというと、

「まったく、なんなのかしら? あんな態度で答えるなんて。」

「先ほどの態度とは大違いですね。」

「そうね。レンが遅れてくる理由を訊かれた時のあの二人の態度が、朝とはだいぶ違っていたわね。……ハジメはどう思っているの？」

「……え? あ、うーん……。あのさ、このことはもうやめない? きっと訳があるんだよ。それに」

「それに？」

「二年の頃の僕は、ほとんど何もしてなかったのと同じなのは、事実なんだからさ。これ以上は何も訊かない。これで良いという事にしようよ。」

「元が言うなら……。」「分かりました……。」「

と言って二人は引いたが、

「でも、どうして二人はあんなに攻撃的になったのかしら?」

レイジニアは疑問に思った。

それに答えたのは、話を聴いていた庄一だった。

「ああ？お前ら、友達のプライベートを細かく知ってなきゃ駄目なのかよ？そんな奴と友達になりたいなんて、どうかしてるんじゃないのか？」

その言葉で清水と寺井はまた怒りそうになったが、中島が

「そうだよな。詳しい事なんて知らなくても友達になれるもんね。」
と言ったため、二人は閉口した。そのかわり、

「よくわかってるじゃねえか。」

「……仲良くできそうだ。」

庄一と圭は中島の事を褒めた。

なんとなく面白くない二人はレイジニアの方を向いたが、彼女は彼女で「確かにそうね…」と言っていたので、さらに二人は面白くなかった。

それから、まあお約束というか二時間目の授業が始まりそうになったので、各々の席に着いた。

こんなやりとりがあつたことをもちろん知るはずのない連は、ただいま

「だらっしゃ——！！！」

タイムセールスという名の戦場を絶賛駆け巡っていた。

『次はー、卵だ！なんと一パック三十円！！一パック三十円だよ！一人一パック限定だ！早い者勝ちだ！』

というアナウンスを全部聞く前に、僕はその売場までダッシュしていた。

ここまでの取りこぼしはゼロ。あとはこの卵と最後の醤油のみ。

僕、これ終わったら家に帰ってゆっくり寝るんだと思ったけど、学校があるので寝ることもできないし、そんな考えしてる暇があるならとにかく卵のパックをとらないといけない。

そう考えながら、僕は卵のパックが二つ残っているのが見えたので、手を伸ばしてひとつをとった。もう一つは、開店前に話をしていた人がとった。

感慨に浸る間もなく僕は卵を買い物かごに入れて、すぐさま醤油のタイムセールスが行われる場所へ向かった。

この場所で鍛えられたおかげで、基礎体力はもちろん、走りがはやくなったし、状況判断を素早く、的確にできるようになった。

そのおかげでだいぶ体育の成績が良くなったけどね。ま、『2』が『3』になったただけなんだけどね。

話を戻そう。

今は醤油の売り場へ向かっている。ただし、僕の後ろには何十人もの主婦たちが走ってきている。正直怖い。これで体力が持たないと完全に終わってしまう。

そして、もうすぐ売り場に着くという時に、

『最後は醤油だ！一リットルの醤油一本百円だ！お一人様二本まで！もってけ泥棒！！』

というアナウンスがした。

その言葉と同時に、僕達はラストスパートをかけた。一歩抜きんでているからって、最後まで気を抜くことは許されない。その上、レジまで行かなくや買い物が終了したとは言えない。おまけに、家まで帰るのにも体力が必要だからそれにも残さなくやいけない。

だけど、僕にそんな余裕なんてあるわけもなく。真っ先に売り場につき、そのまま二本かごに入れ、僕はそのままレジに向かった。今度は走らずに、歩いて。

「ありがとうございますー！！」

僕はレジを出て、レジ袋に買った物を入れて、スーパーから出ようとした。すると、

「やっぱり手加減なんか不要じゃないか。店が開く前に言った物、全部買ってたじゃないか。」「そうですね。でも、私達も本気でやってましたよね。」

「あ、二人も終わったんですか？」

開店前に話していた二人と出会った。どうやら、二人も会計を終わらせて帰るところらしい。

「まあな。何とか全部買えたぜ。」

「私もなんとか。」

と言って、戦利品の入ったレジ袋を見せてきた。僕はそれを見て、「やっぱりすごいですね。僕もまだまだですね。」

と言うしかなかった。そんな僕を見て、

「何言っているんだい。中三でこの戦場を平然と駆け回った上に、自分で宣言した食材を全部買うなんてよ。」

「将来は立派な主夫になりますよ。それか、執事にもなれますね。どちらにせよ、あなたとはこれからも仲良くして損はなさそうですね。」

「そうだな。あたし達の太鼓判じゃ貧弱かもしれないが、誇れよ。将来が楽しみだ。」

二人は僕の事を褒めてくれた。

褒められてうれしくないとは思わなかった。何事でも褒められると嬉しいよね。

「ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。二人とも。」

「そうだな。これからよろしくな。」

「よろしく。」

そう言って、そのまま僕達は帰っていった。

時刻は十一時。もうすぐ昼だ。弁当を家で食べてから行こうかな？

その頃庄一たちは。

「まだ三校時目か……。二校時目は自習だったから楽だったな。連は五校時目からか？」

「……今頃は終わっているはず。ただし、来るまでの準備などにより、昼休み以降から登校するのが傾向。」

「そうなるよ、まだノートは取り続けなきゃいけないな。」

「……普段お世話になっている。テスト前のノートとか、家に行くたびに料理を作ってもらったりとか、他にもいろいろ。」

「そうだなあ……じゃ、集中しますか！」

「コラ岡田！ 静かにしろ！！」

「やべっ！……すみません！」

「よし。ついでだ、この問題を答えろ。」

庄一が頑張っていた。

六月下旬のある日(13) (後書き)

やっぱり、変わってますよね。

六月下旬のある日（14）

「ただいまー。……あー、疲れた。今度はどうやって攻略しよう？」
対象はもちろん、タイムセール。

僕は、家に帰ってきたので考えようとしたけど、

「また今度でいいか。」

と呟きながら、買ってきたものを冷蔵庫へ入れ、学校へ行く準備を
しだした。といっても、制服に着替えるだけなんだけどね。

着替え終わって。

この後はいつも通り普通に登校するだけなんだけど、タイミング
があるんだよね。

どうしよう？と思ったけど、構わず学校へ行くことにした。いつも
昼ごろに学校へ行ってるから庄一たちに迷惑をかけてるんだよね。

僕は、疲れがたまっていると自覚しながら学校へ向かった。

弁当はちゃんと持ってきてるよ？

三校時目が終わり、四校時目が始まった。

「あいつ、こんな時に限って学校へ来そうな気がするな。」

「……同感。」

そして、それが現実になった。

最初に見つけたのは、庄一だった。

「ん？」

「……どうした？」

男子は校庭で行っていたので、校門がよく見える。なので、校門前
に人がいることも分かる。

「連が来た。」

「……何？」

庄一のセリフに、圭も校門を見た。

ちなみに、今回の体育はソフトボール。庄一と圭は同じチーム。

守備も外野。なので、それなりに校門の方へ目を向けられる。

「……本当だ。」

「あいつ、無理して来てそうだな。」

圭が確認したので、庄一は心配そうにした。そんなことをやっている、

「岡田！ いったぞ！」

という声とともに、ボールが飛んできた。フライの形で。

庄一には特に何も力はない。だが、

「あらよつと。」

簡単にボールをキャッチした。そして、

「ほら一塁！」

と言って、一塁へと直接投げた。ちなみに、庄一はライト、圭はセンターを守っている。一塁を守っていた人は、その球を取りこぼさずにキャッチした。しかし、球威が強過ぎたのか、キャッチしてアウトにした後、手が痛くなったとかで保健室へ行くことになった。

「……加減は？」

「したさ。やっぱり、連かお前じゃないと本気で投げねえよ。」

「……それは俺達に死ねと？」

「そうじゃねえよ。」

と言っていたら、校門を開けてトコトコと歩いてくる人がいた。それが連だった。

連は、体育の授業中だというのに自然体で歩いていた。たまに球が飛んでくるのにもかかわらず、ちよつと足を速めただけで簡単に避けられた。

すでに始まっているので、先生が連の所へ行き、「お前、さっさと着替えてこいよ、って言いたいが、大丈夫か？ 昨日までは元気だったのに何があったんだ？」と訊いて、連が「疲れがたまっていたのか寝坊しまして。ついさっき起きたばかりなのでそう見えるんでしょうね。」と言って先生から離れて校舎の中へ入っていった。それを見ていた庄一は、

「庄一！お前、一塁守れー！」
という声を聴いていなかった。

四校時目の体育の授業中に来た僕は、最初に職員室へ行って担任の先生に報告して（丁度空いてる時間だった）、自分の教室へ行き、もうすぐ終わりそうだと時計を見て思ったので、そのまま教室に残ることにした。

さて、残ったのはいいけど……………

「なにしよう？」

勝手に庄一たちの机を漁るのは悪いからノート写せないし、誰もいないから何もできない。

こうなったら……………、

「本でも読もう。」

昨日買った水蓮さんの新作『日常が変わった日』。これを学校へ持ってきていたので僕は読むことにした。

数分後。

結局、ちよつとしか読めないで授業が終わった。まだ冒頭なのに。

僕はおとなしく弁当の準備をして自分の席で待っていた。

そうしていたら、ぞろぞろと女子が来てしまった。それを見た僕は、

（ちよつとお……………！！！！）

と思って、反射的にベランダに出た。そしたら、そのまま意識を失った。……………って、あれ？さっきので体力切れ？そう思うことなく、ベランダで倒れてしまった。

連が教室にいることを知らない女子は、教室の前に来た。その時に教室から物音がしたので、全員ドアの前で止まった。

「だれかいるのかしら…………？」

「もしかして、不審者かしら？」

「開けてみませんか？」

寺井の提案で、清水はドアを開けた。しかし、窓が一つ空いている

だけで、そこには誰もいなかった。

「逃げた・・・？」

「だとしたら物凄い手練れじゃないかしら？」

「みなさん、何かとられてるものが無いか確認してください。」

レイジニアと清水は教室にいた人間がどこに行ったのか疑問に思っ
て、寺井は何か盗まれたものが無いかを女子のみんなに呼びかけた。
女子全員が自分の荷物を確認していると、男子が戻ってきた。

「そういうや、結局連のやつ授業に出なかったな。・・・ん？」

「・・・無理もない。授業時間が少なかった。・・・何かあったのか？」
庄一と圭が先頭になっていたので、まず二人がその状況を見た。そ
して、残りの男子も次々と教室の状況を確認した。そして中島が清
水に訊いた。

「ねえ久実。何があったの？」

すると清水は、

「私達が教室に戻って来た時に、物音がしたから誰かいるのかと思
ってドアを開けたら誰もいなくて、何か盗まれているものが無い
か確認してるところよ。」

と状況の説明をした。

その説明で中島は悩み、庄一と圭はピンときた。

「圭、ひよっとすると・・・」

「・・・多分、それで合ってる。」

二人は誰にも気づかれないように話してから、そのまま自分たちの
席、つまり窓が開いていた席の近くまでいった。

その光景を見た中島達は疑問に思いつつもついてきた。なぜだ
か、この二人についていった方がいい、と思ったからだ。

窓まで近づいた庄一は、いきなり窓の外、ベランダを覗き込んだ。
そして、

「圭、どうする？保健室まで連れてくか？」

と圭に確認し、圭は、

「・・・起きなければ連れて行くしかない。」

と、ベランダを見ないで言った。

訳が分からない四人は、中島が代表して訊いた。

「誰かいたの？もしかして、久実が言っていた人？」

対して、庄一は歯切れが悪そうに言った。

「あゝ、不審者でもなんでもないから心配するな。ただ単純に力尽きただけだろう。」

その後、誰が起こすかでジャンケンをして圭が負け、圭がベランダに行ったのを見て清水が質問してきた。

「誰がいたのよ？」

その質問にも歯切れが悪そうに答えた。

「あゝ、うゝ、答えなきゃ駄目か？」

「当たり前でしょ？」

そうしていたら、

「……起きろ。両親がタヌキの置物を買ってきてるぞ。」

「……起きない。庄一、保健室。」

「……起きない。庄一、保健室。」

「やっぱりか。面倒なことしやがって。」

そう言って、清水の質問には答えずにベランダへ向かった。清水は怒りそうになったが、中島が何とか制し、収まった。

そして、庄一たちがベランダから戻って来た時にクラス全員が理解した。この騒動の犯人を。

「分かったか？という訳で、こいつを保健室へ連れてくから。圭、弁当持ってきてくれ。」

「……連のは？」

「……一応持ってきてくれ。起きるかどうかわからねえけどな。」
そんなやりとりを行った後、庄一は連をおんぶして、圭は三人分の弁当を持って、教室を後にした。

残された全員はしばらく呆けていたが、はっとして全員弁当を開きだした。

しかし、中島達はというと、

「でも、どうして池田君が倒れていたの？」

「体育の途中に来たけど、池田君、とても疲れてたように見えたよ。なにかあったのかな？」

「それに、遅れてきた理由も分かりません。」

「ここは訊くしかないのでしょうか……朝の件もあるから訊きづらいわね。」

「とりあえず、どうしようか？」

この件について考えていた。

六月下旬のある日（14）（後書き）

疲れた体に鞭打つて、人間としてはやっちゃいけないですよね。

六月下旬のある日（15）

保健室に着いた庄一たちは。

「過労による軽い貧血ね。一応魔法をかけといたから、六校時目には間に合うんじゃないかしら？」

「ありがとうございます。美沙紀先生。」

「いいのよ。保健室を担当してるから、当然よ。……それにしても、中学三年生の疲れ方じゃないわね。一体何をすればこんなに疲れるのかしら？ 疲労と心労が、どっちも同じような感じになるなんて。」

「……そこまでは分かりません。」

圭がそう言うと、美沙紀は笑って「そうかもしれないわね。」と言った。

そして、そこで二人は弁当を食べ始めた。

「教室で食べてほしいのだけど、仕方ないわ。」

それを見た美沙紀は苦笑して自分の弁当を食べ始めた。

ここの保健室の先生は藤原美沙紀。魔術師である。といっても、彼女の得意魔法は『回復』。だからこの職業に就いたみたいだ。年齢は二十代前半。保健室の先生とは思えないぐらいスタイル抜群なので、彼女見たさで保健室へ来る生徒も多く、また、先生に告白先生も多い。

しかし、彼女はそれをことごとく断っている。理由は『ピンとこないから。』。

庄一たちがテーブルで弁当を食べ、美沙紀は自分で使っている机で弁当を食べていた。連はベッドで寝ている。

時々、庄一たちが美沙紀に目を向けたりすると、美沙紀もそれに気付きにつこりと笑う。その笑顔に二人は赤くなり、弁当を食べるスピードが速くなった。

そうしていたら、

「……ん？ 保健室？ ということは、寝ちゃってたの、僕？」

連が起きて、状況を確認していた。そのことに先生は驚き、庄一と圭は弁当を食べるとを止め、連がいるベッドの所へ行った。

「少しは休んで来いよ、連。」

「……倒れるなら家で休んでからでいい。」

「二人ともありがとう。……それにしても、なんだか体が軽いんだけど、なにかした？」

庄一と圭が、連にそう言うと、連は先程の疲れがなくなっていると感じ、何をしたのか訊いてきた。それに答えたのは美沙紀だった。

「無理しちゃだめよ。疲労回復の魔法をかけただけだから。疲れがとれたとしても、六校時目までは安静にしてね。」

それに対して、連は上半身を起こして三人にお礼を言った。

「ありがとうございます。」

それを見た庄一と圭は一安心して弁当を食べ始め、その時に連の弁当を本人に渡した。

連はそれを受け取った後、庄一たちのいるテーブルへ行き、自分の弁当を食べ始めた。

「仲がいいわねえ。」

と、美沙紀先生が、僕達と一緒に食べている姿を見ていった。

それに対して、僕達は笑っただけで何も言わなかった。というか、先生なのに際どい服装ですね。

そうこうして食べていたら、保健室にまた人が来たみたいだった。それを見て先生は、

「今日はいつもより少ないわね。」

と言って僕たちを驚かせた。いつもはどのくらいの人数が来てるんだろう？と疑問に思ったけど、面倒なので考えなかった。

そして入ってきた人たちを見て、僕達は驚いた。

「中島達か。さっきの件か？」

「……朝と同じことを訊くなら、黙秘と強硬手段に出る。」

「朝？さっきの？二人とも、何言っているの？」

庄一と圭の言うことに、僕は全く覚えがなかった。さっきって、僕が倒れたことと関係があるのは確かだろうけど、さ。

それを受けて清水さんはこう言った。

「……さっきの件の真相が分かったわ。池田君。あなたは学校へ遅れて、そのまま教室にいたところで私達が来て窓から逃げた。その時に疲れてたのか、そのまま倒れた。そうでしょう？」

「うん。そうだよ。」

僕がそう答えたら、清水さんが謝った。

「ごめんなさい。」

「え？」

「私の早とちりのせいで、あなたの印象が悪くなったみたいだから。」

「そうなの？」

と僕が訊くと、二人とも首をかしげた。それを見て何が気に入らなかったのか清水さんは、

「そう！だから謝るわ。ごめん。」

と言った。頭を下げられるのには慣れていないので、

「別にいいから！頭を下げなくて！」

と僕は言った。それで許してもらえたと思ったのだろう。さっきとは打って変わってこう言ってきた。

「そう？ならここでお弁当食べてもいいかしら？私達も。」

僕に訊かないで美沙紀先生に訊いてよ。と言いたくて先生を見たけど、無視された。

ここの管理はあなたがしてるんですよね？とすぐさ思った。

僕が何も言わないのを肯定ととったのか、中島君たちも座らせて、このメンバーで昼食を食べることとなった。

席順は、僕から時計回りに行くと、レイジニアさん、清水さん、中島君、寺井さん、圭、庄一の順。庄一は何やら不満顔だったけど、それを気にせず食べ始めた。

黙々と食べていると、中島君が僕に訊いてきた。

「遅刻の理由って、寝坊？」

「時間があって二度寝したらもう十一時半くらい。そのまま慌てて準備してって感じだね。」

「あれ？でも先生には『家庭の事情で』って言ってたんだよね？」

「ああ、あれね？いろいろあるんだよ、僕の家はね。」

そう言ったら、中島君は何も訊かなくなった。

再び沈黙。

すると、寺井さんの表情が気になったのか清水さんがこう言った。

「葦。なにやら晴れ晴れとした顔だけど、どうかしたの？」

「え！？な、なんでもないですよ！？」

寺井さんって隠し事苦手なのかなあと思いながら、僕に飛び火しなければいいなあと思って食べ続けた。

寺井さんの態度が気になったのか、レイジニアさんも会話に加わった。

「思えば、朝から態度はおかしかったわね。それに、昨日家にいなかったんでしょ？どこにいたのかしら？」

それに対して寺井さんを援護したのは、中島君だった。

「僕の家だよ！」

中島君……君は男だね。みてよほら、寺井さんは顔を真っ赤にしてるし、レイジニアさんと清水さんは完全に怒ってる。僕達はどうと、

「ま、いつものことだな。」

「あれ？便乗しないの？」

「……今朝の約束。」

傍観を決め込んだ。

だって、あの中に入る時点で自殺行為だからね？そして、それが分からないほど僕達は馬鹿じゃない。なので、おとなしく観てることにした。

口論はヒートアップしていった。

「嘘よ！昨日、元^{はじめ}に電話した時『家には来てないよ。』って言って

たじゃない!!」

「そりゃそうだよ! 堇が『誰にも言わないで。』って言ってたんだから!」

と、ここで、レイジニアさんがあることに気付いたみたいだった。

「ねえ、スマレ。」

「なんですか?」

「あなたの弁当とレンの弁当、ところどころ同じような気がするのだけれど……気のせいかしら?」

おおっと! これはマズイ!! そう思ったけど、うかつに口を挟むと自爆しそうなので、我慢した。そしたら、清水さんが冷静になった。

「そうね。よく見たら池田君のお弁当と堇のお弁当が似てるわね。」その言葉で寺井さんはオロオロしだし、中島君は緊張した面持ちで、僕は気にせずお弁当を食べていた。今までの授業のノートを写さないといけないからね。

そして、

「ねえ堇。そのお弁当のおかず、食べていい?」

と清水さんが言った。対して、寺井さんはどうしようか悩んだみたいだけど意を決したらしく、

「駄目です。」

ときっぱり断った。それには清水さんも驚いたみたいだけど、何も追及しようとはしなかった。

そろそろみんな食べ終わる頃に、圭が思い出したかのようにこう言った。

「……そういえば」

「どうかしたの?」

「…連。昨日あの小説、届いた?」

「うん。まだちょっとしか読んでいないけどね。」

「お前ら好きだなあ。」

「あの小説って?」

僕達が小説の話題で話していると、レイジニアさんが訊いてきた。

てよかったと思いつつながら。

六月下旬のある日（15）（後書き）

今回で、六月下旬のある日の話は終わりです。次は、ちょっとした閑話でもしますか。

閑話 とある休日 池田連編その1 (前書き)

これからちよくちよく入れます。

閑話 とある休日 池田連編その1

休日。僕にとってそれは安らぎの時間。だけど、必ず体が休まるということではない。

僕の朝は休みだろうと関係なく午前五時半に起きる。

「ふぁゝあ。今日は休みなのになぁ。でも両親は仕事だからなぁ……」

そう呟きながら、僕は着替えて一階に下りる。

一階に下りたあと、まずリビングに行き、僕は冷蔵庫から昨日の夜に下準備した両親の昼食用の料理を作り始めた。それが終わると、朝食を作っていた。

昼食は弁当箱に入れ、朝食はキッチンに近いテーブルに並べていった。いつものことだ。

この時午前六時。僕は次に洗濯物を干しに行った。干している最中、両親が起きてきた。

「おはよう、連。」

「今日も早いわね。」

二人ともパジャマ姿で起きてきた。髪が寝癖でひどいことになっているのを見て、会社ではすごい人なのになぁ、と僕は思った。

洗濯物を干し終えて、三人で朝食を食べた。本当はもう一人いるのだけれど、どこかへ行ったきり家に戻ってきていない。無事だっことはわかってるんだけどね。

朝食を食べ終え、僕は調理に使った器具と一緒に食器を洗い、両親は顔を洗いに行った。

「「行ってきました。」」

そう言いながら、両親は家を出た。

両親を見送った後、僕は家の部屋を掃除することにした。これか

らのことを考えながら。

「えーっと、今日は買い物以外は特に予定ってなかったはずだから・
・・・・。お？もしかして、久しぶりにのんびりできる時間が発
生した！？やった！」

僕は掃除をしながらそんなことを言った。それと同時に、そうい
った時間っていつからなかったんだろうと記憶を探ってみた。

そしたら何とびっくり！中学一年の夏休み以来、そういった時間
が一切なかった！

その事実泣きそうになりながらも、僕は掃除していった。

「あゝ終わった、終わった。これでゆっくりできる。」

掃除し終えた僕は、ソファに寝転がりながらそうつぶやいた。

こうやってだらけるって幸せだなあ、と絶対ほかの人が見たら驚
く格好で寝転がっていたら、急に電話が鳴った。

チッ。誰だよこんな時に。そう思いながら、僕は電話に出た。

「もしもし？」

『よお、連・・・・・って、こわっ！不機嫌オーラが電話越し
に感じるぜ。』

「それがわかってるなら用件を言ってくれないかな、庄一。」

『わ、わかった。圭が新しいゲームソフトを体験した感想を言っ
てくれて。報酬は出すそうさ。』

「ベータテストだね？だったら圭の家で・・・・・って、駄目
か。圭は内緒にしてるんだっけ。」

『そう。で、俺の家はゲームなんて買っといたら怒られるんだよ。
頼む！お前の家でやらしてくれないか！？』

「・・・・・ハア。いいよ、まったく。そのかわり、昼食は
何も作らないからね。」

『助かる！じゃ、今から圭に電話してお前の家に集合させる！じゃ
！』

そういって、庄一は電話を切った。

閑話 とある休日 池田連編その2

庄一が電話を切った十分後、インターホンが鳴った。誰だか見当はついていただけど、

「はーい。どちら様〜？」

と、わざとらしく玄関に向けていった。そしたら、

「来たぞ〜。」

「・・・開けてくれ。」

庄一と圭の声がした。

ま、分かってたけどね。そう思いながら、僕は玄関のドアを開けることにした。

「お邪魔しま〜す。」「・・・邪魔する。」

玄関を開けたら、二人が入ってきた。僕は若干不機嫌な気持ちを隠せないまま、上がるよう促した。

リビングにて。

「連、悪かったって。だから機嫌直せって。」

「・・・このゲームをやれば、ストレス解消になると思う。」

「たまの休みなんだから、ゆっくりしたいんだけどなあ。それと、基本的に僕ゲームやらないんだけど。」

「・・・だから、連にやってもらう。このゲームは、ストレスがたまっている人向けのゲームだって言ってた。」

「ふ〜ん。」

そう言って圭が僕に見せたゲームのタイトルは、『鬱憤晴らし』。その名のとおりに、ストレス発散させるためのゲームらしい。

その言葉を聞いた庄一は、

「あれ？そしたらどうして俺は呼ばれたんだ？」

そう言って首をかしげた。すると、圭がもう一本のソフトを取り出した。

「これは？」

「・・・新作『地獄めぐり』。」

圭曰く、間違って地獄に落ちた主人公が、門番たちや地獄に落ちたものたちと戦いながら、現実へと脱出する話。

「俺はこれをやれと？」

「・・・そう。」

そのやり取りを聴きながら、僕は圭が持ってきたソフトをゲーム機に入れた。どんなゲームができるのか、ちょっと楽しみだった。

閑話 とある休日 池田連編その2 (後書き)

まだ続きます。

閑話 とある休日 池田連編その3

数十分後。

「どりゃあー!!ぶつとべー!!」

「連って、普段どれだけストレスたまってるんだろうな?」

「・・・ここまでとは思わなかった。」

すっかりはまった僕を見て、庄一と圭はそうつぶやいていた。

いやゝ、すっきりするねゝ。こんなゲームでないかなゝ?

などと思っていいたら、どうやら試作品が終わってしまったらしい。

これで終了します、という字幕が出てしまった。

せっかく調子乗ってきたのになあ。

残念に思いながら、僕はソフトを取り出した。

「・・・感想は?」

「すっかりはまったよ。完成したらやりたいね。ただ、ちょっとゲームの内容が物足りなかったかな?」

「・・・それは参考にしとく。」

そう言って、圭はソフトを受け取り、僕は封筒を受け取った。

「よーし。次は俺だな。」

そう言って、庄一は『地獄めぐり』のソフトをゲーム機に入れた。

それからのことは、あまり思い出さたくない。唯一いえる事は、やり終わった庄一がそのソフトを壊そうとするのを、僕たちが必死に止めに入ったということぐらいかな。

そして、お昼。僕はあらかじめ昼は作らないといったので、庄一と圭はコンビニで買ってきたみたいだった。僕は、冷凍食品を解凍して食べることにした。

「手抜きだな。久しぶりに見た気がする。」

「・・・いつもは客がいると作ってくれる。余程のんびりしたいと見る。」

そりゃそうだよ。たまの休みなんだからね。僕だってゆっくりした

いんだ。

そう思いながら、僕は昼食を食べていった。庄一と圭も食べていった。

昼食を食べ終え、これからどうするか話し合うことにした。

「これからどうする？」

「・・・帰る？」

「そうしてくれるとうれしいんだけど。」

「何かあるのか？」

「買い物ぐらいで何もないよ。ただのんびりしたいだけだよ。」

「・・・本音がダダ漏れ。」

圭にだけは言われたくないんだけど。

そう思ったけど、僕は何も言わずに先に進めることにした。

「で、どうするの？」

「・・・俺は帰ってから報告する。」

「じゃあ俺は、家まで散歩するか。」

ということで、二人は帰っていった。

二人を見送った後、僕は三時まで寝ていた。というか、気づいたら三時になっていた。

僕は買い物に行かないとやばいと思い、財布を持ってスーパーに向かった。

閑話 とある休日 池田連編その3 (後書き)

まだ続きます。

閑話 とある休日 池田連編その4

スーパー店内にて。

僕は中島君とぼったり会った。

「やあ、池田君。どうしたの？ 買い物？」

「そういう中島君は、またおつかい？」

「そうなんだよ。全く、すっかりで買い忘れたものを息子に買いに行かせないでほしいんだけど。」

そう言いながらため息をつく中島君。

「それぐらいならいいさ。それじゃ。」

「え？ あ、うん。じゃ。」

僕の言葉に疑問を感じたのか中島君は首をかしげたけど、僕はそんなことを気にせず、買い物が続けていった。

スーパーで買うものを買ったので、店を出た。そして、次に商店街へ向かった。スーパーが家から遠く商店街が家から近いので、スーパーから商店街へ行くと帰り道が楽になる。

「へいらっしやい！ どれにする？ 連！！」

商店街について真っ先に向かった店が、八百屋。こっちのほう野菜が安いから、僕はここを利用している。たしか・・・小学一年生からここで買い物をしていた気がする。食材を買いに。

僕は並んだ野菜を見ながら、今日と明日に使う野菜を選んでいった。

「まいどあり！」

ちよつと涙目になりながらも、八百屋のおじさんは笑顔を絶やさなかった。

ちよつと値切りすぎたかなと罪悪感を覚えながらも、僕は次の店へ向かった。

買い物を終えて僕は家へと帰ろうとしたら、ミネルバさんがと誰かが喧嘩してるのが見えた。

まだ人だかりはそんなにできていないから問題はないけど、これから人だかりができそうな予感がしたので、僕は止めることにした。「ミネルバさん、どうかしたの？」

「あ、連じゃないか。いやな、こいつが私に訳の分からないことを言ってくるから反論したら聴く耳持たない、って感じで突っかかってくるんだよ。どうにかしてくれないか？」

そう言って指差した先にいたのは、

「あ、レン！こいつに近づいてはダメよ！すごい邪悪なアンドロイドなんだから！」

「レイジニアさん？どうしてここに？」

そう、レイジニアさんだった。しかも、ちょっと臨戦態勢な状態で。「そんなことは関係ないわよ！こいつは—————」

「レイジニアさん。ちょっと落ち着いて。ミネルバさんはこの駄菓子屋で働いてるだけだから。前に似たようなものを見たのかな？」僕がそう言うと、レイジニアさんは二の句が継げなくなった状態で、ミネルバさんを見た。確認をする意味合いが強みたいだ。

その視線に気づいたミネルバさんはこう言った。

「あたしに似た奴が居たっていうのは本当だろうな。なんたって、百体くらい作られたからな。」

「そ、そうだったの。……ごめんなさい、人違いであんなこと言っただけ。」

ミネルバさんの言葉を受けて、レイジニアさんは素直に謝った。それを聞いたミネルバさんは、

「いいってことよ。あたしは気にしてないから。」

そう言って快活に笑った。

ミネルバさんは大人だなあと思いながら、僕は「これで終わったことだし、帰るね。」と言って帰ろうとしたら、

「ちょっと待ってくれないかしら？」

レイジニアさんにつかまった。

「なに？レイジニアさん？」

「ちょ、ちょっと頼みがあるんだけど。」
そう言ってレイジニアさんは僕を引っ張っていった。

閑話 とある休日 池田連編その4 (後書き)

もうしばらく辛抱してください。

閑話 とある休日 池田連編その5

「どうしたの？ 一体？」

レイジニアさんに引っ張られて裏路地に連れてかれた僕は、当然の疑問を口にした。

そしたら、レイジニアさんがちょっと恥ずかしそうに言った。

「そ、その、ちょっと買い物に付き合ってもらえないかしら？」

「え？ どうして？」

そう僕が訊くと、恥を捨てたのかレイジニアさんがこう言った。

「食料がなくなったからよ。」

その言葉があまりにも堂々としていたので、僕はちょっとだじろいでそんなになる前に食料買えよと素直に思った。レイジニアさんの言葉はまだ続き、

「だから、ちょっと手伝ってもらえないかしら？ 連って、料理うまいから。」

そう締めくくった。

僕は、深く考えないで「うん、いいよ。」と言って手伝うことにした。

「まず何から買うの？」

「まずは……やっぱり肉かしら？」

そうレイジニアさんが言ったので、僕は精肉屋に案内した。

「いらっしゃ……って、連と……彼女か!？」

「違うよ!？ 同じクラスのレイジニアさん。買い物を手伝ってるだけなんだよ。」

「ちえ。面白くねえな。……まあいい。で、嬢ちゃん。何がいい？」

精肉屋のおじちゃんがレイジニアさんにそう訊くと、彼女は何種類の肉を買っていった。ちなみに、どこで覚えたのか知らないけど、レイジニアさんは値切りができるようだった。

そんなことを各店で行った結果。

「結構安いわね、ここ。」

「結構大量に買ったね。」

レイジニアさんは買い物上手でした。これって僕の手伝い必要ないんじゃない……？

そう思っていたら、

「ありがとうね、レン。」

「え？」

レイジニアさんにお礼を言われた。

「どうして？」

「だって、あなたのおかげでスムーズに買い物できたもの。それに、あなたとの買い物、楽しかったわ。」

そう言いながらレイジニアさんは笑った。その笑顔がとても魅力的だったので、ちょっと心臓の鼓動が早まった。

「あら？顔が赤いわよ、レン？」

「あ、赤くなってないよ！」

僕がそう反論しても、レイジニアさんは笑って何も言ってくれなかった。

結局、僕の弁解を聞かずにレイジニアさんは帰っていった。まったく。

家に帰って冷蔵庫に食材を入れ、夕食を作り出した。（洗濯物はスーパーへ行く前に込んだ）夕食を作り終えたら、自室へ戻って家計簿を持ってきた。そして、家計簿を書き始めた。使ったお金はチキンと書かないとね。

家計簿を書き終えたら、ちょうど両親が帰ってきた。

「「ただいま。」」

「お帰り。」

僕が弁当を洗っている間、両親はいつものようにビール片手に夕食を食べていた。そして、僕が風呂を沸かしに行って戻ったら、両親

は酒盛りをしていた。その中で、僕は夕食を食べていった。

両親が風呂に入ってる間、僕は食器を洗って片づけたあとに朝食と昼食の下準備をしていった。

それが終わったら、僕も風呂に入って寝た。

今日はいつもよりゆっくりできてよかったなと思いつつながら

閑話 とある休日 池田連編その5 (後書き)

次から三章、夏休み編です。

三 夏休み（七月下旬～八月末日）

夏休み。僕達がとても待ち望むもの。この夏に彼女つくるぜー！
と言っていたクラスの男子がいるほど、浮かれる人が多いもの。

そんな中、僕達はどうと………。

「あっちい。本当にここに来る必要があるのか？圭。」

「……必要。毎年ここに来てから。」

「それにしてもさ、圭が誘うなんて初めてじゃない？」

圭に誘われて、デンタツというところに来ていた。

名前ぐらひは聴いたことはあるんだ。確か……………。

「……デンタツ。俺達が住んでいるところから新幹線で二時間の場所。ここは情報が飛び交う地域。電子機器を取り扱う店が数多くある。それはこの世界の中では一番の数。さらに、近くには海があるので、貿易地域としても名が高い。ちなみに、泳ぐことが可能なので、観光欲が泳いで帰ることが多い。美人も多い。」

「マジで!？」

「無駄に細かい説明ありがとうね、圭。」

「…無駄じゃない。」

失礼。細かい説明ありがとう、だった。

「それにしても、こんなところに何の用なんだ？」

もつともなことを庄一が訊いた。

ちなみに、僕達の服装は半そで半ズボンで帽子をかぶっているという、普通の服装。目立ちたいと思わないからね。

あ、両親は仕事のはず……だけど、心配だな。なんたって泊りがけで来てるんだから。僕がいなくてちゃんとできるのかな？と思ったりする。

泊りがけって言うのは、圭が誘ってきたときに言ったこと。ただで何泊も泊まれるから行かないかと圭から提案された時はどうしよ

うか悩んだけど、庄一に「たまには羽を伸ばすのも悪くはねえだろ？」と言われ、行くことにした。両親には言っている、何とか自分たちでやってもらいたい。

「……定例会。」

庄一が訊いたことに圭が答えたのは、簡単なものだった。

「定例会？という事は圭だけだよ？参加するのは。」

「……そう。だけど、今年はあっちから『友達も連れて来ていい。』と言ってきた。」

「だから俺達を誘ったんだな？」

庄一の言葉に、圭は頷いた。

「それにしても、どうして僕達呼ばれたんだろ？」

「さあな。でもただで泊まれるんだ。行っても損はないだろ。」

「交通費は自腹だよ。」

「そうだけどな。」

とやっていたら、

「……ついてこい。」

と圭が僕達を促し、僕達はおとなしく従った。

三 夏休み（七月下旬～八月末日）（後書き）

感想をお待ちしております。

夏休み（七月下旬～八月末日）（2）

「ついたわね。」

「いい天気ね。」

「そうですね。」

「なんで僕がみんなの荷物持たなきゃいけないの……？」

連たちがデンタツに着いた後、中島達も同じく到着した。

「久しぶりの休みなんだからつべこべ言わない！！」

「でもハジメの言う事はもっともね。じゃあ、私の荷物返してくれない？」

「はい、レイジニア。」

「あ。私のも……」

「はい、堇。」

「……………」

一人だけ荷物を持たせている罪悪感か、それとも優しくない女だと思われるのが嫌なのか——絶対に後者だろうが——清水は、

「やっぱり自分で持つわよ！！」

と言って、自分の荷物をひったくった。

「どうしたの、久実？いきなり。」

「いいじゃない！あんたに持たせたら盗まれそうだから自分で持つことにしたの！」

恥ずかしさを誤魔化すように、清水はそっぽを向いて言った。

急に態度が変わった清水を見て不思議に思ったが、中島は考えることをしなかった。

「じゃ、行こうか。」

中島の言葉で、みんながついていった。

このあと、ひと騒動起きることを知らずに。

「……着いた。」

「だいぶ歩いたが、目の前にあるビルは何階建てだ？」

「……四十階。」

「この名前、何？『ヒューマニステーション』って。」

「……この名前。基は貿易会社だったが、今では本社を別の所へ置き、ここはホテルとして活用されている。交流の場でもあり、会場でもある。俺の名でここを使うと、何重もの本人鑑定が行われる。」

「へえ。」

「って、庄一。危うく流そうとしてたけど、結構凄い事だからね？」

「……入る。」

と言って、圭が先に入ってしまったので、僕達も後に続いた。

「「「いらっしゃいませ。」」」

僕達が入ったら、スタッフの人たちが出迎えてくれた。そして、圭の顔を見たら血相を変えてみんな散り散りとなった。

「……あれ？」

ちよっとみなさん。置いてかれると困るんですけど。

そう思っていたら、フロントの方から一人の壮年の男が出てきてこっちに来て僕達の前に来た。その人が圭に向かってこう言った。

「久しぶりだ、圭君。本当に友達を連れてきたのかい？」

「……一年振り。そっちがいいと言った。それに、前々から一緒に来させようと思っていた。」

圭との会話を聴いてると、どうやらこの人は圭の知り合いで、定例会に出る人みたいだ。

その人が僕達に気付いたみたいで、自己紹介してくれた。

「初めまして。池田連君に岡田庄一君。私の名前は黒曜甚平。このホテルのしがない雇われ店長で、圭とは知り合いみたいなものだ。よろしく。」

「よろしくお願いします。」

「よろしく。」

僕達の名前は、おそらく圭が話したか、自分たちで調べたのかのどちらかだろう。だから、僕達は自己紹介をしなかった。

黒曜さんは、「とりあえず、場所を移そう。」と言って、圭が普段使っている部屋へと案内してくれた。使っているというよりは、割り当てられている部屋と言った方がいい、と圭は言っていたけど。部屋に案内される間、僕達は黒曜さんと話した。話した内容は他愛もない世間話だけど、友達同士の噂話というよりは、どれも裏付け、確証がある話だった。

圭はどんな人達とつるんでいるのか、僕は興味を持ったけど、知らなくても良いと思ったので本人に訊かなかった。

「着いた。ここが圭君の使っている部屋だ。」

と言って黒曜さんが案内してきた部屋は、中学三年生が絶対に使わないという以前に、大人になっても使う機会がないんじゃないかと思う部屋だった。

なんと三十五階の一室、しかもかなり広い、いわゆるVIP用の部屋。三十五階以降は、こういう部屋しかなく、しかも一階に部屋が二つしかない。一泊するのに何百万もかかるんじゃないかと思ったら、急に膝が震えだした。高所恐怖症でもないのに。

庄一を見ると、同じく膝が震えていた。恐らく、圭が毎年こんな部屋を使っているのに驚きすぎたのだろうね。

一方圭は、「……毎年毎年、ここで一人だったから凄いい暇だった。」と言っていた。あと、「……慣れると真新しさがなくなって、つまらなくなった。」とも。

黒曜さんはお辞儀をしてから、

「では圭君。定例会はいつも通りに。他のお二人は、ここにいるかホテル内を出てください。」

と言って去っていった。

僕達、ここに来たのは初めてなんだけど……。

そう言いたかったけど、何も言ってくれないだろうから言わなかった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（2）（後書き）

友人の知らない一面を知った時、あなたはどうしますか？

夏休み（七月下旬～八月末日）（3）

黒曜さんが部屋を出て。

僕達は、この後どうするか話し合うことにした。

「このあとどうする？」

「…道案内する？」

「それでも良いと思うよ。」

「定例会はいつから始まるんだ？」

「…午後七時から一時間。それを二十七日間。」

「長いね。」

「…そのうち、全員が集まるのは十日間。」

「なんだか面倒だな。その間はここにいて事だろ？」

「…そう。だから一年でここが詳しくなる。」

「結局、どうしよう？」

それで悩む僕達三人。すると、面倒になったのか庄一が、

「だ——！！こうなったら海行くぞ、海——！！」

と言い出した。僕達はというと、

「もう昼だよ？」 「…昼食べてから？」

バラバラだった。しかし、これで決定したようで、

「昼食ったら海——！用意していくぞ！」

と庄一が言った。

ヤレヤレ。

昼食は、圭曰く「穴場」と言われる場所で食べた。場所はホテルのすぐ近く。外食なんて久し振り、その上友達なんて初めてだったけど、とてもおいしかった。この味を忘れたくなかったので、手帳を取り出してメモしてたら、店長らしき人が僕のメモを見て驚いていた。なんで驚いていたのか訊いてみたところ、「使っている材料、隠し味を全部言い当てられた。」からだって。手順は教えても

らったよ。いくら何でも手順が分からないと駄目だからね。

その店を後にして、僕達は海へと向かった。といっても、ホテルがもともと海に近かったんだけどね。

そんなわけで、

「海だ————!!」

「落ち着きなよ、庄一。」

「…定番。」

水着に着替えて砂浜にいた。

ま、男三人の水着姿なんて簡単な描写だよ。

僕以外が自前。僕だけ学校指定。買う余裕なんてなかったからね。

「なんでお前、学校の物なんだ？」

「仕方ないじゃん。今の僕の財布には、水着を買うなんて選択肢なんてないんだから。それに、今まで買う必要を感じなかったから。」

「……節約ここに極まり。」

「ん？じゃあお前、ここに来るまでの金とかは？」

「僕が貯めてたお金。まだあるけど、帰りの分とかお土産とかで一
文無しになりそうだ。」

「あくまで家の金は使わねえんだな。ある意味尊敬するぜ。」

「……苦労人。それでこそ、池田連。」

「帰ったらどうしよう？」

「それより、泳ごうぜ。」

「…賛成。」

「そうだね。」

そんな会話をして、僕達は海へ向かって砂浜をかけていった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（4）

「しまったな……パラソルでも持ってくるんだった。」

「……日よけが無い。」

「本当だね。」

海で泳ぐのに飽きた僕達（ちなみに、上に服を着ています）は、砂浜で休むことにしたんだけど……パラソルを持つてくることを忘れたため、休もうにも日差しのせいで休んでる気がしない。

「どうする？」

「借りたいけどお金が……。」

「……海の家でも行く？」

僕達が悩んでいると、圭が建物を指して言った。僕達もそれを見てみると、百メートルくらい先に「海の家」と書かれた看板が建物に立てかけられていた。

「なら行くか。あそこの方が外にいるより涼しいだろうし。」

「そうだね。」

「……同感。」

話がまとまったので、僕達は海の家へ行くこととなった。

海の家に着いた僕達。でも、結構な人だかりが出来ていた。

「何かあったのか？」

「……訊いてみるか？」

「そうだね。誰が行く？」

そう言って三人でジャンケンをしたら、僕が負けた。弱いなあ、僕。

「空いてたら席取ってこいよ。」

「……頑張れ。」

分かってるよ、まったく。そう思いながら、僕は人だかりの中へ行くことにした。

人混みを分けて移動するのならバーゲンセールなどで習得済みなので、それを使って先頭まで行った。行く間に、「あの子たち、結

構レベル高いな。」「ここじゃ見たことないな?」とか聴こえたけど、気にせず進んだ。

ぽっかり空いてる空間があったので、もうすぐだと思って人を押しつけていった。

そしてその空間を見ると、

「いらっしやいませー!海の家へようこそ!」

「ど、どうぞよろしくお願いします!」

「入らないなら他の人の邪魔よ。何処かへ行つて。」

見覚えのある三人が店の前にいた。え?あの三人つてもしかして……。

「清水さんに寺井さん、レイジニアさんだよね?どうしてここに?いや、その前に。あの三人がいるってことは中島君もいるってことだね。これは……入りづらいなあ。」

どうしてこうも接触率が高いんだろう?僕達、圭の付添なのに。そう思っていたら、電話が鳴った。

「もしもし。」

『どうした?店入れたか?』

「いやあ、中島君たちが海の家で働いてるんだよ。」

『マジで!?なら入ろうぜ!驚く顔が見たいから!』

「え!?それ本当!」

『じゃ、俺達もそっち行くから。頑張つて席取つとけよ!』

「ちょっと!……切られた。もう行くしかないのかな。」

庄一に強引に決められたので、僕は勇気をもって行くことにした。

「いらっしやいま……って、ええ!?どうしてここに!」

「どうして池田君が!」

「私たちの事、つけてたの?」

「まさかあ。できるわけないじゃん、そんなこと。偶然だよ、偶

然。それよりさ、店に入りたいんだけど、いい？」

「え、ええ。いいわよ。何名様で？」

「三人。」

「ではこちらへどうぞ。」

と言って、清水さんは僕の事を案内してくれた。なんだか緊張するなあ。

「こちらでお待ちください。」

と言って、清水さんは戻っていった。僕はというと、案内された席で、一人ポツンと座っていた。

さりげなくお店を見渡してみたけど、そんなに人が入っていない。僕を含めて五人くらいしかいない。

さっさと来ないかな、二人とも。そう思いながら待っていたら、水をテーブルに置かれた。

「どうぞ。」

「あ、どう」

も。と言おうとして顔を上げたら、

「中島君だ。」

「……人違いです。」

何も隠していないのに、人違いだと言われた。

もうツツコム気が無いので、僕はおとなしくスルーした。そして、まだかなあ、と思いながら水を飲んでいたら、

「しっかし、なんだかい気分だな。こう案内されると。」

「……同意。」

「あんたたちはどうしてここに来たのよ？」

そんなやりとりをしながら、庄一と圭が清水さんに案内されてきた。他の人達はどうやら気おくれしてるみたいで、店に入ろうとしなかった。

「よっ。」

「…待たせた。」

「僕が一番苦労した気がするんだけど。」

合流した僕達が交わす言葉。

夏休み（七月下旬～八月末日）（4）（後書き）

いろいろとヤバイ気がします。そこは無視して結構です。

夏休み（七月下旬～八月末日）（5）

それを見た清水さんは、

「あんたたちは何しに来たの？」

と訊いてきた。僕は、

「旅行。」「…秘密。」「三人で観光。」

結構バラバラなことを言った。

「親と一緒にじゃないの？」

「お前らはどうだよ？」

清水さんの質問に、庄一が質問で返した。お互いに譲らないって、この事かな？

そうしていたら中島君が来て、

「久実。どうするの？お客さんが入ってこないよ？」

と言ってきた。それに興味を示したのは、庄一だった。

「どういう意味だ？」

中島君は余程切羽詰まっていたのか、事情を説明しだした。ま、要約すると……………

デントツに来て、ホテルにチェックインした四人は、海へ遊んでいた。

そして荷物を置いた場所へ戻ると、お金だけ盗まれていた。

困った四人は海の家を見つけ、働かせてほしいと頼んでOKを貰った。

だけど、人が来ないのでいろいろ試してみたけど、効果が無かった。と、言う訳だって。

その話を聞いた庄一は、

「よっしゃあ！！手伝うぜ！」

一人張り切っていた。それを聞いた僕は、

「また勝手に決めて……。」

「…これが岡田庄一。困った人は見逃せない。俺達も同類。」

「そうだけどね。」

呆れながらもやる気満々だった。それを聴いた中島君は、

「助かるよ!！」

と思いつき喜んでいた。清水さんは「やれやれ・・・」と首を振っていた。

「よっしゃ!これから役割分担行うぞ!!」

決めたことを率先してやるのが庄一の特徴なので、仕切るのはもちろん、まとめるのもうまい。

「調理はもちろん連!店の人と一緒にやってくれ!」

「分かったよ。」

「店内はウェイトレス!女子三人はこっちでやってもらう!」

「勝手に決めないで欲しいんだけど。」

「俺と中島は外で声掛け!圭はレジ!以上!」

「:了解した。」「分かったよ。」

清水さん以外は賛成して、『海の家再興作戦』（僕命名）が始まった。

「おい。今日はあの店、いつもと違うんだってよ。」

「どういうことだ?」

「普段は爺さんと婆さんが経営してるだろ?」

「ああ。」

「今日はここらじゃ見ない中学生が手伝っているんだってよ。」

「マジで!?!」

「しかも店の中に入った友達が言うには「店内が華やいでいた」んだってよ。」

「え?なに?美人でもいるの?」

「しかも、一流コックが調理しに来てるんじゃないかっていう噂だぜ。」

「マジで!?!あそこにそんな人雇う余裕あったのか?」

「とにかく、行ってみようぜ。」

「そうだな。」

夏休み（七月下旬～八月末日）（5）（後書き）

リーダーシップって、大事ですよね。

夏休み（七月下旬～八月末日）（6）（前書き）

もう二十話超えてたんですね・・・。。。。。。。

夏休み（七月下旬～八月末日）（6）

庄一が役割分担をした通りに移動してから、十分しか経っていない。それなのに、

「次！特製そば三つに、かき氷四つ！！」

「分かったよ！おじいちゃん！かき氷よろしく！！」

「分かったわ。四つじゃな？」

「そう！」

結構繁盛していた。

庄一と中島君が、声掛けという名目で口コミをしていったので、半信半疑の人たちが最初に入店。

それを迎えるのが清水さん、寺井さん、レイジニアさんの三人（ちなみに、水着ではありません）。

そして、注文された料理を作るのが、僕とこの店の経営者のおじいさんとおばあさん。

それを食べてお客さんが驚き、口コミが本当だという事を理解。

圭のレジが正確かつ手早いので、お客さんの流れが止まる事は無い。

という訳で、開始十分ですんごい繁盛していた。

そして、始まって二時間で食料の在庫がなくなり、店を閉めざるを得なくなり、待っていた人に謝りながら海の家今日の営業は終了した。

店が終了した後、おじいさんとおばあさんに感謝され、僕と圭と庄一はお金はいらないと言ったらますます感謝され、中島君たちには感謝と約束のお金、それと僕達が受け取らなかったお金の何割かを渡して、帰っていった。

それを見送った後、歩きながら、

「疲れたあ。ホテルに戻ったら飯がうまそうだ。」

「これくらいなら、あと六時間ぐらいでも大丈夫かな？」

「……普段の忙しさと比べてる？」

「うん。」

「お前の家庭って一体……。」

と言っている傍ら、

「すごいね、あの三人。」

「そうね。認めざるを得ないわね。」

「本当ですね。まさかガラガラだった店をあそこまで繁盛させるなんて。」

「本当に普通の人なの？」

と言っている人達がいた。

そのまま歩いていたら、ふと中島君が訊いてきた。

「三人はどこに泊まってるの？」

対して圭は、珍しく間髪入れずに答えた。

「四人と同じヒューマニステーション。」

その答えに四人は驚き、僕達は平然としていた。圭が黒曜さんと話していたのってこれの事だったんだ、と理解しながら。

驚きから覚めたのか、清水さんが最初に感想を言った。

「貴方達三人を見ていると、どうにも普通の意味が分からなくなるわ。」

それを聴いた庄一は、

「はっ。普通なんて人によってとり方が違うんだよ。って、連が言ってたぜ。」

何故か僕の言葉を引用していた。ちょっと待ってよ。なんで僕の言葉？ そう思ったけど、他の人たちが何故か納得したように頷いていたので、僕は逃げたくなった。

こんなことをやっていたら、中島君がこう提案してきた。

「ねえ、友達にならない？」

「は？」 「え？」 「…？」 「何いってるの、元？」 「いいわね。」

「そうですね。」

中島君の提案に、僕達は疑問形で、清水さんは言外に否定で、レイ

ジニアさんと寺井さんは肯定した。

中島君がなお続けた。

「だって、学校でも最近よく話すし、今日も手伝ってもらったからさ、友達にならないかなって。」

その言葉に、僕達三人は顔を見合わせ、声をあげて笑った。

その反応に、食いついてきたのはやはりというか清水さんだった。

「なんで笑ってるの？」

「だ、だってよ………」

「…い、今更」

「友達って………」

僕達三人が腹を抱えて笑っているのを不思議に思ったのか、中島君が訊いてきた。

「駄目だった？」

僕達三人は合図も何もしないのに揃って言った。

「「もう友達だと、俺達は思ってるよ。」」

その言葉に中島君は「じゃあ僕の事は元^{はじめ}って呼んでいいからさ、君たちの事は何て呼んだらいい？」と訊いてきた。

「俺は庄一でいい。」

「僕は連でいいよ。」

「…俺は圭。」

この言葉で、元^{はじめ}は

「よろしくね、庄一、連、圭！」

と言って笑った。そして、全員で一緒にホテルへ向かった。

こういうのって、いいよね。

夏休み（七月下旬～八月末日）（6）（後書き）

よく考えると、中学生が店の再建って難題ですね（笑）。

夏休み（七月下旬～八月末日）（7）

ホテルまでの道中。

「え、連って一人で家事を全部やってるの？」

「そうだよ。親が全くしないから困ったものだよ。」

「だからあんなに料理がうまいのね、レンって。」

「ちなみに、家の財産管理とか一人でやってるんだってよ。こいつが一人いりゃあ、家の事は完全に任せられるな。」

「私達と同じ中学生なの……？」

「……連の武勇伝は尽きない。」

「本当にすごいすよね。」

何故か僕の話題で盛り上がっていた。

「ちよっと待って。なんで僕の話題？他の人も良いでしょ？」

「じゃあ、俺の話題でもいくか？自慢じゃないが、人と仲良くなるのには自信があるぜ。」

「……話術も達者。」

「そうか？」

「あんた、それで人の事たぶらかしたりなんて……」

「してねえよ！するわきゃねえだろ！」

「でも体育の時のあの運動神経凄かったよね。ノーバウンドで一塁。」

「あれぐらいなら造作もねえよ。」

「とるのが普段僕達だけど、本気で投げられると痛いんだよね。」

「……最初の頃は一週間くらい痺れた。」

「どんな球を投げるのよ？」

「ただのストレート。ただ球速がね……」

「どのくらいなんですか？」

「……正確に測ってみたが、百四十七キロ。高校生並み。」

「昔親父が野球やってたからな。それで俺も野球選手になろうと思

っていたわけだ。今の夢は違うけどな。」

「本当に、普通の意味が分からなくなってきたわ。」
と、こめかみを抑える久実さん。

あ、僕達、清水さんの事を「久実さん」、寺井さんの事を「堇さん」と呼ぶことにした。「俺の話題はこれくらいか？」

「…次は、俺？」

「まあ、話の順番でいったらそうだけどね。」

「そうね。私達がどこに泊まるのか知っていた理由が、分かるかもしれないわね。」

「……仕方ない。」

久実さんの言葉で圭は観念したようだった。

「……俺は情報収集が趣味。ここに来たのも、似たような理由。ただし、提供者は秘密。守秘事務があるから。ここでは、俺はちよつとした有名人だったりする。」

「情報収集って、どんなものを？」

「……気になるニュースの裏とか、噂の真偽、さすがに国家機密には手を出さない。あとは……個人情報。これらは他の人には内緒。」

「本当に中学生なの？」

「更に、圭は人の気持ちを推測できるからね。想像で言ったその人の感情が合ったりするんだよ。」

「サイコメトラーですか？」

「…違う。サイコメトラーは対象者に触れて気持ちを知るのに対して、俺は対象者のその時の気持ちを想像するだけ。想像だから、合ってる保証はない。」

「でも、すんなりと納得できるぜ。お前の想像。」

「随分信頼してるのね、あなたたち。」

庄一の言葉に、レイジニアさんがそう言った。だから僕はこう言い返した。

「そう言う皆も元はじめの事を信頼してるじゃん。そこから派生してるのか知らないけど、三人とも仲がいいじゃん。」

僕がそう言うと、久実さんが「違うわ。」と言った。

「違うわ。」

「? そうなの?」

「そうよ。」

「え? でも、ライバルと書いて親友って、よく言うでしょ? そんな感じじゃないの?」

「うっ!」

僕の素直な質問に、久実さんは言葉を詰まらせた。

庄一と圭は、「連の質問攻めって、素だよな。」「……そう。連は天然。」と言っていて、それを聴いた元^{はじめ}たちは、「久実が何も言えなくなってるってすごいね。」「そ、そうですね。」「そ、そうね……」「? 二人とも、顔が赤いよ? 日にでも焼けた?」と言っていた。

元^{はじめ}のアレはともかくとして、

「どうしたの、久実さん?」

黙ったままの久実さんに話しかけた。

すると、開き直ったように久実さんが言った。

「そうね。い・ち・お・う、仲は良いわよ、私達。」

「だよね。」

これで、圭の話題が終了。早かったね。

「やっぱり連の話題の方が続くな。」

「…そうだな。苦労話で一日はいける。」

自分たちの話題の終わりがはやかたことを知って、僕の話題が一番続くという二人。

何か釈然としないなあ。

そう思っていたらホテルの前まで来たので、

「今日は楽しかったぜ。」

「…新鮮だった。」

「仲良くなれてよかったよ。」

と僕達^{はじめ}はいい、元^{はじめ}たちは

「僕も君達と仲良くなれてよかったよ。」

「連君。今度料理教えてくれませんか？」

「あ、それなら私もいいかしら？」

「私もいいかしら？料理のレパートリーが少ないから。」

と言った。……どうでもいいけど、どうして僕に料理を教えてもらいたいんだろう？

心の中で首を傾げながら、僕達は別れた。

夏休み（七月下旬～八月末日）（7）（後書き）

これからこの人たちが仲良く（？）やっています。

夏休み（七月下旬～八月末日）（8）

自室。

僕はトランプをしていたら、夕食の話になった。

「そーいや、夕飯ってどこで食べるんだ？俺達。」

「そーいえばそーだね。」

「……ここか、外、またはホテルの食堂。」

「いつもはどこだ？」

「……ここ。」

「今回は？」

そう僕が訊いた時、丁度よくノックの音がした。

「ここで食べるのか？」

庄一の質問に、圭は頷いて肯定した。

「……開ける。」

そう言って圭はドアを開けに行き、僕と庄一はトランプを片付けていった。

「夕食をお持ちしました。」

そう言って、従業員の人が夕食をテーブルに並べた。

「ありがとうございます。」

「……毎度のことながらありがとう。」

「いつも同じ人なのか？」

圭の言ったことに対して、庄一がツツコミを入れていた。

それを聴いて、その従業員の人が答えた。

「はい。私はこの部屋を担当しております。名前は詩音、と申します。これからよろしく願います。」

詩音、と名乗ったその人は、物腰が柔らかそうな女性だった。しかも、とても綺麗な人で、年齢が想像しづらい。二十代後半と言われれば納得できる顔立ちだし、落ち着いた雰囲気は三十代と言われなくてもまた、納得できる気がする。

「それでは、こちらで全てとなります。何か御用がございました場合、備え付けのボタンを押してください。」

そう言って、詩音さんは部屋を出ていった。

詩音さんが出て行った後、僕達は夕食を食べながら話した。

「しかしよ、偶然って怖いな。遭わないと思っていた元たちと遭遇するんだからな。」

「そうだね。しかも、同じホテルでしょ？ここまで偶然が続くと、明日以降も遭遇しそうじゃない？……この料理、ちょっと味づけが雑じゃない？」

「…それはあり得そう。だから、世の中何が起きるか分からない。……その報告は今日の定例会でさせてもらう。」

「いや、いいよ、別に。僕の個人的な感想だから。」

「お前の個人的感想って、一流コックのダメだしと同義だよな。」

「そうなの？」

「……気付かないのはいつものこと。」

圭がポツリとそんなことを言ったけど、僕は聴かなかったことにした。

「まあいいか。それより、明日からどうする？ここの案内してくれるんだろ？」

「…いいけど、十日あれば大体の所は案内できる。」

「あと二十六日でしょ？十日で案内が終わるんだったら、残りの十六日は？」

「……バイトでも、する？」

圭の一言に、僕達は食事の手を止めた。

「なに？」

庄一が不思議そうに圭に訊いた。

「…やるかやらないかは、二人の自由。」

「そうじゃなくて、バイトなんてできるの？」

そう僕が言うと、圭が納得したらしく、話を進めた。

「…俺の名前を出せば、いくつかのバイトはできる。例えば、料理

店だったりここのコンビニだったり。時給は店側が決めることになるが。」

その言葉に僕と庄一は顔を見合わせたけど、

「いや、いい。」

「結構だよ。バイトは。」

丁重にお断りした。

「…そう？」

「いいとは思うけどよ……。」

「それなら宿題やった方がいいかなあ、って。」

と僕が言ったら、庄一と圭は驚いた。

「どうしたの？」

「そういや、俺も持ってきたんだよ。やる気はなかったけど。」

「……俺も。」

みんな持ってきてるのならさ……………

「残りの十六日は宿題でもやらない？」

「ま、それがいいか。」

「…やらないと成績が下がる。」

ということで、案内が終わったところで宿題をやることとなった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（9）

七時になったので、圭は定例会に行き、僕達は部屋で過ごすことにした。

「なあ、」

「なに？」

僕は本を読んでいて、庄一がゲームをしていた時、庄一がふと言ってきた。

「お前って、好きな人いる？」

「え？」

まさかまたその話題が出てくるとは。

「どうして？」

「いやな、最近変な噂があつてな。」
噂？

「それって？」

「圭が言ってたんだけどよ。最近というか、夏休み前までに連の事が好きな人が結構いるんだってよ。」

「えく？」

うっそだく。僕なんてただの少年だよ？ 圭みたく情報処理が得意なわけじゃないし、庄一みたいに運動神経良くないし、元^{はじめ}みたいに力はないし。

「お前、心当たりがないって顔してるな。」

そんな僕を見て、庄一はため息をついた。

どうかしたのだろうか？

「元^{はじめ}もそうだが、どうして鈍い奴らが多いんだろうな。」

「そう言う庄一だってモテるじゃん。」

「は？」

君もじゃないか。鈍いの。

「僕も噂で聞ってるよ。圭の経由じゃないけど。」

「信憑性に欠けるんだが。」

「いいじゃない。確か……隣のクラスの朝月さん。最近庄一のこと訊いてるらしいんだよね。他の女子からさ。どんな人なのか、とか、好きな食べ物、とか。」

「朝月……？ああ！道端で不良に絡まれてた女子か！でも助けただけだぞ？そんなことあるのか？」

「あるんじゃない？」

これで会話が終了。でも僕には気になることがあった。

「ねえ庄一。」

「あん？」

「どうして僕が好かれるの？庄一は分かるけど。」

「そこかよ。まあいいけどよ。……お前が好かれるところってのは、人柄もそうだけど、家事が得意ってところだな。」

「みんな出来るでしょ？」

「そうだけだな。……何というか、家事スキルが人より優れてるだろ？」

「人並みだと思う。」

「そこで即答かよ。」

僕はそう思うから。

「もういい。つまりだ、誰にでも人懐っこくて家事ができるのが、女子にとって憧れなんだろうな。」

「へえ。」

庄一の結論に、僕の感想はそんな感じだった。

「それって、圭の考えだよな？」

「そうだけだな。」

それで僕達の会話は今度こそ終了。

その後、一人ずつ風呂に入ったら圭が来て、圭も風呂に入った後三人で会話して、それぞれのベッドで寝た。

そんな感じで日にちは過ぎて……………。

「なんだかあったという間だったなあ。」

「…収穫はたくさんあった。」

「結構な頻度で元たちと会ったね。」

「そうだな。」

「…鉢合わせという形が多かった。」

帰りの新幹線の中、僕達はそんなことを言っていた。

「それにしても、元と久美さん。ぎこちない雰囲気だったけど、何かあったのかな？」

「…全体的にぎこちなかった。」

「あいつらに何があったんだろうな？」

「…調べる？」

「それはいいよ。なんとなく触れてはいけない気がするから。」

「俺もだ。さわらぬ神に何とやらだ。」

「…分かった。個人的に調べる。」

「「いや、やめとけよ。」」

これにて僕達の夏休みの大部分が終わった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（9）（後書き）

次回、池田家全員集合！

夏休み（七月下旬～八月末日）（10）（前書き）

池田家最後の一人が登場します。

夏休み（七月下旬～八月末日）（10）

家に帰ってきて。

「ただいまー。」

そう言って家の中へ入ると、見慣れない靴が置いてあった。

「誰か来てるのー？」

そう言いながらリビングへ行くと、こんな言葉が返ってきた。

「あ。お帰りー。久し振り、連。」

その言葉と、目撃した人を見て、僕は驚いた。

「え！？な、渚お姉ちゃん！？いつ帰ってきてたの！？」

「うー、連が友達と旅行へ行った次の日。両親から電話があつてさ。『暇？』って。忙しいと言ったら、『助けてー。』と泣きついてきたから仕方なく戻ってきたんだよ。ついでに、しばらく休みを貰ったから、ここでこうしてるってわけ。」

「あ、ごめん。お姉ちゃん。」

「いいってことよ。いつもは連がやっているんだからな。」
と言うお姉ちゃん。

紹介するのを忘れてた。

池田渚。僕のお姉ちゃん、女優。タレント名は『風』。この世界で凄い人気がある女優で、今までで出演した映画は六本、ドラマは十本を超える。そのどれもがDVD化しているので、良く家に送られてくる。……サイン入りで。

ちなみに、結婚はしていない。理由が『あの両親の面倒をみられそうない男がいらないから』だって。確かにそうだね。

僕に姉がいることと、僕の姉の正体を知っているのは庄一と圭だけ。ま、圭が僕の事を調べてきたときに、驚いてポツリとこぼしたのが原因なんだけどね。

「それにしても、」

僕を見て、姉さんが何故か悩んでいた。

「どうしたの？」

「それにしても、連。見ないうちに大きくなったなあ。しかも料理の腕も上がったんだろ？私が両親に飯をつくったら、『連の方が凄い美味しいよ。』って言われてさ、ちょっと悔しかったな。」

「そう？」

久し振りの姉弟きょうだいの会話。家族全員が揃ったのっていいよね（両親は仕事みたいだけど）。

「というわけで。帰ってきて早々で悪いけど、夕飯つくってくれない？」

「えゝ？僕はお姉ちゃんの料理が食べたいんだけど。」

「私は連の料理が食べたいんだ。つくってくれたっていいじゃん。」

「えゝゝゝゝゝ。」

姉の理不尽な要求に、僕はささやかな抵抗を試みた。

「冷蔵庫に何が入ってるのか把握してないんだけど。」

「そんなもの良いから。残ってるもので自分の得意料理でも作って。」

「

り、理不尽すぎる………………。これが弟という立場か……………！

しかし、それで反抗するほど僕は子供じゃないので、おとなしく作ることにした。

姉が帰ってきたことが、変な波乱を巻き起こすことを知らずに。

「久し振りだねゝゝ、連。帰ってきて良かったよ！」

「そうね。渚も戻って来たし、久し振りに家族水いらずね。」

「本当においしくなったな！昔もおいしかったが。」

「帰ってきて早々この仕打ち。理不尽だ…………。」

結局、料理をつくることになった僕は、冷蔵庫の中にあるものでつくり、つくり終わったら両親が帰ってきて、今のような状況。

久し振りに家に帰って来たけど、僕ってこういう状況かならないのかな？

と、いつの間にか両親と一緒にビールを飲んでいる姉が、おとなしく食べていた僕にこう訊いてきた。

「そーいや連。」

「なに？」

「連って、彼女いるの？」

その言葉に僕は料理を食べている手を止めた。

「お姉ちゃんは？」

「私はまだだな。まだ二十になったばかりだから、もうちょっとゆつくり選ぶさ。そう言う連はどうなの？ いないの？」

「うん。」

「そう。いないの。」

「うん。」

「分かった。」

何が分かったんだろう？

そう思ったけど、おとなしく食べていった。

両親と姉がビールを飲んでハジケ出したころ。

僕は自分の部屋で色々やっていた。学校の準備、服の片付け、本の整理、僕の財布の状況確認。と言っても、夏休みまだ四日あるんだけどね。

この旅行で結構なお金使ったなあ。そう思いながら、僕はどうやってお金を貯めようか考え出した。

風呂に入った後。僕は自分の部屋、じゃなくて、元姉の部屋に來ていた。

どうしてって？ 僕が訊きたいんだけど。

部屋に入ってまず気付いたことは、部屋が汚いという事だった。

「お姉ちゃん。相変らず部屋が汚いね。この分だとあっちの方も汚いだろうね。」

「うるさいね。自分が分かっていたらいいんだよ。」

「そんなじゃ、彼氏できてもすぐ別れそうだね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

その言葉に何も言い返せなくなったお姉ちゃん。

僕は簡単に片づけをしながら、要件を訊いた。

「で？僕に何の用？言っとくけど、家の事で手一杯だから。」

お姉ちゃんは頭をかきながらこう言った。

「あゝ、ちよつと相談事があるんだ。だから休みでここに帰ってきたんだ。」

「あっそう。……これ、捨てていい？」

「それはダメだ。……実はな、今度またドラマに出演することに決まったんだ。」

「ていうか、お姉ちゃんの夢ってもう叶ってるだよね。よかったよかった。」

「話を聴く気があるのか？……そのドラマの役が先生役なんだ。で、役作りをしようにも教える生徒がいんじゃないじゃ話にならない。」

「僕にその生徒役を？」

「そう。」

簡単に片付けをやっている間にそんな話をしていた。

僕が生徒役ですか……。暇だからいいんだけどね。そう思いながら、

「いいよ。どうせ暇だから。」

と言ったら、姉ちゃんは笑顔でこう言った。

「そうか！助かる！！」

という訳で、残りの夏休みはお姉ちゃんの役作りの相手をしていました。たまに庄一と圭も

交じってやっていたよ。今年はいつもと違う夏休みで楽しかった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（10）（後書き）

感想をお待ちしております。

人物紹介 その二（前書き）

今回は新しい人たちでも。

人物紹介 その二

レイジニア・ゼロ（15）・・・とある事件を引き起こしたネクロマンサー。改心の余地ありというので、元たちと同じクラスに転校してきた。一応外人だが、元たちの言葉は理解できている。例によって美人で、元のが好き。最近はレンに家事について教わろうかどうか思案中らしい。

黒曜（？）・・・・・・情報屋。ヒューマニステーションの雇われ店長。結構圭とは仲がいい。

定例会の場を提供する傍ら、自身も情報屋として出席している。最近圭の友達が面白い人たちだと思って、いろいろと調べているらしい。

詩音（？）・・・・・・ヒューマニステーション三十五階の専属スタッフ。圭以外の客に対しては意外と平静な態度で接していることは、黒曜しか知らない秘密である。そして、詩音自身も知らない。

池田渚（20）・・・・・・タレント名『凧』。世界で有名な大女優で、十五の時にデビュー。それからというもの、池田家には自身が出演したドラマや映画のDVDをサイン入りで送ってくる。モテるが、彼氏なし。一応家事はできるが、部屋の掃除は苦手。

ミネルバさん・・・・・・ロボットで駄菓子屋店員。何を間違ったか男口調の言語プログラムを入力されたまま人間世界に出た。ちなみに、商店街で結構人気がある。

人物紹介 その二（後書き）

・・・これくらい、でしたっけ？

閑話 とある休日 岡田庄一編（前書き）

今回は、岡田庄一の休日。普段彼はどんな休日をおすごししているのでしょうか……？

閑話 とある休日 岡田庄一編

俺主体で書くのは初めてじゃねえか？なんていうメタな発言は置いて。

よっ！俺は岡田庄一。連の親友だ。今日は俺のちよつとした休日を見せてやるぜ。

俺は休みだと午前九時に起きる。なぜなら、休みの日は誰も俺を起こしに来ないからだ。ゆっくり寝られるぜ。いつもなら結構早いんだぜ。

俺は一階へ降りてリビングで朝食を食べ始めた。その時、家には誰もいなかった。きつと仕事に行ってるのだろう。大変だな。

朝食を食べ終え、食器を片づけてから、俺は外に出た。家にじつとしてられない性分だからだ。

しばらく散歩していると、遠くに見覚えのあるやつがいた。よく目を凝らしてみると、どうやら走って逃げているみたいだった。

俺はこれに巻き込まれたら面倒だと直感し、路地裏に素早く隠れ通りをチラ見した。傍から見たら変な奴に見えるんだろうな。

逃げてる奴はだんだんこっちに近づいてきたので、顔がよく見えってきたって……

「元！？また何か面倒なことに巻き込まれてんじゃねえだろうな！？」

元だった。俺はどうするか悩んだが、あいつなら何とかやるだろうと思いつきそのまま隠れることにした。

そして、どうやら足音が遠ざかっていったみたいだ。その時追っている奴らをチラッと見たが、どうもいつもの女子三人組じゃなく、どっかの不良だった。きつと人助けをした見返りだろう。

俺は路地裏から出て、通りをまた散歩しだした。……携帯電話を手を持ちながら。

閑話 とある休日 岡田庄二編（後書き）

短いですが、続きます。

閑話 とある休日 岡田庄一編その2

「はあ、はあ、はあ……」

「もう逃げらんねえぞお、小僧。」

「俺たちの邪魔しやがって、ただじゃおかねえぞ。」
「くっ！」

行き止まりに追い詰められた元と、それを囲む不良たち六人。元は能力を使うかどうか悩んでいたら、

ドカツ！バキッ！

「おいおい。おとなげねえな、あんたら。一人相手に集団かよ。」

「だ、誰だ！？」

「……え？」

反対側からヒーローのように参上してきた庄一がいた。その前には、いましがた殴られたと思われる不良たち二人がのびていた。

「よう元。助けに来たぜ。」

「……どうして？」

俺は不良たちのことを無視して、元と会話した。どうやら、俺がここにいるのが不思議らしい。

そんなことを無視して、俺は話を続けた。

「今度は何やったんだ、一体？」

「え？ いや、あははは……」

それなのに、どうにも気まずそうに答えてくれなかった。

俺が無視したのが気に食わなかったのか不良の一人が、

「無視してんじゃねえ！」

と言って俺に殴り掛かってきた。うわ、突っ込んでくるとかマジありえねえ。

それをひらりと躲すときに、俺はそいつの腹に一発入れた。それだけで、うずくまって動けなくなっていた。弱いな、こいつ。

一方不良の集団（といっても六人だけ）はそんな俺を見て、

「ば、化け物かよ!？」

と言って倒れてる奴らを回収して逃げて行った。その後ろ姿を見ながら、

「これに懲りたら二度と不良やるんじゃねえぞ!」
と言った。

閑話 とある休日 岡田庄二編その2 (後書き)

もう庄二主役でもいいんじゃないや……？

閑話 とある休日 岡田庄二編その3 (前書き)

もう四十話になりました。

閑話 とある休日 岡田庄一編その3

「ありがとう、庄一。」

「いいってことよ。本当は無視するつもりだったからな。」

「何気にひどいこと言ってるじゃない!？」

不良たちが去っていったあと、俺と元は二人で歩いていた。といっても、互いに特に買うものがないため、散歩してる状態なのだが。

「それにしてもよ、どうして追われてたんだ？」

俺は疑問に思っていたことを元に尋ねた。すると、急に元の声のトーンが落ちた。

「不良たちに絡まれていた人が嫌そうだったから助けたんだけどね。能力を普段使わないから何もできなかったんだ。」

「それって、まだあのことを引きずってるのか？」

その言葉に、元は一瞬動きを止めた。

「……たぶんね。久美と堇のおかげでちよとは癒えたけど、まだかな。」

その言葉を聞いた俺は、上を向きながらこう言った。

「人間だれにでも傷はある。お前だけが特別深い傷を持ってるってわけじゃねえんだよ。」

「え？」

まさか俺がそんなことを言うと思わなかったのか、意外という目で元は俺を見てきた。言っちゃワリイかよ。

俺は気にせず続けた。

「傷を持ってないで生きてる奴なんてそうそういねえし。もしそんな奴が居たら、そいつはきつと赤ちゃんだけだ。傷を持つから痛みがわかる。傷を持っても痛みがわからないなら、そいつは人間じゃねえ。」

そこまで言うと、元が俺にこう言った。

「庄一って、すごい考え方してるんだね。」

「………って、連が言ってた。」

「ちよっと損した気分だよ！」

「かくいう連も、小説の引用だって言ってた。」

「いい話が台無しだよ！」

そう言いながら、地団太を踏む元。おい。目立ってるぞ。

俺は仕方ないと思いながら、

「元、空を見ろよ。」

といった。そろそろ首がつかれそうだ。

言われた元は、首をかしげながらも上を向いてくれた。そして、
「うわぁ、広いし綺麗だ。」

まるで初めて見たような感想を言っていた。俺も空を眺めながら、
「いつまでもウジウジしてるんじゃないよ。空なんて雨降ったと思っ
たら晴れたりするだろ？過去のことに縛られるのも結構だが、前を
見て進んだらどうだ？」

と、恥ずかしいセリフをいつの間にか言っていた。連の奴からうつ
ったかな？

その言葉を聞いた元は少し驚きながらも、

「もう逃げないと決めたから大丈夫だよ。それに、一人で背負い込
むつもりなんて今の僕にはほとんど無いからね。」

といった。今更だが、俺たち立ち止まってるから通行人の邪魔なん
だよな。

そう思った俺は、再び歩くことにした。

閑話 とある休日 岡田庄二編その3 (後書き)

続きます。

閑話 とある休日 岡田庄一編その4

歩いていたら、正午になった。結局一緒に歩いていた俺と元は、どこかで昼を食べることにした。

「どこで食べるんだ？」

「庄一は？」

公園のベンチに座りながら、俺たちは昼をどこで食べるか話し合っていた。

「俺は……コンビニで買えばいいかな。金かからねえし。」

「僕もそうしようかな？最近財布が厳しくなってきたから。」

「ふーん……。じゃ、コンビニ行こうぜ。」

「そうだね。」

これを話し合いと言えるのか少し疑問に思ったが、気にせずコンビニへ行くことにした。

「いらっしやいませー。」

「いらっしや——アウチ！」

店に入るなり、一人おかしな奴が居た。

「この店、大丈夫かな？」

「気にするな。どうせいつものことだ。」

ちなみに、俺たちが来たところはスーパーの近く。本当は俺の家からちよつと遠いのだが、どうせ散歩だ。のんびりするさ。

「ありが——アンデルテ！」

「ありがとうございましたー。」

会計を済ませて店を出るとき、そんな声をかけられた。たまに利用するが、この店ホント大丈夫だろうかと思わずにいられない。

「ま、面白いんだがな。」

「よく来るけどクビにならないのが不思議なんだよね。」

確かに不思議だなと思しながら、俺たちは公園のベンチに座って昼食を食べた。

食べている途中、誰かが声をかけてきた。

「あら、元に……庄一じゃない。珍しいわね、こんなところにいるなんて。しかもその組み合わせで。」

「ん？」

「あ、久美。どうしたの？」

清水久美だった。久美はその長い髪をかきあげながらこう言った。

「暇だったから散歩してたのよ。それで元と出会えたんだから、私たちは赤い糸で結ばれてるんじゃないかしら？」

その言葉を聞いた元はこう反論した。

「この公園の近くじゃないか、久美の家は。偶然というよりは、僕を見かけたから来たんじゃないの？」

「さすが元ね。正解。」

そうあっさり認めた久美。もうちょっと粘ろうぜ。

そう思いながら昼食を食べていたら、久美が俺に向かってこう言ってきた。

「ちょっとどいてもらえないかしら？」

「まだ座るスペースあるだろ。そっちにしろ。」

「それじゃ私と元が二人きりにならないじゃない。」

なんだこいつ。わがままにもほどがあるだろ。

俺は急いで食べ終え、こういった。

「ふざけんじゃねえぞ。そんなに二人つきりになりたいのなら別な日にしろや。」

「なんですって？」

そう言って、俺と久美はにらみ合いとなった。それを見ている元は緊張してるみたいだった。

そして、何か言う前に声をかけられた。

「あれ？久美さんに元に庄一？どうしたの？こんなところで一触即発な雰囲気醸し出して。」

その声の主を見て俺達は驚いた。

「連？」「連よね？」「お前こそ何をやってるんだ？」

確かに連だった。しかも、その周りにいるのが子供たちばかりだったのだ。そりゃ驚くって。

俺の質問に、連は答えた。

「えっとね、ふらっと散歩に出かけたら見知った主婦の人たちがいてさ。その人たちと話していたら子供たちの面倒を見てくれないかって言われてね。戻ってくるまで面倒を見ることにしたんだ。」

ざっと見た感じ、九人ぐらいいるんじゃないか？そいつらを顔色一つ変えずに一人ひとり面倒を見ていく連。どこまで苦勞人なんだ、お前。

そう思っていたら、おそらく連の光景を見た久美がこう言った。

「……………連を見てると、今の私たちがいかにくだらないことで喧嘩してるのかわかるわね。」

それに便乗して、

「そうだな。俺はあいつの手伝いでもするか。どうせ暇なんだからじゃ、お前らは仲良くやれよ。」

と言って俺はその場を離れ連のところへ行こうとしたら、

「行くわよ、元。」

「え？僕も？」

「そうよ。あたしたちが結婚して子供ができた時の予行練習だと思って、連の手伝いをするわよ。」

「それはいいけど……………僕たちまだ付き合ってすらいないからね！？」

という声とともに一緒についてきた。

意外と友達思いなんだなと思いつつ、俺は子供の世話をしている連に近寄ってこう言った。

「なあ、連。俺達にも手伝えることないか？」

連は子供の世話をしながらこう言った。

「じゃ、庄一は遊びたそうにしてる子供たちの相手。久美さんと元はこの子。」

こいつの指示は本当に的確だから驚くんだよなあ、と思いながら「

分かった。」と言って俺は子供たちと遊んだ。

元と久美は、連が預かったと思われる赤ちゃんの世話を二人でしていた。なるほど。あいつは色々とお膳立てをしてるわけか。仲良くやってるみたいだ。

午後二時になって、子供たちの親が迎えに来た。連は、お世話をしたお札に色々と渡された。

親と一緒に帰る子供たちを見送っていたら、連がまず俺に近づいて、「みんなありがとうね。庄一はこれがいいね？」
と言って俺に差し出したものは、お金だった。

「いいのか？お前がもらったものだろ？」

俺はお金を受け取りながら連に言った。おお、すげ。
対して、

「いいんだよ。僕も手伝ってもらったんだから。はい、久美さんに元。」

そう言いながら、元と久美にも同じく渡した。

二人はしぶしぶ受け取りながら「ありがとう。」と言った。

で、俺はさりげなく連の手元を見てみたら連はお金を持っていなかった。

「おい。お金は？」

俺がそう訊くと、

「ん？あるよ。ポケットに。ちよつとしたレシピを教えてもらったから別にいいんだ。それじゃ。」

と言って連は帰っていった。

残された俺たちは、

「じゃあな。」

「またね。」

「そうね。」

と言って帰った。楽しかったけどな。

閑話 とある休日 岡田庄二編その4（後書き）

次回、岡田庄二編終わります。

閑話 とある休日 岡田庄一編その5

「ただいまー。」

と言って家に帰ってきたのが午後四時。その時にも両親は帰ってきておらず、俺は洗濯物をこんだ後、自室で寝ることにした。

俺の部屋は、俺から見ればきれいに整理されてるのだが、ほかの奴らからだと汚すぎると言われる。母親から、常日頃から『部屋の掃除をなさい。』と言われるほど。ちなみに、連と圭は俺の家にそんなに来ない。圭の家も同じく。だって連の家が色々都合がいいから。

「これみたら連の奴、絶対に掃除すると言い出しそうだなあ。」
そう言っただけ息をつきながら、俺はちよつとした部屋の整理をすることにした。

部屋の掃除をしていたら、いつの間にか母親が帰ってきていた。あんまり進まなかったがな。

夕飯ができたといわれ、俺は一階へ降り、母親と一緒に夕飯を食べた。親父が遅くまで帰ってこないのは通例なので、我が家の夕飯は二人のみである。

特に会話もなく夕飯は進み、食べ終わったら俺が食器を洗って片づけた。これは小五くらいからやっていることで、今では結構慣れた。

風呂から上がると、親父が帰ってきていた。俺は、「おかえり。」と言って二階へ上がった。

片付けがままならない部屋で、俺は普通に寝た。親父とどうやって仲直りしようかと思いつながら。

閑話 とある休日 岡田庄二編その5 (後書き)

次回は何かいいでしょうか？閑話？それとも・・・

四 九月上旬のある日

「夏休みが終わってすぐに体育祭か。秋は行事が多くてなんだか楽しいな。」

「体を動かせるからでしょ？僕は多くて気が滅入るよ。」

「：体育祭は来週から三日間。クラス対抗。一人三競技以上に出る。」

「庄一は？」

「俺は今年こそ全部の競技に出るぜ！」

「：庄一が出ると、一位が確定する。」

「多分、競技の出場制限されるんじゃないのかな？」

夏休みが終わって、僕達は来週に行われる体育祭について話していた。

僕達の学校では、学年別クラス対抗の体育祭が行われる。初日に行うのが一年生で、二日目が二年、最終日が僕達三年。最終日だからって、初日と二日目に行かなくてはいいい、という訳ではない。初日も二日目も、僕達が準備の手伝いをしなければならない。最終日は一年と二年生がやってくれるんだけどね。

で、一日しかないのに、競技の数が多い。一日だけだったら四つぐらいなんだろうけど、僕達の所では八個ぐらいある。鬼だよね。それに、毎年毎年競技が変わる、という事が無い。なので、考える必要性が無いという訳だから、その分練習できるんだ。毎年同じだと飽きるんだけどね。

その競技は、百メートル走、障害物競走、パン食い競走、大玉転がし、綱引き、騎馬戦、借り物競走、男女混合リレーの八つ（大玉転がしと騎馬戦と綱引きはクラス全員参加、男女混合リレーはクラス代表）。走るのばかり。

最後に、この体育祭では超能力や魔法などが使用するのを許可されているので、例年怪我人が沢山いる。僕達みたいな普通の人たち

が主だっている。なんでもありってことだね。

「そう考えるとさ、庄一ってすごいよね。」

「なんだ？いきなり。」

「…魔法などが飛び交う中、生身で一位を取る。もはやこの学校の伝説。」

「うんうん。」

「そういうものかあ？」

なんだかわかっていない庄一。ちなみに、昼食の時間。元^{はじめ}たちはどこかで一緒に食べてるんじゃないかな？雰囲気はまだおかしかったけど。

と、そんな僕の考えを知ってか知らずか、庄一が思い出したように切り出した。

「そういや、結局あいつら、ぎこちないままだな。」

弁当を食べながら、圭が便乗して言った。

「……何かハプニングがあったと推測。さらに、学校内でもあの四人のぎこちない雰囲気についてはすでに広まっている。」

「圭のせいじゃないでしょ？」

「……俺は噂を広めはしない。噂の操作と調べるだけ。」

「ま、俺達でどうこう出来やしねえけどな。」

そう庄一が締めて、僕達は弁当を食べることに集中した。

四 九月上旬のある日（後書き）

これから更新が遅れるかもしれません。

あと、新しく投稿します。『考える人』か、『アイドルッ!』のどちらかか、その両方かもしれません。温かい目で見守ってください。

九月上旬のある日（2）

五校時目。

僕達のクラスというか、他のクラスは、クラス会を開いていた。

議題？そんなの『参加する競技決め』しかないよ。

ということで、

「えー、参加したい競技がある人は手を上げて競技名を言ってくださーい。」

議長である委員長こと、久実さん。大変そうだね。

と、一人の生徒が手を上げた。それはもちろん……………

・・・

「俺、全部やるぜ。」

「あんた、それ本気で言ってるの？」

庄一その人である。その本人はというと、

「当たり前だろ。去年は六種目しか出れなかったんだ。全部やりたーい。」

物凄い自信である。ふと思いついたように、堇さんがこう言った。

「そういえば話題になりましたね。何の能力を持たない人が六種目で一位をとったって。」

「そういえばそうね。あの時は私達がいなかったから分からなかったけど、あんただったの？」

「おう。個人種目しか無くて助かってるぜ。」

そう言いながら胸を張る庄一。その時のクラス内は「ああ、こいつはすごかったな。」「魔法で身体強化してもぶっちぎるんだから。」

「借り物競走なんてあつという間に持ってきてきちゃってたよね。」と、過去の庄一の武勇伝を語っていた。

これを聴いた久実さんは、

「全種目に出るのはいいけど、勝てるの？」

と訊いてきた。それに対して、庄一は心外だと言わんばかりに肩を

すくめ、

「やると言ったら貫くさ。」

と言った。カッコいいね。

それを聴いた董さん、久実さん、レイジニアさん以外の女子は、
なんだか熱っぽく観ていた。

・・・庄一を。

それを聴いた久実さんは、

「できなかったらクラス全員に飯、おごりね。」

容赦なく言った。

「うお！それはきついが絶対負けねえ！！」

対する庄一も、負けじと言った。

一人は決まったので、他の人たちの競技を決めることにした。
で、

「なんでパン食い競走に人が集まってるわけ……？」

と、久実さんが頭を押さえながら言ってるように、パン食い競走に
人が集中して、他の競技にそんなに人がいなかった。

久実さんの疑問を解消するように、圭が手を上げて言った。

「……一年の頃からこの競技の倍率が高い。理由は、単純にパンが
美味しいから。ちなみに、去年は他クラスのパンまで食べて失格に
なった人がいる。」

それを聴いた久実さんは、一瞬僕の事を見てからこう言った。

「じゃ、この中から決めるわよ。くじで。」

その言葉で皆おとなしくなり、志望した人はくじを引いて誰が出場
するか決まった。

あ、僕？僕は障害物競走にしか出ないよ。大玉転がしと騎馬戦と
綱引き以外には。

だって、バーゲンセールやタイムセールの経験を生かすには、ここ
しかないんだもん。でも一位は取れなかったんだよね。

さて、あぶれた人は空いてる競技に移った。仕方ないけどね。

「これで、全員決まったわね。じゃ、来週の体育祭、絶対優勝する

わよ！」

『おお———！！』

久実さんの一言で、クラスは一丸となったのかな？ノリはいいんだけどね。

さてさて、僕は僕でやらないとね。

九月上旬のある日（2）（後書き）

頑張っています。

九月上旬のある日(3)

さて放課後になりました。

「一緒に帰ろうぜ。」

「…庄一。連は無理だと思う。」

「あ、ごめん。庄一。」

「あ、そういえばそうだったな。すまん。じゃ、俺達帰るから。」

「…頑張れ。」

「じゃあね。」

いつもなら三人で帰るんだけど、今回は違う。なぜなら、僕にとって大変面倒なことがあるからだ。

「さて、職員室へ行こう。」

と言って、人がまだいる中僕は職員室へ向かった。

はずなんだけどね……………

「ちょっといいかしら、連。」

「その前にロープをほどいてくれない？」

校舎の裏側。僕は久実さんに拉致られていた。

説明すると……………

職員室へと僕は歩いていった。その時に一本のロープを見つけたので、誰が落としたんだろう？ と思いながら拾ったら、突如としてロープが僕を縛ってここまで連行してきた。しかも、誰も人がいなかった。

ので、助けを呼ぶにも無理だった。で、連行された場所に久実さんがいたからこれは久実さんの仕業だな、と理解できたわけ。

僕の要求に、久実さんは「そうね。逃げる気はなさそうだし。」と言ってロープをほどしてくれた。

僕は、とりあえず久実さんの話を聴かないと引き下がってくれなさ

そうだと思ったので、訊いてみた。

「僕に何か用なの？」

すると、久実さんがこう言ってきた。

「あなた、料理得意よね。」

「多分。」

質問の意図が分からなかったので、僕はそう答えた。分かっているもそう答えたけどね。

そう答えると、久実さんは「自覚が無いのかしら…？」とぼやいた後、こう言った。

「最近さ、元^{はじめ}とどうも面と向かうのが出来ないのよ。」

いつも強気なこの人がこんな弱音を吐くなんて。そう思いながら、僕はとりあえず思いついた言葉を言った。

「意識してるからじゃない？」

「うっ！」

僕の指摘で、久実さんが赤面した。可愛いなあ。

でもどうして僕なんだろう？ そう思いながら、僕は尝试してみた。

「もしかして……何とか面と向き合いたいから、お弁当を作って一緒に食べようとしてるの？」

「な、なんで分かったのよ！？」

当てずっぽうで言ったのに、まさか当たるとは。

久実さんもやっぱり恋をしてる人なんだなあと思いながら、話を聴くことにした。

「べ、別に元^{はじめ}のためじゃないわよ！！ただ堇の料理がおいしくなってきたるし、レイジニアだって何かと頑張ってるからよ！」

ツンデレ、ってこの人の事だね？ なんとなくそんなことを思った。

そんな僕をよそに、久実さんは続けた。

「私だって、色々とやってるわよ。料理だって家事だって。元^{はじめ}と一緒にいるのも私の方が長いんだから。」

そういえば、久実さんと元^{はじめ}って幼馴染なんだよね。と今更なことを

思う僕。

「それなのに元^{はじめ}ったら、私の気持ちも知らないであの二人と仲良くしちゃって。それだけならいいけど、董とキスしそうになったし・・・・。私なんてしたこともないのに。」

なるほど。夏休みに起こったのはそれだったのか。と、ぎこちな
い雰囲気の原因が分かった気がした。

「だから、」

「だから？」

久実さんが言おうとした時に、ちょっと僕は口を出してみた。

「……あの二人に負けたくないのよ！」

ま、分かってはいたけどね。そう思いながら、僕って便利屋か何かを間違われているのではないだろうか？と今更思った。

久実さんの話を聴き終えた僕は、

「だったら二人きりの時にでもせまってみたら？」

なんとなくアドバイスを試してみた。ま、料理を教えるでもよかった
んだけどね。

「な、何言ってるのよ！？」

僕の言ったことに、久実さんは赤面しながら慌てて言った。

「なについて、ちょっとだけ大胆になればいいんじゃないかなって・
・。。」

「そ、そんなことできるわけじゃない！！」

ひよっとして、久実さんってウブ？

自分の事を棚に上げて、僕はそう思った。

「大丈夫！一歩踏み出す勇気があればできるって！」

「なによそれ！？」

えー、上手い解決方法のような気がするんだけどなあ。

と、ここで何かに気付いたのか、久実さんが訊いてきた。

「連。あんたさ、もしかして料理を教える気が無いんじゃないの？」

「はっはっはっはー、そんな訳ないよ。」

「だったらどうして私の目を見て言わないの？」

どうしてでしょうね？わかりません。

と、久実さんが何かをあきらめた感じで、

「もういいいわ。あなたの意見を一応参考にするけど、ありがとう、
とは言わないわよ。」

と言って帰っていった。

言ってるじゃん、ありがとうって。

そう思いながら、僕は職員室へと向かって行った。大変だよねえ、
と思いながら。

後日。

「ねえ久実？」

「なに元^{はじめ}？」

「どうして腕を組んで一緒に登校してるの？あ、あの、色々当っ
てるんだけど・・・。」

「どうしてでしょうね？」

「あ！ずるいです久実さん！元君と腕を組みながら歩くな^{はじめ}んて！！」

「あなた、抜け駆けしてるんじゃないわよね？」

「いいじゃない、これぐらい。」

登校中、腕を組んで歩く元と久美さんの姿を目撃した葦さんとレイ
ジニアさんによって、いつもの雰囲気に戻った。

僕はというと、

「…………という事があったんだよ。」

「お前も大変だな。家の事と、体育祭の事があるんだから。」

「……無理はするな。」

「ありがとうね。」

「それにしても、あいつら、元に戻ったんだな。」

「…何があったんだ？」

「さあね。」

「知ってるのか？」

「…誰にも言わない。それが俺。」

「聴く気満々だね。でもこればかりは言えないよ。」

「秘密にされると訊きたくなるな。」

「…多少手荒い手段を使ってでも訊きだす。」

「それが友達に対する行動!？」

休み時間になると、僕は二人から逃げ、二人は僕の事を追った。
それを見ていた久実さんは、笑っていたような気がした。

「久実、どうしたの？」

「あの三人は相変わらずだなんて。」

「久実さん！ちよつと元君はじめに近すぎませんか!？」

「ハジメ、あなたからも言ったらどうなの？」

本当に、助かったわよ、連。

元がはじめ大変な思いをしている中、久実はそんなことを思っていた。

九月上旬のある日（3）（後書き）

次回、体育祭の結果とその中で起きたひと騒動をお送りします。

九月上旬のある日（4）

三年の部、体育祭の結果。

僕達のクラスが一位だった。ま、その理由が、庄一が全個人種目で一位をとったから。有言実行とは恐れ入るね。

騎馬戦は僕、圭、庄一、元はじめでつくった。一番上が何故か僕になった。元の能力と、庄一の無尽蔵な体力、そして役に立ったか知らないけど僕の指示で騎馬戦も一位。

お昼休みは、これまた何故か僕が庄一と圭のお弁当までつくることとなった。それを見た庄一と圭の両親は「本当にすみません。」と頭を下げてきた。

元はじめたちはというと、そんな僕を見ながら誰の弁当を食べさせるかで、もめていた。それを見ていたのが、堇さんと久美さんのご両親はじめ。元の両親は仕事で来れなかったんだって。

なんだか仲がよさそうに見えるけど、父親の方は陰悪。雰囲気こそよさそうに見えるけど、実際は互いに娘の自慢しかしていない。大変だね。それとは裏腹に、母親の方は会話も雰囲気も良かった。

僕の両親？来てないよ。あの人たちは仕事で忙しいから。あ、お姉ちゃんも仕事だよ。

で、なんだか元はじめたちの方で僕の話が拳がったらしく、元はじめが僕のことを手招きしていた。

それで行ってみると、何故か歓迎された。

「君が池田君かい？」

「ハア……。」

どうして僕が呼ばれたのか、全く見当がつかなかった。庄一と圭はおとなしく成り行きをみていた。僕がつくった弁当を食べながら。

酷いね、全く。友達の事を放置かい？

「話には聞いているよ。」

「すみません、誰だか分からないんですけど。」本当は知ってます

けど。

「ふん。普通の奴にも知られていないのか。やっぱり俺の方が上だな。」

「なんだと！じゃあ、お前も話してみろよ！」

「君は私の事を知ってるだろ？」

「いえ。知りません。」嘘です。本当は知ってます。

「お前も知られてないじゃないか！」

「うるさい！」

と、対峙してる父親二人。さて、戻ろうか。

そう思っ僕は戻ろうとしたら、元^{はじめ}に足を捕まれた。

「なに？」

「いいじゃない別に。ちよつとだけでいいからさ。」

「ちよつとは過ぎてるけど……。」

「僕を助けると思ってたさ！」

「頑張ってたよ。」

と言っ戻ろうとしたら、元^{はじめ}が耳打ちしてこう言ってきた。

（本当に助けてよ！僕だけでこの状況は大変なんだって！！）

（僕を巻き込まないで！僕はそんなに関わりを持っていないんだから！）

（君の話で盛り上がってるんだから、本人の登場してもらいたかったんだよ！それに僕も助かる！）

（何が？）

（ツッコミが足りなかったんだよ。正直僕一人でこのメンツはきついんだ。）

（ふん。）

「二人とも、何こそこそ話してるの？」

^{はじめ}元の話を聴いた僕は、無視して戻ろうかと思ったら、久実さんに話しかけられた。

終わった…。

そう思いながら、おとなしく座ってこの場にいることにした。

「別に。なんでもないよ。」

「そうだね。」

と言ってる僕達二人。

「そうなの？でもごめんね、わざわざ呼んじゃって。」

と、久実さんは言った。僕はもう逃げる事を諦めていたので、

「いいよ。それより、関係ないのにこの場に呼んでくれてありがとう。」

と言った。ちなみに、これは両親がよく誘われた時に言う言葉で、小さかった僕は一緒にいたため憶えていた。

そう言ったら、久実さんがこう言ってきた。

「関係なくはないわよ。あなたの事はよく会話で出てくるもの。」
どういう話をしていれば、僕が話題に上がるのだろうか？

なんとなく思ったけど、別にいいかと思った。

その輪に混ざる感じで、そのまま一言も話さないで食べようと決めたら、いきなり話を振られた。

九月上旬のある日(5) (前書き)

体育祭編、これにて終了。早すぎましたか？

九月上旬のある日(5)

「そういえば、レンの両親は？」

「仕事。」

必要なことだけを言えば大丈夫だろうと思っていたら、

「レンの両親って何をやってるの？」

と訊かれた。レイジニアさんに。そうやっていたら、堇さんが話に加わった。

「随分楽しそうなご両親でしたね。」

僕は、あちゃあ、とものすごいやばい感じがした。

堇さんの言葉に元が固まって、久実さんとレイジニアさんは何かに気付いたみたいだった。

「ねえスマイレ。」

「なんですか？」

まるで分っていない感じで、堇さんはレイジニアさんの質問に耳を傾けた。そしたら、久実さんが訊いてきた。

「どうして連の両親の事を知ってるの？」

その言葉で、自分が言ったことの不味さを理解したようだ。堇さんはテンパって「え！？そ、それは、その、えっと………」としか言わなくなった。

その隙に僕は戻ろうとしたら、今度はまた父親たちに捕まった。

「江田君。」

「池田です。」

「間違えるとは最悪だな。そうだろう？家田君。」

「言いたくありませんが貴方も間違っています。」

この人達ボケてない？

僕は何となく憐れみの視線を送ることにした。

近くでは久実さんとレイジニアさんが、堇さんを詰問していた。

「ねえスマイレ？どうして知っていたの？」

「そうね。遭う機会なんてなかったでしょ？」

「み、道端でばったりと会ったんです！」

「へえ。そうなの？」

「でももしたら、以前レンと同じような弁当の中身だった説明がつかないのだけれど？」

「そ、それは……」

「あの時は有耶無耶になったけど、気になるわね。あの時はどうしてかしら？」

「え、えっと……」

僕は、こっちはこっちでもう駄目だと思った。

元はというと、

「ちょっと待ってください！！どうして僕が！？」

どうも母親方で何やら言われたようだった。

そして、僕の視線に気付いた父親の方は、

「なんでさっきから憐れんでいるんだ？」

「そうだな。」

よくわかってない感じで聴いてきた。

「いえ……」

僕は視線を背けながらそう答えた。

つ、疲れる……………。

元に同情出来た瞬間だった。

そう思っていたら、ついに董さんが言ってしまった。

「あ、あの時は連君の家に行っていました！」

この時の反応。

久実さんとレイジニアさんは「やっぱり……」と言っていて、元は「ごめん、連。」と言っていて、母親の方は「あ、そういえばそんなことがありましたね。」「そうだったんだ。大変だったわね。」と言っていた。問題は父親の方。

僕に最初に話しかけてきた人が怒りに震えていた。

あ、そう言えばこの人、董さんの父親で会社の社長だったよなあ

と思いながら、弁当を手早く片付けて、逃げた。

とっさの行動に庄一と圭を含めて他の人たちの注目を浴びたけど、そんなのは気にしていられない。だって生死を分かっただもの。

そして、

「きくさくまー!!!」

という声と共に、なんだかすごいプレッシャーが全体を包んだ。多分、これが魔法を発動させる前準備なんだろうと思った。

これで皆がパニックを起こして、一斉に逃げた。僕はその逃げ惑っている人達の中で、足を止めた。そして、両親がどうやって業績トップを独占しているのかを思い出した。

『連!!俺また一位取ったぞ!』

『へえ。』

『前々回は私が一位だったのだけだね。』

『そうだったね。』

『なんだ連?嬉しそうじゃない?』

『いや、良く取れるなあゝって思ってるよ。』

『成績が凄い秘訣か!教えてやるぞ!』

『あなた。連が話を聴いていないわよ。』

『聴いてるけど。』

『そうか!なら、教えてやる!それはな、仲良くなることだ!こっちから仲良くなれば自然とあっちも心を開く!方法はなんだってかまわないぞ!犯罪行為で仲良くなるとできないけどな!』

『へえ。』

『あなた。半信半疑の様よ?』

『ま、いづれ分かるさ。』

.....これが走馬灯じゃないと祈りつつ。

僕は近づいていった。弁当箱を開けながら。

こうやってると、なんだか僕って主人公みたいだね。ふとそう思った。

そして、とうとうプレッシャーを発している父親に近づいてしま

った。何をやっているんだろうね？僕は。

「なんだ？やられに来たのか？」

「いえ、僕死んじゃいますよ。ま、それよりこれ食べて落ち着いて下さいな。」

「む？」

と言って、僕は自分の弁当のおかずを一つ、堇さんの父親に食べさせた。

そうやって食べてる間、逃げ出した人たちは戻ってきていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

理由は、食べてる間にプレッシャーが弱まっていったからだ。ふう。危なかった。

そして、ゴクリという音がした後ちよっただけ間があった。僕は自分の弁当を今まで通り食べているよ。

うーん、ちよっと味づけに失敗したのかな？ちよっただけ薄いや。

と自分の料理に評価していると、周りから「おい、なんであいつ平然としてられるんだ？」

「肝が据わってるのか？それともただのバカか？」「最近思うんだが、連の料理食べた人ってたいい感動するよな。」「：たいいじゃない。全員。」「そうだっけ？」「あれでカテゴリーが『普通』

っておかしいわよね。」「一般人に分類できない気がするわね。」

「すごいなあ、連は。」「本当ですね。」「なんだかあいつの顔がにやけて来てるぞ？」「本当ね。」「あら？」とまあいろいろ言われていた。

僕はまぎれもなく一般人です！と主張したかったけど、言う気にはなれなかった。

その間がなくなった時に堇さんの父が言った言葉がまあ、想像通りだよ。庄一と圭も言ってたしね。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うまい！！」

それを言った時はそこにすでに怒った顔はなく、感動したような顔をしていた。あゝ良かった。

それを見た人達は、食べ終わって片付けをした僕を見た。その視線を受けながら、僕は感動から戻ってきていない寺井父にこう言った。

「落ち着きましたか？」

その言葉に感動から戻ってきたのか、

「・・・ああ。すまなかったな。取り乱して済まない。」
と言ってきた。対して僕は、

「気にしません。僕の両親より問題がありませんから。」

と言って、自分で地雷をあえて踏んで自分で落ち込んだ。

そんな雰囲気で、昼は終わった。もう思い出したくない・・・。

ちなみに、この騒動は何事もなく流されたけど、噂で「三年生の一般人は普通じゃない人の方が多い。」というのが流れた。僕のせいじゃないんだけどね。

あ。パン食い競走のアンパンをつくったのは僕だよ。だからみんな必死に食べようとしていた。うちのクラスは全員が食べた。だからこの競技、うちのクラスみんな一位だったんだ。

そしてなぜか、アンパンが余ったことによりアンパン争奪戦が発生した。

・・・みんなを巻き込んで。

最初にアンパンをとったのは庄一で、四個ぐらいとっていった。

そして、食べている間に一個を寺井父がとっていた。保護者までも巻き込んだんだよね。

最終的に争奪戦はバトルロワイヤルみたいになって、騒ぎが収まったところには、色々な意味でカオスなことになっていた。南無。

閑話 とある休日 木村圭編（前書き）

三人の中で一番ミステリアスな人、木村圭。彼の休みの過ごし方とは一体・・・？

閑話 とある休日 木村圭編

・・・・・・今回は俺、木村圭の休日を紹介する。といっても、面白いものはないだろうけどな。

午前七時。俺は休みの日でもこの時間に起きる。起きてまずやることは、着替え。次に、パソコンの起動。

パソコンが起動するまで、俺はリビングに下りている。

「おはよう、圭。」

「おはよう。」

「おはよう。」

上から、父、母、自分の順であいさつをして、朝食を食べ始めた。食べている間の会話はほとんどない。そういった意味では、連の家族がある意味うらやましいと思う。

・・・・・・両親のズボラさがなければ。

朝食を食べ終え、俺はすぐさま自分の部屋に戻った。そして、パソコンに届いているメールを一つ一つチェックしていった。それをする理由は、情報屋の人たちからの情報を整理、分別などをするからだ。以前はかなり手間取ったが、今では音楽を聴きながらでもできるようになった。

今日（届いたやつは全部昨日）の分をすべて終わらせたときの時刻は、午前九時。これからの予定を見ると、十時から家の近くの裏路地と書いてあった。

俺はそれがどんな用だったかを思い出し、普段の持ち物を持ってリビングに下りた。

「行ってきます。」

「何してるかわからないけど、気をつけなさいね。」
「分かってる。」

母は専業主婦なので、いつも家にいる。父は結構は会社の部長。

家を出た俺は、集合場所に行った。ちなみに、両親は俺が何をしているのかを知らない。そのうえ、両親は俺が何をしているのか訊いてこない。答える気はないが。

俺は集合場所へ着いた。着いた時間は午前九時半。三十分くらい暇なので、俺はいつものように暇つぶしをすることにした。といっても、簡単なパズルゲームしかやらないが。

閑話 とある休日 木村圭編その2

三十分後。

「やあ、圭。君は律儀だね。感心するよ。」

「・・・楽しいことを見つけたのか？」

「どうしてそう思うんだい？」

「・・・なんとなく。」

待ち合わせ場所に情報屋の一人が来た。

彼の名は柊宙^{つばさみそら}。それ以外の個人情報を知ることが、この業界ではタブーとなっている。見立てでは、年は三十前くらい。顔立ちがいいので、たぶん、ホストとかで情報を収集しているのだろう。

「・・・何の用だ？」

「前に言ったじゃないか。ちょっと面白い情報が耳に入ってきたから、その真偽はともかく君に聞いてほしいって。」

「・・・それで俺がほかの奴らに発信すると。」

「そう。僕たちの取り決めだからしょうがないんだけどね。ま、近いからという理由もあるんだけどね。」

そう言いながら肩をすくめる宙。様になっているな、相変わらず。

「・・・で、その情報は？」

「実はね、本格的に動き出したみたいなんだよ、『フランク스가』が。」

「・・・なに？」

宙の言葉に、俺は耳を疑った。フランクスだと？あれはもう活動していないんじゃないのか？

俺は驚きを隠して訊いた。

「・・・本当か？」

「本格的といっても、まだ活動はそんなにしていないみたい。きつと来年からだろうね。」

「・・・分かった。報告しとく。他には？」

「あとは……君の学校の生徒、中島元といったかな？彼、狙われてるらしいよ。」

「それは報告しなくていい奴だな。ありがとう。」

「どういたしまして。これぐらいかな？……あ。そうそう、池田連君の料理を食べてみたいんだけど。」

「……それは学際のクラス出し物が喫茶店だったら。」

「それだったら食べれるね。ありがとう。これ、いつものだから。じゃ！」

そう言って、宙は路地裏の奥へ行った。そこから自分の場所へ戻るのだろう。

俺は渡された封筒をバックの中へ入れ、路地裏を出て歩き出した。

閑話 とある休日 木村圭編その2（後書き）

補足・・・フランクスはバンドグループで、六年前に活動を休止。かなり伝説的なバンドで、ファンの中では悲しむ声がたくさんあった。

閑話 とある休日 木村圭編その3 (前書き)

五十話を達成しました！他二作品の更新も頑張りたいと思います。

閑話 とある休日 木村圭編その3

歩くこと二十分。俺は偶然にもある人物と出会った。

「お久しぶりです。木村様。」

「・・・久しぶり、詩音。今はホテルじゃないのだから、様はいらない。後、敬語も。」

詩音だった。いつもののかっこうとは違い、オフのせいか美人度が増してる気がする。

「そう。なら、これでどうです？圭。」

「・・・それで構わない。それにしても、どうしてここに？」

俺は、詩音がここにいる理由がわからず訊いた。

詩音は隠す気がないのか、正直に答えてくれた。

「店長が、『しばらく三十五階に泊まる人がいないから、休んでいいよ。』と言っていたのですから。次に泊まりに来る客が二週間近くあるので、私は実家に戻ってきたというわけです。」

俺は意外と近場に詩音の実家があることに内心驚いた。

「そういう圭はどうしたのです？」

質問に答えたのだからこちらも質問していいよね的な雰囲気醸し出しながら、訊いてきた。

俺も特に隠す必要がないので、

「・・・散歩。ただぶらりと歩いてるだけ。」

と答えた。その前に行っていたことは言う気にはなれなかった。

俺がそう答えたら、

「じゃ、一緒に散歩してくれませんか？久しぶりなので、街並みが変わって戸惑ってしまってます。」

と提案してきた。俺は特にこの後の予定はなかったので、

「・・・分かった。」

と了解した。

色々なところ（といってもそんなに行っていないが）に歩いていき、そのたびに俺はその場所の説明をしていた。ただ、それは新しい場所ぐらいなので、それ以外は普通に会話を楽しんだ。

例えば、

「圭は学校ではどんな生活を送っているのですか？」

「・・・夏休みに一緒にいた友達と勉強したり、遊んだりしている。」

とか、

「圭の好きな食べ物はなんですか？」

「・・・ハンバーグ、焼き肉、刺身など。」

「子供っぽいものがありますね。」

「・・・うるさい。」

とか。

そうしていると、お昼になった。

「どこで食べますか？」

「・・・昔からある店。日食。」

「まだあるんですか、あの店。」

ということで、日食に行くことになった。

閑話 とある休日 木村圭編その3 (後書き)

圭の休日って三人の中で一番のんびりしてそうですね。

閑話 とある休日 木村圭編その4

日食。正式名、日暮食堂。この店は一番歴史が古く、創業百年くらいになる。それくらいなら結構な有名店になってるのだが、とある理由でそんなに有名ではない。値段は、学生でも十分に出せる金額なので、結構行列ができたりする。

俺たちが着いたとき、まだ開店して間もないのに人がたくさんいた。

「・・・並ぶ？」

「いいですよ。」

そうして待つこと十分。俺たちの番が来た。

「いらっしやい。・・・ん？圭か。珍しいな、女連れなんて。」

「・・・大将。知り合い。あと、ふざけで言わないほうがいい。詩音がかわいそう。」

「そんなことないですよ、圭。お久しぶりです、大将。詩音です。」

「おお！詩音ちゃんかい！懐かしいねえ。ま、座って座って。」

とりあえずカウンター席に座ってくれということなので、俺と詩音は座った。そしたら、隣から声をかけられた。

「よう、圭。隣の人は・・・・・・ヒューマニーホテルの従業員だよな？どうしてここに？」

「・・・庄一こそ。」

声をかけてきたのは庄一だった。どうやら一人で来ているらしく、のんびりと食べていた。

「久しぶりにここで食べたいと思ってきたんだよ。そういうお前は？」

「・・・詩音さんと偶然会ってから、行動を共にしている。」

「ケツ。羨ましいこって。」

そう言って庄一は水を一気飲みした。

何か癪に触るようなことでも言ったのだろうか？

そう思ったが、今は注文のほうが先なので、考えないことにした。

俺と詩音は同じものを注文し（この時庄一が「仲好みな、ちくしよう」と言っていた）、料理が来る間は三人で話していた。

「そういえば、もう一人はどこにいます？」

「連のことですか？あいつなら家で昼食を食べてると思いますよ。金がないとかで。」

「・・・外食なんてほぼしない。それに、自分で貯めているお金以外は自分で使わないと決めているから、基本自炊で過ごしている。」
「すごいですね。」

「あいつの武勇伝ならいくらでも話せますよ。なんたって苦労しますから。」

「本当に中学生なんです？」

「・・・俺たちと同じ、中学三年生。」

「健気な子ですね。」

そうこうしていたら、俺たちの料理が運ばれてきた。庄一はすでに料理を食べ終えており、「少し休む」とか言って、水を飲んだりしていた。

食べていたら、大将が突然話しかけてきた。

「圭。池田連の友達なんだろ？」

「・・・なにか？」

この時すでに、庄一は会計を済まして店を出て行った。

なおも続き、

「頼みがあるんだ。ちょっとでもいいから、そいつを店で働かせたいんだ。」

と言ってきた。俺はそのことに疑問を持って訊いた。

「・・・どうして？」

「仕事。」

その一言で、大将が何を言いたのか俺には理解できた。つまり、ちよっとの間店を空けるから、連に店のことを頼みたいということら

しい。

「何日くらい？」

「二日あれば大丈夫だと思うが、休日を二日もつぶしてやってくれるか？」

「・・・たぶん、やらない。」

「だよなあ。ま、一日は休みにすればいいか。とりあえず一日だけでもいい。頼んどいてくれ。」

そんなことを話していたら、詩音が話に混ざってきた。

「どうしたのです？」

「ちよっとした日常会話だよ、なあ？」

「・・・（コクリ）」

そんなやり取りの後、俺たちは昼食を食べ終え、店を後にした。言い忘れていたが、大將は情報屋、その中でもトップクラスの人物である。日食が有名店にならない理由は、大將自らが情報操作をしているからである。その理由が、「地域との交流を大切にしたいからだそうだ。」

閑話 とある休日 木村圭編その5

その後、俺と詩音はまた散歩をしだした。その途中、CDショップに立ち寄ったり、詩音の買い物に付き合ったりした。

そして、この町に一つしかないスーパーへ行くことになった。

「・・・何か買い物でも？」

「ええ。両親に夕飯を作りますので。」

そういう会話の後、スーパーに入った。

そこで買い物の手伝いをしていたら、当然というか偶然というか、連と出会った。

「どうしたの？圭。普段ほとんどこんな時間に来ないのに。って、もしかして、詩音さん？」

「久しぶりです、連君。本当に一人で買い物してるのね。」

「・・・手伝い。」

「ふーん。・・・あ！やばい！さっさと買わないと！長居してたら姉さんに怒られる！じゃ！」

そう言って、連は早歩きでどこかへ行った。その時に、「詩音さん。野菜や肉、魚は商店街のほうが安く買えますよ。」と言った。

連を見送って、

「忙しそうですね。」

「・・・あれが普通。」

「そういえば、さっき連君が何か言ってますでした？」

「・・・商店街での買い物の方が安いと言っていた。」

という会話で、俺たちは商店街へ向かった。だいぶ歩いたせいか、足が疲れてきた。

商店街での出来事を省略し（あえて言うなら、連の言った通り結構安く買えた）、帰路についた。というより、詩音を送っていくという意味合いが強かったが。

詩音に礼を言われちよつと照れくさいと思いながらも、俺は自分の家へ帰った。

家に帰ると、母が寝ていた。時刻は午後五時。俺は母を起こす気になれず、自分で夕食を作り、食べ、片づけて、自室へ向かった。パソコンを起動してる間、今日の出来事を日記に書きとめた。しかし、宙の言っていたことは、別なものに書き留めた。

パソコンが起動したとき、母が俺の部屋に来た。

「おかえり。」

「ただいま。夕飯は食べたから。」

「そうなの？ 圭は優しいんだから。じゃ、お母さんとお父さんの分を作ればいいのね？」

「そう。」

そう言ったら、母は部屋を出た。俺は、すぐさまインターネットでいつものサイトに行き、今日の朝やったことをサイトにアップした。そのついでに、宙が言っていたことも報告書としてサイトに書き込んだ。

それがきちんとできたことを確認した俺は、パソコンの電源を切り下へ降りて風呂に入り、父と少し会話して、寝た。寝るときに、今日の出来事はデートというのではないかと考えて、少し寝られなかった。

閑話 とある休日 木村圭編その5 (後書き)

次は多分、第五章かもしれません。

五 十月下旬～十一月中旬（学園祭までの準備～学園祭四日間と後片付け）（前

学園祭編です。この間に、ちよくちよく閑話を挟みたいと思います。
あと、新キャラ登場します。

五 十月下旬～十一月中旬（学園祭までの準備～学園祭四日間と後片付け）

「えー、来月中旬に行われる学園祭での、クラス内出し物を決めたいと思います。」

九月に行われた体育祭が終わり、テストやらで大変だった十月。

僕は、次の学園祭の出し物について話し合っていた。

「誰かゝ案ありませんか？」

と言っているのは、ご存じ久実さん。何故だかダレていた。

僕は話し合いに耳を傾けている程度で、普通に空を見ていた。今日も空がきれいだなあ。

と、そこで僕は何かがかっちに來てるのに気付いて席を立てしまった。みんなに注目されたのにもかかわらず。

「ど、どうかしたの！？」

と、久実さんが言っていたけど、僕は気にしなかった。いや、気にしていられなかった。

だって・・・・・・・・・・・・・・・・。

「こっちに來てる……………」

『ハア！？』

と、みんなが驚いて窓の方を見た。そして、

『なんか來てる！！』

と言ってみんな廊下の方へ移動してしまった。僕はというと、

「おい！俺らも行くぞ！」

「…逃げないと。」

「伏せるだけで何とかなるかもしれない。」

「ハア！？何言ってるんだ！死んじまうぞ！！！」

「…無謀！」

「だったら、僕一人だけここにいるよ。」

「…………ああ、もう！俺も残るぜ！」

「…俺も。」

「二人とも……じゃ、今から伏せて!!」

「おう!」「…了解!」

と言って、三人とも窓の下に行き、身をかがめた。

そして、

チュド――――ン!

!!!!!!!!!!

という音がして、僕らの上を通り過ぎて教室に着地した。その時に、机などが教室の外へ出てしまった。

「ゲフツ!ゲフツ!大丈夫か!？」

「ゴホッ!ゴホッ!だ、大丈夫。」

「…問題ない。」

と、僕達三人はお互いの無事を確認した。良かった大丈夫みたいだ。

「それにしても、」

と言って、庄一は着地地点の方を見た。僕達もつられてみた。

「それにしても、誰だ?こんな事した馬鹿は?」

そうしていたら、着地地点から人の声がした。

「あつれ、おかしいな。どこで計算が間違っただろ?ちゃんと出力計算したのに。」

.....

「「出来てねえよ!!」」

僕達は思わずツツコミを入れてしまった。

そしたら、廊下から人が戻ってきた。そして、

「あんた達!!どうして逃げなかったの!？」

「そうですよ!危ないじゃないですか!」

「ていうか、誰なの?ここに着地したのは?」

「三人とも、大丈夫?」

と、元^{はじめ}たちが言ってきた。

その声に、庄一がキレた。

「お前ら、能力あるのにどうして逃げたんだよ!!」

その言葉にみんなが黙った。

「使ってればこんな事にはならなかったんじゃないのか!? どうして何もしなかったんだよ!」

「庄一!!」

庄一が怒りをぶつけていた時、僕は庄一に呼びかけた。

「なんだ連! 今俺は…」

「庄一! 君のその言葉は差別だ! 能力があるからって、さっきの状況で判断できた!? 僕達だって伏せることしかできなかったじゃないか! それにまだ子供だ! この状況で逃げたくなる!」

僕の言葉に、庄一ははっとした。気付いてもらえたのだろうか?

「……………すまなかったな、連。ついカッとなって……………」

「僕じゃないよ、庄一。謝る相手は。」

「ああ。」と言って、元^{はじめ}たちに向き直ってからこう言った。

「すまなかった。俺は心の中でお前たちの事を差別していたみたいだ。」

その言葉を受けて、元^{はじめ}たちはバツが悪そうにして言ってきた。

「す、すみません。」

「逃げたことは言い訳できないわね。あんたが謝ることじゃないわ。」

「こうならないために今まで頑張ってきたんだけど……………ごめんね。」

「ごめんなさい。」

さてお互いに謝り終わったので、次に、こんなことをしたのは誰かと思いい、煙が晴れた場所を全員で見たら……………。

ロケットを背負っていた女の子がいた。

「あれ? どうして私の事みんな見てるの?」

その少女は、僕達に見られている訳が分からないのか首をちょこんと傾げた。

僕達は一斉に、

『誰だよ。お前。』

と言っていた。

人騒がせな人だと、僕は思った。

十月下旬～十一月中旬（2）

「はじめまして、私の名前は花音。藤木花音です。今日からこのクラスに転校することになりました。よろしく願いします。」

ぶっ飛ばした机のせいで、先生に叱られてきた藤木さん。あの後、クラス会はどこへやら、真っ先に先生が来て事情を説明し、藤木さんを連行していった。

僕達というと、残っていた机と椅子を並べてみたけど数が足りなくて、校庭にぶっ飛んでいったものは壊れて使い物にならなくなっていた。なので、全員が机と椅子なし、要するに床に座った状態だった。

それからしばらくして、藤木さんが連れられてこの教室へ来て、さっきの自己紹介をした。

その紹介を聞いた一部の男子が、「おい、ロリだ。」「いい……。」と何やらバカなことを話していた。

僕達三人はというと、

「それにしても、よく見てたな。あいつが飛んでくるところ。」

「ああ、それね？単純に、話だけ聞いてて空を見てたら何かがちに近づいてるなあ、って感じだよ。」

「……偶然でもすごい。」

「そうだな。結果的に見たら、お前のおかげで怪我人がいなかったじゃねえか。」

「そうだね。」

「…（コクン）」

固まって話していた。だって座ってるんだもん。

それで先生がこう言ってきた。

「あー、彼女はこれでも天才科学者で発明家だそうだ。仲良くするように。それと、机と椅子は明日には何とか手配するから。あと学

園祭の出し物決めとけよ。」

そのあと、先生は教室を去っていった。え？これで放置？

その代わりに、久実さんが教壇に立ってこう言った。

「さっきのせいで有耶無耶になりそうだったけど、学園祭の出し物を決めたいと思います。意見在りませんか？」

すると、一人の女子生徒が手を挙げた。

「はい、倉持さん。」

倉持さんって、超能力を持っている人だっけ。と、どうでも良い事を考えていた。

「喫茶店でもやりませんか？」

指された倉持さんは、喫茶店をやろうと言った。その言葉を聴いた他の人達は……

「喫茶店か……」「でもいいんじゃないね？」「そうね。楽しそう。」

賛成ばかりだった。でも、この流れだと僕は自然と調理係になりそうな気がする。

「喫茶店ね。ま、無難な所ね。他の意見は？なかったらこれにするけど。」

結局、これしか意見が出なかったので僕は喫茶店になった。

言い忘れてた。

僕達の学校の学園祭は、一般向けに開放されている。開催期間は四日間。クラスの出し物は、もう金をとること前提。そのお金は募金という形で貧しい所へ寄付される。

で、話を戻すけど、喫茶店と決まったはいいいけど、新たな問題が浮上した。

僕達三人と元以外はじめの男子が「コスプレ喫茶やろう」と馬鹿なことを言っはて、頑として譲らなかつた。

女子たちは反対したけど、何故か最終的にコスプレ喫茶に決まつてしまった。誰かが入れ知恵でもしたのかな？

その次に役割分担。これは久実さんがやる……はずだったのに、何がどう転がったのか庄一にお鉢が回った。

その後がもうスムーズに決まっていた。

調理係のリーダー決めは簡単。一斉に僕の名前を言ったから。

監督も簡単。このまま庄一。

接客係は元、堇^{はじめ}さん、レイジニアさん、久実さんを中心にうちのクラスの綺麗な人とカッコイイ人が選ばれた。あ、転校して間もないけど藤木さんも接客だよ。

教室の内装チームは庄一を中心にやっていくこととなった。

伝票などの会計は、圭を含めて数名。最初人数を聞いた時「少ない？」と思ったけど、圭の事だから大丈夫だろう。

その次にメニュー決め。これが大変。

喫茶店の代表的なメニューを挙げていたら多くなったので、どれにするかで一悶着あった。

最後に店名。あれやこれや言ってる間に授業が終わりそうだったので、庄一が「じゃ、店名は、『喫茶・レイデン』で。」と言って強引に決めた。それでみんなは納得した。

締めの一言に庄一が、

「おら、やるぞみんな！泣き言言わないで必死に働け！以上！」
と言ってみんなにヤル気を出させた。凄い人だ。

十月下旬～十一月中旬（2）（後書き）

庄一のリーダーシップはすごい。

十月下旬～十一月中旬(3)

それから、僕達は喫茶店の準備をしだした。

僕は、調理係として選ばれた六人と一緒に圭から出された金額をもとに、決まったメニューの試作品を作っていた。調理室を貸切にして。時々、僕がつくってる間に「池田君って、本当に料理上手いよねえ。」「なんかレベルが違い過ぎて、参考にできないって感じだよねえ。」「俺、あいつに教えてもらおうかな?」「無理無理。教えてもらってもお前じゃ参考にできねえよ。」「なんだと?」とまあ、なんだか物騒な話が聴こえる。正直、みんなで頑張ろう、と言いたい。

ちなみに、接客係の衣装は圭がデントツから取り寄せた。しかも、無料で。

そのことに他の人たちが驚いたけど、本人は気にせず自分の仕事をしていた。

内装は、庄一がその手に詳しそうな人にすべて任せたみたいだ。適材適所だね。

あ、藤木さんはみんなと打ち解けたよ。色々と迷惑かけてるけどね。

で、藤木さんの目下の観察対象は、言わずもがな元^{はじめ}である。

どこへ行くにも元^{はじめ}についていくので、久実さん達があの手この手で藤木さんを引き離している。最初に「花音^{はなね}」と呼んだのは元^{はじめ}だしね。

そうしてるうちに日は過ぎて、ついに文化祭初日を迎えた。

庄一が、みんなに向かってこう言った。

「これから四日間、俺達は商売をする。中学生だからって怠けるなよ! 商売は戦だ! 行くぞ!」

『おお——!!』

こうして、学園祭が始まった。これから、僕達の知らない所で起

こることを知らずに。

「庄一、そのセリフをどこで覚えたの？」

「ちよつとドラマのセリフを言ってみたくてな。」

「：ドラマ「商戦スピリット」から。」

「よく知ってるね。」

「俺も驚きだ……。」「

「：（プイッ）」

十月下旬～十一月中旬（3）（後書き）

次から学祭が始まりますが、閑話を入れるかもしれません。

閑話 とある休日 寺井堇編（前書き）

今回は寺井堇さんのお話でもどうぞ。時系列でいつと、学園祭本番前の休みの日です。

閑話 とある休日 寺井堇編

こんにちは。今回はちょっと恥ずかしいのですが、私、寺井堇の休みの日の過ごし方を、紹介したいと思います。

私は、休日でも平日でもきまって朝五時には起きます。なぜなら、それが毎日の習慣となっているからです。

朝起きて着替えを自分でし（他人にやってもらうほど、お嬢様ではありません）部屋を出ると、毎日三人のメイドさんがいます。私の専属です。家にいるときはいつも一緒に行動しています。

「おはようございます、お嬢様。」

そう言ってお辞儀を、真ん中の人がしました。

「おはようございます、未来さん。今日もお早いですね。」

私にお辞儀をしてくれたのは、堂本未来さん。この家のメイド長で、年齢は見た目で二十代くらいの人。いつも無表情で無愛想っぽいけど、実は人形や裁縫が大好き。昔一人で寝れないときは、未来さんの部屋で寝たりしていたんですよ。

「お嬢様、いつも早いですね。私まだ眠いんですけ・・・ふあゝあ。」

「ま、真帆。お嬢様の前で盛大にあくびしないの。」

「だって、まだ眠いんだもん。美帆だってあくびしてたじゃん。」

「そ、それは・・・！」

未来さんを挟んで会話をしている二人の少女。あくびをしていた人の名前は松村真帆さんで、それを注意したのが松村美帆さん。

二人は、最近この家で働くことになったメイドさん。同じ名字から分かるとおり、彼女たちは姉妹。それも、双子の姉妹なんです。

お姉ちゃんは美帆さん。気が弱くて引っ込み思案、そして人見知りという欠点はあるものの、大変優秀な人なんです。

妹さんの真帆さんは、お姉さんとは正反対の性格の持ち主です。

でも、仕事をたまにサボって未来さんに怒られます。

私は、そんな三人を見てこう言いました。

「では、いつものようにお願いします。」

それを聞いた三人は、

「」「かしこまりました。」「」

と言って、私の後を付いてきました。

閑話 とある休日 寺井董編（後書き）

次回もこれで行くと思います。

閑話 とある休日 寺井董編その2

「これぐらいで体をお休みになられたほうがいいですよ、お嬢様。」
「そ、そうですね。ちょっと休みますので、朝食の準備をしてきてください。」

「かしこまりました。では美帆と真帆を置いていきますので。」
そう言って、涼しい顔をして未来さんを部屋を出て行きました。

「大丈夫ですか？ お嬢様？」

「毎日大変ですね、魔術の修行だなんて。」

座り込んでしまった私に、美帆さんと真帆さんが駆け寄ってきて、お水とタオルを渡してくれました。言い忘れていましたが、美帆さんと真帆さんは私より一歳年上だそうです。

「ありがとうございます。」

そうお礼を言って、私はタオルで汗を拭いて、水分補給をしました。私たちがいるのは修練場です。朝起きてからは毎日とっていいほどここで、未来さんと修行をしています。

未来さんの実力はトップクラスなので（私の知る限りでは）、私は素直に教えてもらっています。時折、元は未来さんみたいな人が好きなのかなあと思ったりしちゃいます。強くてカッコいいですからね。

そんなわけで（実際の理由は違いますけど）、私は未来さんに師事してるのです。

と、私が休んでいたら、ふと真帆さんが訊いてきました。

「そういえばお嬢様、もうすぐ学園祭ですね。」

「そうですね。私たちのクラスは喫茶店をやるんですよ。」

私がそう言うと、真帆さんが、

「本当！？ お嬢様はどっち側ですか！？ 接客ですか！？ 調理ですか！？」

興奮気味に訊いてきました。しかし時計を見ると七時になりそうだ

ったので、

「それはまたの機会です。今は未来さんたちが作った朝食です。」

といって、私は部屋を出て行きました。正直言うと、真帆さんが訊いてきたとき恥ずかしくて答えられなかったんです。だって、コスプレで接客なんですから。

「ごちそうさまでした。」

私はあの後食堂へ向かい、未来さんが作った朝食を食べました。これからの予定はなかったので、何をしようか悩んでいたら、お母様が来ました。

「おはよう、堇。」

「おはようございます、お母様。」

私のお母様は社長夫人であると同時に、作家でもあります。ペンネームは「水連」で、売れっ子ではありませんが、ファンは多いんですよ。ただ、私のクラスに二人もいるとは思いませんでしたけど。お母様が椅子に座ったら、ほかのメイドさんが朝食を運んできてくれました。それを食べてるとき、お母様が私に言いました。

「そういえば、今月学園祭ですね。」

「はい。」

「私たちもいきますよ。丁度休みが重なりましたので。」

「そうなんですか。」

「また体育祭のようにならないかればいいのですけれど。」

それを聞いた私は、思わず苦笑してしまいました。あの時は、連君の判断がなかったら大変なことになっていただろうと思いますからね。

お母様が食べている間、私はお母様とお話をしていました。そして食べ終わったら、私は食堂を出ました。

これから何をしようと悩んでいたら、携帯電話が鳴りました。発信者を見ると、『中島元』の文字が。

私は、高鳴る心臓を何とか抑えながら、電話に出ました。

「も、もしもし!？」

『あ、輩?これから何か予定があったりする?』

「まったくないですよ!」

『え?あ、うん。それならいいんだけどさ。』

ちよつと緊張しすぎたみたいです。元が若干引いてしまっています。

「そ、それで、何かご用ですか?」

落ち着いてから、私は訊きました。

『今からいうところに来てくれないかな?ちよつと大事な話があるんだ。』

その言葉で、私の鼓動は一瞬で、さっきより速くなりました。

だ、大事な話!?も、もしかして・・・こ、告白!?

と思っていたら、

『あ、そうそう。久美たちも行くから。十時には集合ね。』

と言って電話を切られました。その時、一瞬で私のテンションは下がりました。

しかし、これでへこたれてなんかいませんので、私は素直に行くことにしました。

でも、肝心な用件が何なのか判りませんでしたね?

閑話 とある休日 寺井董編その3 (前書き)

はたして、元が呼んだ用とは一体？

閑話 とある休日 寺井董編その3

午前九時四十分。私は元が指定した集合場所へ行きました。そこにいたのは、元と久美と花音さんでした。

私に気づいた元が、手を挙げながらこう言いました。

「おはよう董。大丈夫だった？」

私はさっきのことを思い出しましたが、その仕返しをする気はなかったので、

「今日は用事がなかったので大丈夫です。」

と言いました。その様子を見た久美が、

「元？そろそろ、どういう訳で私たちを呼んだのか言ったらどう？」と訊きました。花音さん不思議に思っていたようでした。

「そうそう。どうして私たちを呼んだの？」

それに対し、

「レイジニアが来てからね。」

と言ってはぐらかしました。最近、元のはぐらかし方がうまくなっている気がするの、気のせいでしょうか？

十時五分。ようやくレイジニアさんが来ました。もちろん、私たちは当然のように文句を言いました。

「遅いじゃない、レイジニア。寝坊でもしたの？」

「まさか。ハジメに起こされなきゃ、私より遅れてくるあなたに言われたくないわ。」

「レイジニアさん。遅かったじゃないですか。五分過ぎてますよ。」

「ちよっと道に迷ってしまったのよ。ここで生活しても、ここら辺にはほとんど来ないから。」

「私のGPS、貸す？」

「結構よ。それでまた迷子になりたくないから。」

私たちの文句をいつもの毒舌で返したレイジニアさん（久美だけ）は、元に向いてから、私たちと同じことを訊いた。

「それで？一体何の用なの？」

それに対して、元はこう答えました。

「さて、みんな揃ったわけだし、行こうか。」

そう言った後、元は歩きだしたので、私たちはあわててついて行きました。

本当に、何の用があるんでしょうか？

「着いたよ。」

歩いて十分。私たちは元が立ち止まった店を見て、驚きました。

「ここって……」

「いわゆるコスプレ衣装を売ってる店よね？」

「最近では貸し出しもやってるんだよ。」

それを聴いた私は、なんでみんな知っているのか不思議でなりませんでした。

と、ここで久美が訊きました。

「どうしてここに用があるわけ？」

すると元は、こう言いました。

「ほら、僕たちのクラス、コスプレ喫茶じゃない？それで衣装を決めることになったじゃん。で、庄一が僕たち以外の注文は訊いたから、お前らは実際に店行って何着るか決めてくれて言われて。この場所は圭が教えてくれたんだよ。なんでも、この店で貸し出しの注文をすると、デントツにある本社から送ってもらえるんだって。」その言葉を聴いて、私たちは庄一君の意図と、圭君の情報網に感謝しました。

そのあと、

「あれ？でも、庄一が『一人ずつ行けよ。間違っても、全員で行くなよ。』って言ってたけど、どうしてだろう？」

といった元に対して、私は（多分ほかの人たちもでしょうけど）ちよっただけ殺意を抱きました。

閑話 とある休日 寺井董編その3 (後書き)

元の鈍感、マジでヤバス(爆)。

閑話 とある休日 寺井董編その4 (前書き)

ページ数自体は少ないのですがね。

閑話 とある休日 寺井董編その4

店に入って、私たちの衣装選びが始まりました。元は、「僕の衣装はもう決まってるらしいから、結構だよ。」と言って店の中を散策するみたいです。

そうしてる間、私たちの中で密かな戦いが始まりました。

それは、「誰が元を誘惑できるか。」という戦いです。もっとも、衣装を選ぶのを手伝ってもらったり、楽しくお話しできるかということもありますが、ここでの課題はいかに衣装で元をときめかせるか、ということです。

ただ、困った事が発生しました。

衣装が全部ディスプレイ表示になっていることです。各コーナーごとに衣装の名前と値段があるのですが、実物ではなく映像なのです。これでは試着してみてもうることができません。

そう思ったので店員さんに聞いたところ、どうも、今着ている服の上に映像を映すという形で、試着ができるようでした。

なので、私はあちこちを見て回っていました。その時に、久美が元を呼んだのを見ました。

「ねえ、これなんてどうかしら？」

彼女は、ネコミミと言われるものとセーラー服を試着していました。が、元は関心を示しませんでした。それにムツときたのか、

「じゃ、これなんてどうかしら？」

と言って、スーツ姿になりました。といっても、ズボンではなくミニスカートでした。

その恰好を見た元は、顔を赤くしてそっぽを向いていました。その時に花音さんが、

「これどうかな？」

といって、どう見てもいつもと変わらない格好でいました。元は反射的に「いいんじゃないかな!？」と言ってしまいました。悔しい

気持ちでいっぱいになったので、私も真剣に衣装を選んでいきましたが、全く見つかりませんでした。

レイジニアさんも決まったらしく、残るは私だけだったのですがこれといったものが見つからなく、大変困り果てました。そこに元が来て、

「どうしたの、葦？決まってるの？」

と話しかけてきました。私はまた足を引っ張っちゃったなと思いながら、頷きました。

そしたら、

「だったら、これなんてどう？絶対似合うよ。」

と元が選んでくれました。それが、巫女さんの衣装でした。私は嬉しき半分、やるせなさ半分でそれに試着したところ、元がじっと私のほうを見て「ほえ。」と言っていました。

これは私に見とれてるってこと！？と内心で半狂乱になりながら、これに決めました。

衣装を決めた事を庄一君にメールして、私たちは店を出しました。

それから、みなでお昼を食べました。もちろん、日食で、です。

レイジニアさんと花音さんは初めてらしく、楽しみに並んでいました。

そして私たちの番になったので店に入ったら、聞き覚えのある声で出迎えられました。

「いらっしゃいませー！」

「あれ？この声……。」「どこかで聴いた様な気が……。」

「どこだろう？」「もしかして。」

「まさか……。」

そう言いながら調理場へ視線を向けると、ある人がいました。それは……、

「「「「レン（君）！？どうしてここに！？」」「」」」

「さっさと座ってよ。他のお客さんの迷惑になってるから。」

連君に注意され、私たちはおとなしく指定された席へ行きました。それにしても、どうして連君がここで働いているのでしょうか？

それはみんなが疑問に思っていたことらしく、

「あれ、レンよね？」「そうね。」「池田君、ここの息子なのかな？」「違うよ。普通の家庭だよ。」

と口々に言っていました。

それはさておき、私たちは注文する料理を決め、店員さんに言いました。それから三十分後。

私たちが頼んだ料理全部が来ました。人ばかりで待たされると思っていたのに、それほど待たされなかったことに、私たちは驚きました。

頼んだ料理を食べ終わった後、みんなで会計を済まし、店を出ました。店が出るまで、連君が休んでいる姿を見ませんでした。

「いや、連があそこで働いてるなんて驚いたね。」

「というより、なんであそこで働いていたのかを不思議に思わないの？」

「元と同じで不思議だね。次は池田君を研究対象にしようかな？」

「それにしても、あいつに休憩時間とかあるのかしら？」

「どうなんでしょう？」

日食からの帰り道、そんなことを話していたら、

「ん？お前ら、日食からの帰りか？」

「・・・連はどうだった？」

庄一君と圭君に会いました。ふたりとも、どうも日食で連君が働いていることを知っているみたいです。

それに反応して、久美がこう言いました。

「そういうあんたたちはどうしてここに来たのかしら？まさか、連をさらに忙しそうにする気？」

対して庄一君は、

「お前たちみたいなことはしねえよ。俺たちは単に手伝いをするために来たんだよ。」

と言いました。圭君も、「・・・連は有給。俺たちは無給。」と言いました。

そして、店の裏口へ入っていきました。友達思いな人たちだと、今更ながら思いました。

閑話 とある休日 寺井董編その5 (前書き)

六十話突破しました！

閑話 とある休日 寺井董編その5

庄一君たちが日食に入るのを見送った後、私たちはそのまま歩いていきました。が、足取りは重く、ゆっくりとした動きに見えたでしょう。

そこで元がポツリと言いました。

「・・・連には学園祭でも頑張ってもらうんだしね。助けてあげたよね。」

それに反応して、私たちはハツとしました。確かに、学園祭では連君が一番苦勞する立場にあるのですから、それまでの負担を軽くしなければいけないですね。それに、私たちも接客としての仕事が叔母得られるので一石二鳥になりそうです。

そう思つて、私は「助けにいきませんか？」と言つたら、店のほうから「本日はもう閉店しまゝす！」という声がしました。

え？今の私たちの会話はなんだったのでしょうか？

と、みんな呆氣にとられていたら、しばらくして庄一君たちが来ました。

「助かったよ、二人とも。あゝ、これから家でも家事をやらなくちゃ。」

「俺、そんなに働いてないぜ？お前、休みなしで開店からずっと働いてたんだろ？」

「そうだよ？あれくらいなら、いつもよりちょっとつらい程度かな？」

「・・・お前の家での苦勞が目に見えかぶ。それで、お金は？」

「あ。うん。・・・うわ！結構たくさん入ってる！・・・」

つて、みんな、どうしてそこで立ち止まつてるの？」
ちようと封筒の中身を確認した後人影に気づいて前を向いたら、私たちがいたので訊いてみた、っていう感じで連君が訊いてきました。
私たちはちよつと気まづくなりながらも、適当にはぐらかしまし

た。

そして、みんなで話しながら一緒に帰りました。

みんなと別れて一人になった時、前から車が来ました。

「お嬢様。迎えに上がりました。」

「ありがとうございます、源さん。」

執事長兼運転手である源さんが私を迎えに来たので、その車に乗りました。

家につくまで、私は源さんに今日の出来事を少し話しました。源さんは、私の話を楽しそうに聞いてくれました。

家についたら、未来さんたちが出迎えに来てくれました。そして、自室へ戻り一人でのんびりと過ごしていました。途中、元に言われたことを何度か思い出して顔を真っ赤にしましたが、誰も見ていなかったのです、からかわれることはありませんでした。

夕飯の時間になり、私は食堂へ行き、夕飯を食べました。ただ、連君の料理を食べたので、ちょっと物足りないと思いました。

それからは、お風呂に入って、柔軟をして、ベッドに入って寝ました。いつもより楽しく過ごせてよかったと思いました。

閑話 とある休日 寺井董編その5 (後書き)

次回は話をもどそうと思います。

十月下旬～十二月中旬（4）（前書き）

戻ってきました。学園祭初日です。

十月下旬～十一月中旬（4）

学園祭初日。

僕達のクラスの出し物『喫茶・レイデン』は開始して早々、人がたくさん来た。ほとんどがうちのクラスの生徒の保護者だったけど、生徒の兄弟も来ていた。なかでも、相も変わらずの娘バカの父親二人が来ていたので、もう面倒くさかった。接客はしていないけどね、僕。

ちなみに、タイムスケジュールってものがあるんだけど、僕にはそれが無い。それはなぜか。

料理が一番うまいから、だって。酷いね、全く。庄一や圭だって休憩時間あるのに。

というわけで、これから四日間はずっと作る側でどこにも行けないんだ。正直悲しい。

そう考えながら、僕はさっきから料理を作っています。手伝ってもらっているんだけど、最終的には僕がやることになっているので、もう大変。

「次！イチゴパフェにナポリタンを一つずつ！」

と元の声がしたので、僕は、

「了解！」

と言って、他の人たちに指示した。

あ。コスプレ喫茶というわけで、接客係の人はみんなコスプレしています。

元は女装。女子から似合っていると高評価。やるせなさはあるそうだけどね。

久実さんは秘書。これを見た父親が、一瞬意識を失ったらしい。かなり様になってるよ、と言ったら、久実さんは「そうかしら・・・？」と言っていた。

董さんは巫女さん。他のクラスの男子が群れてきたため、寺井父

が体育祭と同じようなことを起こしそうになった。これに関してはもう面倒になっていたけど、料理を急いで作って董さんに運ばせ、寺井母が食べさせて静まった。

そしたら、何故か僕が呼ばれ仕方がないので行ったら、寺井母から「ありがとうございます。」と言われ、名前を訊かれたので答えたら、「このお礼はいずれしましょう。」と言って寺井父と一緒に教室を出て行った。お礼なんていいのに。

レイジニアさんは貴族の娘。外見と雰囲気のおかげで全くおかしくはなかった。元が「深窓の令嬢みたいだ。」と言ったら、恥ずかしそうにしていた。青春っていいですね。

藤木さんは白衣を着て保健室の先生。白衣はいつも着てるからコスプレとは言わないんじゃないかと思ったけど、他の男子が「いい。」と言ったので、何も言わなかった。そして、他のクラスの男子が「ロリっ娘が白衣着てるー!」といて一斉に来た。並ばせたよ?もちろん。

男子は面倒なので省略。だってほとんどタキシードなんだもん。場面を戻そう。

今は調理に集中だ。そう思いながら、注文された料理を作っていく、接客係の人に渡した。その時に、元たちと藤木さんがいなくなっていたので、「どうしたの?」って訊いたら「藤木さんがどこかへ行ったらしい。」と言ってきた。大丈夫かな?と思ったけど、気にしてられないので、考えないことにした。

十月下旬～十一月中旬（4）（後書き）

またちよくちよく入れるかもしれません、閑話。

十月下旬～十一月中旬（5）（前書き）

連の両親が学校行事に登場しました。さてさてどうなることやら。

十月下旬～十一月中旬（5）

お昼時。

僕達のクラスはさらに忙しくなっていた。なぜかという、料理とウェイターの評判が学校全体に流れていたからだ。そのせいで僕の昼食時間が全くとっていいほどないんだ。沢山人が来てくれるのはいいんだけど、僕は空腹状態になりつつあります。し、死ぬ・・・。

で、いつの間にか戻ってきた元たちはどこか焦っていたように、僕は見えた。でも、僕には何もできないので気にしないことにした。こっちが大変だったこともあるけど。

その時に、知ってる声が聴こえた。

「いらっしやいませ！何名様ですか！」

「二人で空いてるところ、ありますか？」

「ではこちらへどうぞー！」

「しかし息子の学園祭に来るなんて初めてだな。」

「そうね。渚に言われたから初めて有休とったものね。」

「そういえば、渚は？」

「明日来るんじゃないかったかしら。あの子も忙しいみたいだから。」

「そうか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

な、ん、で、あ、の、二人がいるんだ——！！

僕は心の中で絶叫した。でもちゃんと料理は作ってるからね。

そして、料理を作り終わって渡して、次の料理をつくっていたらこんな声が聴こえた。

「お、庄一君じゃないか。タキシードが似合ってるね。」

「こんにちは。珍しいですね、息子の行事に来るなんて。」

「たまには行こうかなって思っていたのよ。」

「って、なんでスーツなんですか？」

「いけないか?」「いけないかしら?」

「いえ、別に……。」

スーツで来てんのかあの二人――!! そう思いながらも、僕は料理を作っていた。

それでも、両親の声が聴こえてきて、

「なあ母さん。何頼もうか?」

「そうねえ。じゃ、いつもの頼もうかしら。」

と、かなり無茶な注文をしてきた。これは家庭でつくってるものでいいの? と思ってその続きを聴くことにした。

「すいませーん。」

「あ、はい。ご注文はお決まりでしょうか?」

「えーっと、オムライス二つで。」

「かしこまりました。」

いつものって、喫茶店での注文の奴かよ――――！！！！

と、僕は心の中でツツコミを入れていた。それでも、他の人の注文の方が先なので、注文順につくっていく、両親の料理の時にちょっとした細工をした。両親なら、多分気付いてくれるだろうと祈りながら。

細工をしたオムライス二つを、ウェ이터に渡さず、自分で持って行った。調理係の人達にちよっと仕事を任せてるよ。このオムライスは、ちよっと自分で渡さないといけないものだったから。

「お待たせ、二人とも。」

と言って、僕は二人分のオムライスを二人の前に置いていった。

「お、連。お前が運んでくるなんて、あっちの方は大丈夫なのか?」

「そうよ。」

「二人が珍しいから、僕も珍しい行動をとってみたんだよ。」

「そうか!」

と、ちよっとだけ話して、僕は戻った。その時に僕は、「頼んだよ。」と言った。

その時に両親は何を言ったか知らないけど、きっと「任せとけ。」

だと思う。それから、両親はオムライスを普通に食べ、会計するときに庄一に「何人か連れてっていい？この学校の事分からなくて。」と言って、元たちを連れていった。庄一はちょっと困った顔をしたけど、すぐさま許可した。助かるね。

ちなみに、僕の両親は普通のサラリーマンとOL。だけど、あの人たちの人心掌握術と、推理力、観察力は一般人とは思えないものがある。何処かでスパイでもやっていたのかと思うぐらいだ。だから、営業成績の一位と二位を入社以来独占し続けられている。大事な取引だと、僕の両親が必ずと言っていいほど参加しているみたいだ。

ま、何が起きてるかは圭に訊くとして、今は集中集中。

十月下旬～十一月中旬（5）（後書き）

両親は両親でいろいろと可笑しいですね（笑）。

十月中旬～十二月下旬(6) (前書き)

一万PV突破しました！ありがとうございます！
これからもよろしくお願いします！

十月中旬～十二月下旬（6）

結果。

藤木さんが元たちと戻ってきたころ（午後二時）には、僕達の店は材料切れで終了していた。

「えー、もう終わってるー。ほとんど活躍してないのにー。」

その光景を見て、藤木さんはそう愚痴をこぼしていた。

それを聴いた庄一は、

「どうしていなかったのか訊きたいところだが、今はそれどころじゃないな。圭、今回の収益は？」

と圭に確認した。それを受けて、圭は何やらリストを取り出してペラペラめくり、あるところで止めてから言った。

「……総利益で十万円くらい。」

その言葉でクラス全体が沸き上がったけど、続く言葉で静かになった。

「…材料費などを引くと、七万くらい。これを、明日の材料費に上乘せすれば、今日のようなことにはならない。」

そう言うと、一人の男子生徒が手を挙げた。

「どうした？」

「明日からどうするんだ？正直、ここまでは思わなかったんだが。」

その言葉に庄一は、唸っていた。

「ああそうだな。明日からの営業方針を考えないといけないんだな。何か意見は？」

庄一はそう言ってみんなから意見を求めたけど、誰も言わないで沈黙していた。

すると、今まで何も言わなかった藤木さんが、

「だったら、営業時間を学園祭が始まって少し経ってからにすれば？そうすれば、私もきつと活躍できそうだし。」

と言って、元の周りを回っていた。

その言葉で全員が納得し、庄一が「それで行くか？」とみんなに意見を求め全員が賛同したため、

「明日から藤木が言った通りに時間をずらす！スケジュールの調整は各自で行え！明日も多分忙しくなるぞ！気合い入れていこうぜ！」と、庄一がみんなに言った。すると、一人の女子生徒が庄一に訊いてきた。

「これからどうすればいいの？」

「終わったから自由だ！……と言いたところだが、明日の食材の搬入時間について話し合いたいから、連。残ってくれ。それと、圭。お前もだ。」

女子生徒の質問に、庄一はそう答えた。僕だけ大変だなあ。

庄一の言葉を皮切りに、みんなは思い思いの場所へ向かって行ってみたようだ。僕と庄一と圭、それと、なぜか藤木さんと元たちが残っていた。どうしてだろうか？

僕と同じことが気になったのか、庄一が元に訊いた。

「お前らはどうしてここに？残る意味は無いだろ？」

それに対して元が答えようとしたら、代わりにレイジニアさんが答えた。

「確かに意味は無いけど、気になることがあるのよ。だから残ってるわけよ。」

その答えに「ふうん。」と庄一は相づちをして、僕と圭に向けてこう言ってきた。

「連。明日の食材搬入は？圭。材料費の方だが、このままで大丈夫か？」

「うーん。明日の仕込みがいつもより遅くできるけど、今日と同じ時間で。」

「：問題は無い。時間がずれるので、今日と同じ量でいける。」
そう僕達が言うと、

「ならこの話は一旦終わり！！俺達も他のクラス観に行こうぜ！」

と、庄一が張り切っていた。そんな感じで僕達三人は教室を出ようとしたら、堇さんに止められた。

「待ってくださいませんか？ちょっと訊きたいことがあるんです。連君に。」

「ん？連にか？」「……？」「訊きたいことって？」

堇さんが言ったことに対して、僕達の反応はバラバラだった。庄一と圭はなんだか分かっていないようだった。僕はというと、なんとなく分かっていた。

「はい。あのですね……」

と、堇さんが訊こうとしたら、

「どうしてレンの両親は、カノンの居場所を調べられたのかしら？私達でも判らなかったのに。」

レイジニアさんが、堇さんの言葉を奪うように訊いてきた。

僕はそれに対して何と答えようか悩んでいたら、久実さんがこう言ってきた。

「貴方の両親に訊いても『息子の頼みに応えた、しがないサラリーマンとOLだよ。』と言って帰っていったのよ。」

それを聴いて僕は、それで正しいんだけどなあ、と思った。なので「普通のサラリーマンと普通のOLだよ。確か、宮野商事で二人とも働いてるよ。」

と、正直に言ったんだけど、庄一と圭以外は信じてくれなかった。

「本当に？」

「本当だって。」

レイジニアさんが確かめてくるので、僕は頷いた。すると、藤木さんがどこからか取り出してきたパソコンを眺めていた。そして、

「あ、本当だ。池田君の両親、本当に宮野商事で働いてる。しかも、この人達が商談に出ると成功率が百パーセント！どうしてこんなことが可能なんだろう？気になる。それに、池田君の家事スキルの高さも気になる。フツ。このクラスの人達は不思議がいっぱいだな。エヘヘ。」

と言っていた。

彼女はどこからその情報を持ってきたんだろう？

僕はその時そう思った。

そして、その情報を聴いた元たちは、ますます疑惑の目を向けてきた。

「本当に普通のサラリーマンなんですか？」

「商談成功率百パーセントって、人間業じゃないでしょ？」

「すごいね。」

「本当に一般人なのよね？」

正確には、元以外の女子が疑惑の目を向けてきた。失敬な。僕達の家族は確かに一般とは言い難いだろうけど、普通の人となんら変わりはないからね。

そう言いたかったけど、僕は代わりにこう言った。

「家ではだらしがないんだよ。」

そう言ったら、董さんは納得したようだ。

十月下旬～十一月中旬（7）

まあ、家に泊まったからなんだけどね。それを見た久実さんがこう言った。

「そういえば、董は連の家に行ったことがあるんだっけ？」

「そうですよ。まあ、正確に言うなら家に泊まったのですけどね。」その言葉で皆が固まった。同時に、僕と元は冷や汗が流れた。この汗はなんだろうね？

と、ここで更に董さんは、僕にとって爆弾のような言葉を紡ぎだした。

「凄かったですよ。連君のご両親は。私の事を案内してくれたのに、食事が冷めると言われただけで私の事を置いてくのですから。でもそれまでの間の会話は楽しかったですよ。連君の話題ばかりでしたけど、楽しかったです。」

もう、駄目だ、ね・・・・・・・・・・・・・・・・。

「さらばだあ！！」「じゃ！！」「きゃっ！！」

「逃がすかあ！！」「……詳しく訊かせろ！」「待ちなさい！」「詳しく話さないよ！」「面白そう。私も混ざる。」

僕と元は、董さんを引っ張って全速力で逃げだした。それを、残りの人たちが追ってきた。

というか僕、一人だけ休憩が無かったんですけどね？でも、いつもくらいしか疲れが残ってないから、大丈夫だろうね。

そう自分に言い聞かせて、元と一緒に逃げていった。

「どうしようか！？」

「とりあえず人混みに紛れよう！」

「あ、あの。そんなに引っ張られると痛いのですけど。」

逃げながら、僕達はこれからについて話し合い、方針が決まったのでそれに従った。

結局、僕達三人がああ五人から逃げられるわけなく（ていうか僕

が真つ先に捕まつた）。捕まつた僕達三人は、四人に囲まれて尋問を受けていた。

「どういふことだ？ 連。」

「…内容によっては逆バンジーをやらす。」

「ハジメ? どうして嘘をついていたのかしら?」

「堇、体育祭に言っていたことの続きと行こうかしら？」

[illegible]

こ、怖い……。教室に連行されて周りを囲まれるって、本当に怖い。

ずっと黙ったままの僕達に痺れを切らしたのか、庄一が藤木さんに訊いた。

「なあ藤木。自白剤とかないか？ 後遺症が残らない奴。」

対して藤木さんは、隅っこでパソコンをいじりながらこう答えた。

「あるけど、持ってきてないよ。今あるのはこのパソコンだけ。」

もしあったら僕達に飲ます気だったな。

その時の庄一の落胆ぶりを見て、僕は確信した。友達にも容赦ないね、全く。

さて、自白剤を飲まされるのも嫌だし、正直に話しますか……の前に、確認だけしようかな。

「そこまで話を聴きたいの？」

「当たり前だ。」 「…愚問。」 「当然よ。」 「どうして隠していたのか気になるからね。」

僕の質問に、みんなはそう答えた。その答えに、僕は観念した。

「分かったよ。何があったのか話すから。」

そうやって、僕はあの時の事を正直に全部話した。ところどころ、堇さんと元が話に混ざりながら。

話が終わって。

「堇の料理の味が急においしくなったのって、連のおかげだったのね。」

「堇さんにそんな弱点があったのか……」

「…よく生きていたな、元。」

「よく言ったわ、レン。」

皆がそれぞれ思ったことを言った。褒められるのは嬉しいけど、なんだろう、嫌な予感。

そう思っていたら、庄一と圭が僕の両肩をつかみながらこう言うてきた。

「さてと、」

「…覚悟はいいか？」

「あのね？家に帰ったら帰ったらで僕がきついんだよ？今そんなことしたら、家事が全部滞っちゃうよ？明日学校に来れなくなるよ？」
そう言うてるのにもかかわらず、

「行こうぜ、連。」

「…行こうか。」

二人はやる気満々だった。そして、僕を連れていこうとしたら、先生が来た。

「どうかしたんですか？」

「池田。ちょっと来てもらいたいんだ。悪いが、借りてくぞ。」

と、僕の意味に関係なく、先生は僕の事を連れていった。

残された人達は、

「どうしてあいつが？」

「…さあ？」

「なにかしたのかしら？」

「もしかして、今日のうちのクラスの繁盛ぶりについての話じゃありませんか？」

「そしたら、責任者であるショウイチが呼ばれるんじゃないかしら？」

「そうだよな。」

と話し合っていた。その会話を聴いてたのか知らないが、藤木がポツリと呟いた。

「：明日の営業に影響があるかもしれないよ。池田君抜きになるかもしれない。」

その言葉を聴いた圭が、庄一に訊いた。

「……庄一。そうになったら、どうする？」

「そうになったらって？」

「……連抜きになった場合。」

その言葉で、この場にいた藤木以外の人が動けなくなった。

「ありえなくは、ないな。あいつの料理の腕は中学生とは思えないし、反則だと言われれば反論できない。話の内容次第では、明日の営業方針を考え直さないといけない。」

そう庄一が言うと、他の人達は何も言わなくなった。

そして、連が教室に戻って来た時に、庄一たちが詰め寄ってきた。

「ど、どうしたの!？」

僕は、先生に『迷子になっていたから名前を訊いたら、お前の両親だったんでな。引き取ってもらいたかったんだ。』と言われて、両親を校門前まで送っていただけなんだけど、なんだかみんな険しい。どうかしたのだろうか？

そしたら、庄一が訊いてきた。

「先生がお前を呼んだ用ってなんだ？」

隠しても意味はないので、正直に答えた。

「両親を引き取りに行っただよ。」

『は?』

僕の答えに、隅っこにいた藤木さんまでもがポカンとしていた。

「お前の参加制限じゃなくてか？」

「どうしてそんなことになったのか知らないけど、単純に迷子になって職員室へ行った両親を校門まで送っていただけなんだけど。あ。でもそんな話が拳がったみたいだけど、生徒を一人だけ制限するのはおかしい、という意見があったからそんな事は無いって言うてたよ。」

庄一が訊いてきたので、僕はありのまま話したら、一斉に溜息をつ

かれた。僕のせいじゃないんだけど。
そんなことをしていたら初日が終わってしまった。僕、他のクラス
見てないんだけどなあ。

十月下旬～十二月中旬（7）（後書き）

最後の最後で締まらない、連の両親でした。それと、学園祭初日が終了。二日目の前に閑話でも入れるかもしれません。ご了承ください。

対談 アイドルッ！×考える人×普通の人が送る日常（前書き）

今回はちょっと趣向を変えてみました。

対談 アイドルッ！×考える人×普通の人が送る日常

「さて始まりました。第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじゃない？ ラジオ！！イエーイ！」

「なんなの一体？」 「なんなんだ、これ？」 「僕、どうしてここにいるの？」

「ゲストはこの方たち！ 『アイドルッ！』 から、主人公八神つとむ！」

「おいこら。ちゃんと説明しろ。」

「次！」 「無視かよ。」

「『考える人』 から同じく主人公、風間大輝！」

「あ、どうも。」

「最後に、『普通の人を送る日常』 からも主人公、池田連！」

「これはなんなの一体？」

「以上、この三人をゲストとしてお送りします！ ちなみに、DJは私、末吉がやります！」

「いい加減説明しろ。」

ドカツ！ バキッ！ ドオオン！

しばらくお待ちください

「いたた……。これくらってよく生きてるね、あそこの人たち。」

「八神君、だっけ。今日はよろしくね。僕は連でいいよ。」

「だったら俺はつとむでいいぜ、連。」

「じゃ、僕は大輝でいいよ！」

「ふう。気を取り直して。じゃ、早速試してみよう！」

「説明しろ。」 ドゲシッ！ 「グフォッ！」

「作者が泣き出したため、一時中断します」

「さあ！　いってみよう！」

「切り替え早えな。」「タフだね。」「どうしてだろう？　・・・・・・・・・・はっ！」

「さて、記念すべき第一回の上に最初の質問！　まずは・・・・・・・・・・好きな食べ物？」

「ベタ感マックスじゃねえか。」

「うるさいな。で？　どうなの？　好きな食べ物あるの？」

「誰から訊くんだよ？」

「そうだな。ここはあんまり話さない大輝からいってみよう！」

「え？　僕は・・・・・・・・・・ハンバーグに、牡蠣に、ケーキに・・・・・・・・・・」

「十分後」

「・・・・・・・・ドリアに、カルボナーラに、キャビアくらいかな？」

「おい末吉。知ってたか？」

「え？　知らなかったけど？」

「キャビアって、高級食材で世界三大珍味だよな？」

「うん。両親が送ってきてくれた時があったんだよ。あれはよかったなあ。」

「「この庶民の敵が！！」」

「えええ！　どうしてみんな一斉に言うの！？」

「ゴホン。じゃ、次はつとむだ！　はい、好きな食べ物は！？」

「俺か。俺はそうだな・・・・・・・・・・あえて挙げるなら、マスターの賄飯か？」

「マスターって、誰？」

「つとむのバイト先の店長だよ。結構ちゃっかりしてる場所あるよね。」

「そうだな。あの野郎、俺が非番の時に来ると割引なしで会計するんだぜ？　ちゃっかりしてるだろ？」

「へえ。でもそれって、その時の契約内容になればやる必要はないんじゃない？」

「まじでかつ！・・・いつきに紹介してもらったバイトだからな。契約内容は詳しくは知らないんだ。」

「そりゃまた。」

「いい人だね。」

「けどな、それ以上に俺が大変な目に遭っているんだぜ？例えば、雪山に何の準備もなしに遭難させられたし、どこか知らない山奥に放置させられて一週間で脱出しろとか・・・」

「これからしばらくはつとむのトラウマ話がされています」

「・・・ほかにもあるぞ？」

「もういいよ！お願いだからやめて！」

「そうそう！話がだいぶずれてきちゃったじゃない！ほら末吉さん！進めて進めて！」

「分かったよ！では次は連！好きな食べ物は何？」

「僕の好きな食べ物はカレー！」

「定番だね、連は。」

「普通すぎるね。」

「放っておいてよ！」

「末吉。その辺にしとけ。連がうずくまってしまった。」

「ごめんね、連。悪気はなかったんだ。」

「いいんだよ、末吉さん。僕はどうせ普通なんだから・・・」

「ああ！連がなんだかねガティブに！」

「どうにかしろよ。作者なんだから。」

「分かったよ。」

「連が戻るまでしばらくお待ちください」

「よっしゃ！これで「はやくしろ。次だ、次。」わかったよ……
……では次！三人の共通点は？」

「「「家事ができる。」」」

「ですよ。」

「ていうか、お前自体は料理そんなにできないだろ？」

「完全に願望だね。」

「人ってどうしてそんなことするんだろ？」

「うるさい！別にいいじゃないか、高望みしても！」

「気を取り直して。次行け、次。」

「うわひどっ！」

「作者が立ち直るまでしばらくお待ちください」

「さあ、次行こうか……」

「大丈夫？末吉さん？」

「最初っから飛ばしすぎだ。疲れるだけだろ。」

「もうやけっぱちじゃなかった？」

「問題ない！行くよ！質問！一番面倒だと思ってることは！？」

「学校生活。」「両親の世話。」「学校生活。」

「わーお。話的にはアウトの答えいただきましたー！連を除いて。」

「ん？今何か言わなかったか？」

「別に」。さて、理由は何となく想像できるから置いて。次！

連以外は高校生んだけど、そこどこどう思ってる？」

「別に？俺は、中学生だろうが高校生だろうが大変なことばかり関わっているからな。どうとも思っていないぜ。」

「僕は中学生のほうがいいなあ。そっちのほうが楽しく遊べたから。」

「僕は……どうなんだろう？先のことを考えてないから」

なあ。」

「そうなのか？」

「うん。」

「じゃ、最後！将来の夢は？」

「平穏な暮らしがしたい。」「サラリーマンになる。」「世界を放浪したい。」

「切実な答えが一人、まじめな答えが一人？そして、ただの願望が一人？」

「誰だか見当はついたが、それはないんじゃないか？」

「ま、いっか。次のコーナー行ってみよう！」

「「これで終わりじゃないのかよ！？」」」

「次のコーナーは……『苦労話を分かち合おう！』です！」

「タイトルだけで内容がわかるな。」

「もうちょっとひねったら？」

「そんなことはどうでもいいから！ささ、張り切って話してみよう！」

「じゃ、誰にする？」

「末吉さんからいいじゃない？僕たちを作る時の苦労話をしてみてよ。」

「私？そうだね……まあ、苦労というわけではないけど、思いついたら忘れないうちに書き留めようとするでしょ？それをそのまま書いてたら、いつの間にか止まらなくなってね。他の作品のやつを考えるのと並行してやってることが、苦労してるところかなあ。」

「そうか。だったら俺のところさっさと進めろ。」

「僕のところもね。」

「分かってるよ。じゃ、次は……大輝！」

「僕！？うーん、僕は……昔のことなんだけどね。」

「ふむふむ。」

「昔、両親が僕を置いて海外に出て行ったところかな。その時は波風の家に世話になっていただけだね。そのころの僕、まだ小さかったからさ、色々覚えるのに苦労したよ。」

「子供って、普通は連れて行くものじゃねえのか？」

「なんでも、波風が僕と別れるのが嫌だったらしく、それだったらということ、僕を置いて行ったみたいだよ。」

「すごいね、大輝の両親は。」

「じゃ、次はつとむだ！」

「俺か。そうだな……。ああ、あつたぜ。確か、小学生のころだな。いつきの付き添いで言えば聞こえはいいが、実際は俺のことを強引に連れて行ったわけだ。」

「大変だね。」

「それで俺は誰の誕生日だったかしらないで、パーティに連れて行かれた。しかも、俺だけ私服だぜ？ どう考えても目立つわ、なにやら子供はいるけど誰もかれもがドレスやら着てるわで場違いだとすぐにわかったんだ。だから俺はいつきに、家に帰せと言ったら『いいじゃん。別に。』と言われて一蹴された。」

「可哀想だね。」

「それで仕方なく外を眺めてたら、変に金持ち思考のお坊ちゃんが俺のところに来てよ、俺のこと散々変なこと言うんだぜ？俺は気にしなかったけど。ま、その反応に怒ったのか俺のことを殴ろうとしたんだろうな。」

「そういうのって、たいてい男だね。」「そうそう。」

「そしていざ殴りかかろうとしたら、どうやら主催したやつが来たらしくよ。殴るに殴れずそのままそのまゝそのほうに行ったんだ。あの時我慢するのが苦労したなあ。」

「それでどうなったの？」

「うーん。そこらへんは思い出せないな。」

「ま、そんなことはどうでもいいさ！次次！」

「じゃ、僕だね。僕は一杯あるよ。例えば……」

三十分後。

「末吉。てめえ、連に苦勞しかさせてねえのか？」

「もうやめさせようよ。連が変な空気まとい始めたから。」

「そ、そうだね。……つとむ！任せたよ！」

「はあ！？」

「殴れば何とかなるから！」

「……分かったよ。連、元に戻れ。」

ドカッ！

「……いてっ！……あ。ごめんごめん。」

「さて、次は何するんだ？」

「えっとね……大変言いにくいんだけど、終了の時間が近づいてるんだよ。だから、今回はこれまで！」

「「はあ！？」」

「まだ二つしかやってねえぞ！」「そうだよ！」「どうしてさ！」

「色々とあったじゃない！色々と！そのせいで時間が足りなくなっ
たんだよ！」

「馬鹿じゃねえか！」

「二回目をやるかどうかは気分次第！あとは、質問が来ればやるか
もしれない！以上！第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじゃ
ね？ラジオでしたー！」

「勝手にしめるんじゃねえ！！」

「これから一緒に買い物行かない？近くに安いところあるんだよ。」

「本当！？ちょうど部屋が綺麗すぎて何かほしいなあと思っていた
ところなんだよ！」

「……俺も行っていいいか？」

「いいよ！」「うん！」

「DJは私、末吉！ゲストは池田連！八神つとむ！風間大輝でした
！アディオス！」

対談 アイドルッ！×考える人×普通の人を送る日常（後書き）

これで質問が来れば願ったりかなったりです。

閑話 とある休日 黒曜甚平編（前書き）

ちよつとサブキャラに焦点を当ててみました。

閑話 とある休日 黒曜甚平編

みなさん、お久し振りです。覚えていますか？黒曜甚平です。今回はわたくしの休日を紹介いたしましょう。

わたくしは、毎朝六時には起きます。わたくしは一人暮らしなので、家は一戸建てです。あ、デンタツ内にあります。

起きたあとは、朝食を作り、新聞を取りに行き、新聞を読みながら朝食を食べます。これは習慣となっているのですよ。

食べ終わった後は食器を片づけ、パソコンを起動させます。昔はこの家にも家族がいたのですが、今はいません。理由は秘密ということ。

パソコンが起動したあと、メールをチェックします。圭君に送ったメールに対しての、返信があるかどうかの確認です。

この日はなかったのですが、かわりに変なメールが届いていました。

『どうも、柊です。久しぶりに会えませんか？ちょうどデンタツに私用で来ていますので。』

わたくしはこれを見て、どうしようか悩みました。今日は休みの日なので特に問題はないのですが、相手が柊だということが問題だったからです。

柊宙。わたくしから見れば駆け出しの情報屋なのですが、言葉巧みに相手の情報を探るという業界の取り決めのグレーゾーンを、何のためらいもなくやってのけるというある意味異端な人物だからです。

しかし、わたくしは会うことにしました。どうせ相手側のほうが遅刻するのだらうと思いながら。

「すみません、黒曜さん。僕のメールに答えてくださって。」

「そう思っているのなら、遅刻はしないほうがいいぞ。柊。圭君と会ったときだって遅刻したんだろ？」

「ははは。やっぱり隠し事はできませんか。」

「で、何の用なんだ？」

私がそう訊くと、柊は「場所を変えましょう。」といって移動した。

で、場所を変えた先がなんと海だった。確かにこの季節なら人はいないだろうが……。

柊の真意を量り損ねていると、移動させた本人はこう言った。

「黒曜さん。最近、圭の友達のこと調べているんじゃないですか？」

「……それがどうしたんだ？」

「僕に実害がないからいいんですけどね。それはほどにしたいほうがいいですよ。」

「? どうしてだ？」

私がそう訊くと、柊はためらいながらこう言った。

「そうですね……。確かめていないのですが、ある情報を耳にしたんですよ。」

「情報だと？」

私も常に網を張っているが、柊が確証のない情報を私に話すということは、おそらく私が知らない情報なのだろうと推測し、耳を傾けた。

「実はですね……圭の学校でもう学園祭が始まっているのですよ!」

「ああ! 無言で帰らないでください! ちょっとした冗談じゃないですか!」

「で？」

これ以上無駄な話をしたら今度こそ帰るぞオーラを辺りに出しながら、私は先を促した。

柊はそんなオーラを感じ取ったのか、真剣な顔になってこう言った。

「私も偶然聞いた話なんですけどね。圭のクラスメイトに、中島元つて、生徒がいるじゃないですか。」

「ああ、そうだな。そのことがどうしたんだ？」

「その子の能力についての新情報があるんですよ。裏はとれていませんがね。」

「!？」

私は驚いた。圭が私たちに「中島元の情報をくれ。」という頼みをしてから三年が経とうとしている。その間一切進展がなかったからだ。

「……それは、圭君は知っているのか？」

「いえ、知ったのはデンタツに来る間です。仕事で行った場所の人たちの話を聞いていたらそんな情報があったんですよ。」

「それを私に話してどうするんだ？」

「あなたから圭に話してください。私は仕事で忙しいので。」

そう言って、柊は私にその情報を教えてくれた。

その情報とは、『中島元の能力は昔にも存在した。』ということである。それが意味することは私には少ししかわからないが、圭にとっては有益な情報となるだろうと思った。

「柊。ありがとう。」

「いえいえ。これからは遅刻しないように気を付けますよ、黒曜さん。」

私がお礼を言うと、柊はそういつて砂浜を歩いていき、しばらくして消えてしまった。

それを見届けた後、私は柊の情報が本当かどうか確かめるべく、家に帰った。

閑話 とある休日 黒曜甚平編（後書き）

これは・・・ネタバレになりますかね？

十月下旬～十二月中旬（8）（前書き）

二日目です。結構短いです。

十月下旬～十一月中旬（8）

二日目。

言わずもがな、時間をずらしたのにもかかわらず、繁盛ぶりは変わらないというか昨日より賑わっていた。元の両親が、息子の女装姿を見て写真を撮っていた。可哀相に。

藤木さんは、今日は何事もなく教室にいたり宣伝に行ったりした。そして、僕の両親が来た。なぜか、見るからに偉そうな人を連れて来て。

あ、僕は調理係をやっています。休憩なし。いまどきどんな労働条件だよ。

「池田君、どうしてこんな所を商談場所へ指定したんだ？」

その見るからに偉そうな人は、席に座ってから両親に訊いた。

ストップ！なんだかすごい言葉が聴こえた！本当に！？

対して、両親はいつもと変わらぬ口調でこう言った。

「別にどこでやっても良いと思いますよ？家の中でも出来ますし。

肝心なのは参加している人だけだと思いますよ？」

「なるほど。君たちはあくまでここでやりたいわけか。まあいいだろう。」

「アザース。」「ありがとう。」

なんだろう。この竹を割った感じのフランクリーさは。

ちなみに、今このクラスにはまだたくさんのお客さんがいます。

そのうちの一つのテーブルに両親たちが座っているので、周りが静かになっていた。こっちはいつも通りにやっていますけどね。

面倒なので簡略するけど、このあと僕がつくった料理を偉そうな人が食べ、感動というより顔が完全にニヤけて、すぐさま商談が成立した。そして、両親が「連によろしくっ！」って言って連れてきた人と一緒に帰っていった。あとで董さんから聞いた話によると、あの人は結構な偏屈社長で、あそこまで商談があっさり決まる事は

無いんだって。改めて両親の凄さが分かったよ。

それから、学園祭の終了時間まで人が途切れることは無かった。皆が帰って、僕と藤木さんだけになって。

「池田君、大丈夫？」

「あ、藤木さん？まあ何とか……。」

「明日も頑張ろうね。」

「うん。」

そう言った時に、藤木さんの顔が一瞬だけ切ない表情を出していた。けどそれも一瞬の事で、「じゃ、帰るね。」

と言って藤木さんも帰っていった。僕も帰った。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その2 (前書き)

閑話↓本編↓閑話という順で今回はお送りしたいと思います。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その2

その情報を調べていくうちに、わたくしは別な情報を知りました。中島元が狙われていること、そいつらの目的がその子の能力だということ。そして、そいつらも中島元的能力が、昔存在していたことを知っているということ。

わたくしはこれを今すぐ圭に報告するべきか悩みましたが、証拠を固めていったほうがいいと思い、報告するのをやめました。それで、証拠を固めにまずは柊がその情報を聞いたという場所へ向かいました。

場所は本当にデンタツの近くにある集落だった。そこを訪れた時、入り口近くから人が出てきた。

「だれだ？」

「誰だ、とは私のほうが訊きたいのだがな。君は？」

「私はこの集落の番人だ。ここに何しに来た？」

「『魔法でも超能力でもない能力』。」

私がそう言うと、自らを門番と名乗ったやつはピクツ、と反応した。

「それを調べに来たのか？」

「ああ。」

私が頷くと、そいつは悩んだ後、「そこから動くなよ。」と言って集落へ入ってしまった。

「動くな、か……。」

そう呟きながら、私は言われた通り動かなかった。

自称門番が戻ってきたとき、私の顔を見て驚いた。

「本当に動いていなかったのか？」

「君が言ったのだろう。」

そう私が返すと、そいつは驚いた様子だった。

驚きから戻ってきた後、そいつはこう言った。

「長老から許しが出了。はいれ。」

あまりにも簡潔だったが、特に反対する理由がないのでおとなしく従い、集落へ入った。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その3

私は集落の中をしばらく歩きまわったが、人があまりいないことが気がかりだった。しかし、人の気配はした。

ということはどこかに隠れているのだろうかと思っていたら、

「君か。『あの力』を調べに来たのは。」

という声とともに、私の目の前に数人現れた。

突然のことに驚きながらも、私は頷いた。それを見た現れた数人の中の一人がこう言ってきた。

「ふむ。あなたは『あの力』について調べに来たのですね、本当に。」

「さつきから『あの力』といっているが、一体なんだ、それは？」
そう私が訊くと、

「分からぬのじゃ。」

真ん中の人がそう答えた。どうやら、長老だろう。

「分からない、とは？」

「言葉通りじゃ。分かることと言えば、その力を持つ者はどうやら『ある意思』から選ばれているらしいとしか言えんのじゃ。」

「ではなぜ選ばれるということがわかるんだ？」

「それは代々受け継がれている、わが書庫にあった本に書かれていますから。」

なぜあるのか、という疑問が出てきたが、何も言わなかった。そのかわり、

「その本を見せてくれないか？」
と言ったら、

「それは無理じゃ。それを許可していいのは、『あの力』に関わりつつも、悪用しようとしないう者のみじゃ。ただし、本人以外とする。」

と返ってきた。

なるほど。私はそのかわりが薄いと思われていたのか。それだったら仕方がないと思いつつ、私は長老たちにお礼を言い、集落を出た。

「なんだ、教えてもらえなかったのか。」

「ああ。どうやら、事情があるみたいだ。」

「じゃあな。」

「ああ。」

最後に門番に挨拶をして、私は家に帰ることにした。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その3 (後書き)

あの力の謎はいまだ解明されず・・・・・・・・・・。

十月下旬～十二月中旬（9）（前書き）

昨日は諸事情があつて更新できませんでした。

十月下旬～十一月中旬（9）

三日目。

評判が評判を呼んだのか、売り上げが止まることを知らなかった。それに比例して、忙しかった。慣れてるけどね、僕は。

そして、正午ごろに僕の姉が来た。

「いらっしやいませ！何名様ですか？」

いつものように、というか一番近かった元がお客さんを迎えていた。その時に、

「四名だ。あんた、男なのに似合ってるね、その恰好。」

と言って、連れの人と一緒に空いてる席へ行ってしまった。

「へ？」

元は、女装したと一発ではれたことに驚いていた。その声を聴いて、僕はその人が誰だか分かってしまった。他のウェ이터に任せられないと思ったのか、庄一がその席にメニューを置きに行った。

「こちらがメニューになります。どうぞ、ごゆっくり。」

「ん？あんたは連の友達か。どうだ？あいつは上手くやってるか？」

「そっちがそうなら別にいいよな。ああ、やってるぜ。あいつのおかげで繁盛してるようなものだ。」

「それ以外にもあるんでしょ？・・・ま、いいや。決まったら呼ぶから。」

「こっちも暇じゃないからそれで構わない。」

と言って、庄一はその場を離れた瞬間、

「ああ。決まったわ。」

と言って料理の名前を挙げていき、庄一が慌てて書き留めていった。姉さん達の料理が出来たので僕はウェ이터に渡そうとしたら、
「連に運ばせろ。」と庄一が言ってきた。仕方がないので、僕はまた運ぶことにした。

「お待たせしました。それでは。」

と言って仕事に戻ろうとしたら、

「やっぱり美味そうだなあ、連。なあ、今大丈夫か？」

姉さんがそう言ってきた。姉さん達と一緒に座ってる人は、僕が知らない人ばかりだった。多分、テレビ（主にドラマ）を見ないからなんだけど。

だって、現に周りの人たちが「あの人って、凧さんに似てない？」

「その周りにいるのって新しくやるドラマの出演者に似てない？」
って言ってるから。

「姉さん。今悪いけど手が離せないんだ。帰ってからでいい？」

「うーん。だったら、終わったらで。」

「僕ずっとここ。四時くらいにならないと終わらない。」

「それなら家で話すわ。」

これで会話終了。これで僕は自分の仕事に戻った。

姉さんの事は料理をつくってる間に訊かれたけど何とかはぐらかした。

藤木さんは、今日も無事で活躍していた。良かった。

三日目が終了し、今回も僕と藤木さんが残っていた。また昨日と同じですか。参ったね。

帰りの支度をしながら、そういや姉さんって何の用があったんだろう？と思っていたら、藤木さんが話しかけてきた。

「昨日も私達一緒だったね。」

「そうだね。」

帰りの支度をしながら、今の体の調子を確認しながら、僕はそう言った。

「これって偶然かな？波長が合っているのかな？」

ぴょんぴょんと、僕の周りを跳ねている藤木さん。それを苦笑しながら、

「偶然だと思うよ。藤木さんは文化祭の前はいつも早かったでしょ？」

と僕は言った。すると、藤木さんは照れた感じでこう言った。

「え？見てたの？あははは。よく見てるね、池田君は。」

「僕だけじゃないよ。」

「え？」

僕の言った言葉に、藤木さんはちよつと驚いていた。人に見られてないと思っていたの？君は。

「多分だけど、元たちも見えてたよ。藤木さんが一人でさっさと帰るところ。だって仲良くしようとしていたもん。元たちが一番ね。」

そう僕が言くと、藤木さんは「そっかあ……。」と言った後、

「あのね、池田君に聴いて欲しいことがあるんだ。」

と言ってきた。その表情は、どこか淋しそうなものだった。

「どうぞ。」

それを気付いた僕は、気付かなかったふりをして話を進めるのを促した。

「私ね、本当は元の事を調べるためにこの学校に来たんだ。でもね、元の事を調べていくにつれて、元の事を段々考えるようになっていったんだよ。」

「それって恋だよね？」

「はう！池田君に断定されちゃった！」

そう言った藤木さんの顔は、真っ赤だった。可愛いなあ、全く。

「でもね」

さっきまで真っ赤だったのが嘘のように、再び表情が元に戻って話が進んだ。

「でもね、学園祭が始まった時にこう言われたの。『中島元を連れていく。』って。その時から私はどうしようか悩んだ。でも、断ったら私が危なくなる。そして、考え出した答えが……元を守る。つまり、抵抗するってことにしたの。」

これで話が終わったみたいだった。僕はというと、今までの流れを整理している傍らで思ったことを口に出していた。

「どうして僕に？」

それに対して、藤木さんはにっこりと笑ってこう言った。

「へへっ。誰でも良かったんだけど、最近池田君が最後まで残ってるから。」

その答えに納得する傍ら、僕は一つ訊きたいことがあった。

「藤木さん。訊いても良い？」

「なに？」

「いつなの？」

その質問に対して、

「あの人たちが行動を開始するのが、学園祭最終日の終わり。だから、私は自分の持てる力で抵抗するの。」

と答えてくれた。僕は、「ありがとう。そしてまた明日。」と言って藤木さんが教室を出て行くまで待って、家に帰った。

十月下旬～十二月中旬（9）（後書き）

閑話か、本編か。
とても悩みます。
質問待ってます。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その4 (前書き)

思いつきとは恐ろしいですね……………。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その4

私は集落の中をしばらく歩きまわったが、人があまりいないことが気がかりだった。しかし、人の気配はした。

ということはどこかに隠れているのだろうかと思っていたら、

「君か。『あの力』を調べに来たのは。」

という声とともに、私の目の前に数人現れた。

突然のことに驚きながらも、私は頷いた。それを見た現れた数人の中の一人がこう言ってきた。

「ふむ。あなたは『あの力』について調べに来たんですね、本当に。」

「さつきから『あの力』といっているが、一体なんだ、それは？」

そう私が訊くと、

「分からぬのじゃ。」

真ん中の人がそう答えた。どうやら、長老だろう。

「分からない、とは？」

「言葉通りじゃ。分かることと言えば、その力を持つ者はどうやら『ある意思』から選ばれているらしいとしか言えんのじゃ。」

「ではなぜ選ばれるということがわかるんだ？」

「それは代々受け継がれている、わが書庫にあった本に書かれていますから。」

なぜあるのか、という疑問が出てきたが、何も言わなかった。そのかわり、

「その本を見せてくれないか？」

と言ったら、

「それは無理じゃ。それを許可していいのは、『あの力』に関わりつつも、悪用しようとする者のみじゃ。ただし、本人以外とする。」

と返ってきた。

なるほど。私はそのかわりが薄いと見破られていたのか。それだったら仕方がないと思いつつ、私は長老たちにお礼を言い、集落を出た。

「なんだ、教えてもらえなかったのか。」

「ああ。どうやら、事情があるみたいだ。」

「じゃあな。」

「ああ。」

最後に門番に挨拶をして、私は家に帰ることにした。

家に帰ったわたくしは、パソコンを起動させてとあるサイトを見た。そのサイトは、私たち情報屋が普段交流の場として使っているサイトである。

わたくしはパスワードと会員番号を入力して、そのサイトを閲覧した。

この通り、セキュリティを解除していかねばいけませんので大変面倒なのですが、これくらいやらないと誰でも閲覧出来てしまうのです。

わたくしとしては、これ以上にセキュリティを強化しても問題ないと思いますが。

話を戻しましょう。

わたくしはサイトの報告欄をみながら、ふとこんなことを考えました。

ひよっとすると、わたくしたち情報屋でも知ることができない、

『何か』があるのではないかと。

そしてそれは、とんでもない情報なのではないかということ。

十月下旬～十二月中旬（10）（前書き）

今回、新キャラ登場です！

十月下旬～十一月中旬（10）

家に帰って僕を待っていたのは、いつもと変わらぬテンションの両親と、それを眺めながら夕飯をつくっている姉さんと、昼に僕達のクラスに来ていた人だった。

僕は二階に上がって着替え、リビングへ降りた。そしたら、夕飯が並べられていた。

「よっ。おかえり。」「おかえり。」「お帰りなさい。」僕を見た時、一斉にそう言ってきた。ん？一人多いよ？

「姉さん、誰なの？この人。」

僕は、僕のクラスに来ていた人が誰なのか最初に訊いた。そしたら、その人本人が自己紹介してくれた。

「初めまして。私の名前はレミリア。レミリア・ジャンヌって言います。年はあなたと同じ年です。」

と言って、着ていたドレスの端をつまんでどこかの社交界なんかで観る挨拶をしてくれた。様になってるね。

改めてレミリアさんを見てみると、美人だった。髪はレイジニアさんみたいな金髪だけど、目の色が緑色をしていた。それらを含めて、顔立ちは凛としていた。

「おい連。レミリア見てないでさっさと食べろ。」

どうやらマジマジと見ていたようだ。レミリアさんはちょっとだけ顔を赤らめていた。

それを見た僕はちょっと気まづくなったので、おとなしく姉さんに従うことにした。

それで夕飯を食べていたら、姉さんがこう言ってきた。

「連。あの時、私が話したいことがあるって言ったよな。」

「そうだね。」

僕は姉さんがつくった料理を食べながら頷いた。両親は、ビールを片手に料理を食べていて、レミリアさんはそれを見ながら食べてい

た。あれ？これって新鮮だ。

「なに感動してるか知らないけど、話ってるのはレミリアの事よ。」
「え？なに？しばらく泊まらせろって？」

「お前の推理力と観察力は親譲りだな。話がはやくて助かるが。」
「姉さんのその演技力も親譲りだと思うんだけど。」

「そんなことはどうでもいいんだ。ここにしばらく泊まらせる理由だが、今度やるドラマの撮影がこの近くだったからな。それでだ、レミリアは本来ならホテルに泊まるはずだったが、何を思ったのか私の実家に泊まりたいと言い出してな。なし崩し的にこうなったわけだ。ま、撮影は一ヶ月くらいかかるから、それくらいなら大丈夫でしょ？」

うん。もう決定事項になってるね。姉さんの言葉を聴きながら、僕はそう思った。

「父さん達は？」

「『賑やかになりそうだからいいよ。』って言ってたわ。私も出来る限りするから、いい？」

どうやら最終的な決定は僕に任されるようだ。……………ん？

「姉さんさっき、『一ヶ月くらいなら大丈夫でしょ？』って言ってなかったっけ？」

「大丈夫でしょ？」

「それともう決定してることにならない？」

「あ。そうね。」

今更のように気付く姉さん。わざとでしょ？

というわけで、

「レミリア。」

「なんです？ 風さん。」

「しばらくはここで過ごして良いそうだ。」

「ありがとうございます。」

見事レミリアさんがここに居候することになりました。

僕は普通に過ごしてるだけなんだけどなあ。

ま、
なるようになれ
つてことで。

閑話 とある休日

黒曜甚平編その5（前書き）

今回も短いです。

わたくしが一通りサイトを巡回した後、時計を見たら午後三時でした。一人暮らしなので食事は簡単なのですが、今日は自分で作ったものを食べようと思いつき、買い物へ出かけました。

デンタツで食材を買うところは色々あるが、私がおススメするところはやはり楔商店街だな。あそこは品がいいし、種類も豊富、それに値段が安いのもポイントだ。

こういうコメントをすると、歩き回っていたのか？という質問が出てくるだろうが、実は私はここ出身でね。ここのことなら結構詳しいのだ。

という自慢は置いといて。

私は楔商店街で食材の買い物をしていった。たまに、この商店街の店で貴重な食材が売られていることがあるから、私はほぼ毎日ここにきている。

食材を買い終えた私は、家に帰って夕飯を作り始めた。

夕飯を作り終え、それを食べ終えた後、わたしくは特にやることはなくテレビを見ていました。

そこで、ふと考えだしました。

圭君の友達は、みんな楽しく毎日を過ごしているんだな。とくに、池田連君。あの子はいつも楽しそうだな、と。

わたくしは、テレビを消して風呂に入り、風呂から上がったら寝ました。

その中で、わたくしと私は今日の出来事をそれぞれ話し合っていました。どうも、それぞれ貴重な体験をしたらしく、充実した休日となった。と互いに結論付けました。

閑話 とある休日

黒曜甚平編その5（後書き）

次は誰の閑話を書きましようか？

十月下旬～十二月中旬（11）（前書き）

二万PV突破しました！感想がほしいです。待っています！

十月下旬～十一月中旬（11）

学園祭最終日。

失速することを知らないのか、僕達の喫茶店は繁盛していた。多分、売上げが過去最多だろう（学校内という意味）。

そして学園祭が終わって、僕達は教室にいて打ち上げをした。その時に、元たちと藤木さんがいなかったけど、みんなは気にしなかった。僕達も気にしなかった。

「いや～この学校で過去最高の売上だってよ！嬉しいぜ、全く！」
「…連のおかげ。」

「流石に、みんなのようにはしゃぐ気力はないよ。今は。」

「そういや、元たちは？」

「…藤木さんもない。」

その二人の質問に、僕はベランダから空を眺めながらこう言った。

「今頃、どこかの組織をつぶしてるんじゃない？」

「？」「…？」

僕が言った言葉に、二人は首を傾げたみたいだった。でも圭は調べるから、きつとすべてを知るだろうね。

空を眺めながら、僕はそう思った。

「ただいまあ～。」

打ち上げが終わって家に帰ったら午後七時。靴が一人としてないの、家には誰もいないのだろう。

僕はとりあえず風呂を沸かした後に両親の夕飯だけ作り、本を読んで風呂が沸くのを待ち、風呂に入って自室へ戻り、明日の準備をして寝ることにした。洗濯とかは明日やろうと思いつつながら。

翌日。今日は片付けがあるので登校日。昨日はやく寝たせいか、今日は早く起きた。両親たちが帰ってきたのかを確認すると、僕は洗濯機を回しながら朝食をつくっていった。

朝食をつくり終えて、僕はちよつと一息入れていた。

朝食を一人で食べ、洗濯物を干していたらいつもの時間になったのか、両親が起きた。その後に姉さんとレミリアさんが起きた。

四人が食べている時、僕は二階へ行って制服に着替えていた。着替え終わった時、時間にまだ余裕があったので、僕はリビングで休憩することにした。

リビングに降りてのんびりしようとしたら、

「おい連。食器洗うの手伝って。」

いきなり姉さんの暴言を聴くこととなった。僕は反論しても無意味だと知っているので、何も言わずに手伝うことにした。レミリアさんも一応手伝ってたよ。

それが終わったので今度こそ休憩しようとしたら、

「なあ連！俺のワイシャツってどこだっけ？」「早くしなさい！」

両親（正確には父親）が困っていた。僕がいつもの場所に置いてあるよと言ったら、急いで行ったみたいだった。

やっと休憩できると思ってソファに座ったら、レミリアさんが隣に座った。

「あなた、毎日こんな生活をしているの？」

「まあね。ただ、今日はいつもより早く起きたし、昨日みんなの帰りを待たないで寝ちゃったから。」

と、僕はレミリアさんと話していた。そしたら、姉さんが口を挟んできた。

「お。レミリアから話しかけるなんて初めてじゃないか？ていうか、二人で会話してるところなんて見たことないわね。」

「！？」「そうだね。」

レミリアさんは驚いて、僕は冷静に姉さんと話していた。いや、驚いてるだけなのかな？顔を真っ赤にしている。そんなことを気にせず、僕は姉さんに訊いた。

「姉さん。今日は撮影あるの？」

「うん？一応あるけど、確か午後からだよね？」

「そうですね。それまでは自由時間です。」
そして、少し三人で話していたらいつも登校する時間になりそうだった
ので、僕は鞆を持って学校へ向かった。

十月下旬～十二月中旬（12）（前書き）

学園祭の話は関係なくなりました。

十月下旬～十一月中旬（12）

「さあやるぞ！さっさと終わらせてさっさと帰ろう！」

「「「おおー！ー！ー！」」」

庄一の一言で、僕と圭と元以外の男子はみんなやる気を出していた。女子もやりますからね。

片付けの中で、僕は元と一緒にだったので話しながらやっていた。

「藤木さんもちゃんと戻ってこれたんだ。よかったよかった。」

「ありがとね、連。君の言葉で助けに行くことが出来たよ。」

「お礼なんていらないよ。僕は教えただけで、藤木さんを助けたのは元なんだから。」

「そうかもしれないけどね。あ。花音が最近、連の家庭を調べたいとか言い出していたんだけど……。」「

「元の研究でもおとなしくして欲しいな。」

「それ、久実たちには言わないでよ。最近花音と僕が一緒にいると、ロリコンだとか言ってくるんだから。」

「ははは。大変だね。」

「まったくだよ。」

そうこうしてるうちに、僕達の割り当てられた場所は終わった。他の所はもう少しで終わりそうだったので、僕達はまだ話すことにした。

「そう言えば、連。君、堇のお母さんから何か言われなかった？」

「え？確か……。お礼がどうのこうの、だった気がする。」

「今日か明日にでも来るんじゃないかな？堇がそんなことを言っていたから。」

「家の掃除してないや。」

「あと、なぜだか僕の両親が『池田君を見習いなさい！』って言うてたんだけど、何か心当たりはある？」

「……。なにもないよ？」

「今どうして目を逸らしたの？しかも話を聴いてみたけど、連がだいぶ偉大な人に聴こえたんだけど。一人で家の事をすべてやるとか、家庭内の実質的な大黒柱は連だとか、家計簿をつけているとか。それって、本当？」

「それ位は普通だよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

あれ？元が黙っちゃった。どうしたんだろう？そう思っていたら、

「反抗したいと思わなかったの？」

と訊かれた。反抗：反抗ねえ・・・・・・・・・・・・・・・・。

「ないよ。そんなことしたら今頃家が大変なことになってるよ。」

僕がそう言ったら、元が慰めるような眼で僕の事を見てこう言ってきた。

「これは一回花音に調べてもらった方がいいかもしれない気がするね。」

冗談だね？と言って僕が訊いた時には片付けが終わっていた。

終わったので、僕はいつものように帰ろうとしたら、庄一や圭、元たち（藤木さん含む）までついてきた。大所帯だよ、困ったものだ。

ちなみに、庄一と圭は恒例の打ち上げ、元は「さっきの言葉が本当か確かめたい」、久実さんと藤木さん、レイジニアさんは「どんな家で生活をしているのか気になるから」、堇さんは「お母さんが家に来るかもしれないから」だってさ。僕の家って、特別なものがないにも無いんだけどなあって……あ。忘れてた。今、レミリアさんと姉さんがいる。どうしよう。

十月下旬～十一月中旬（12）（後書き）

次回、ひそかな打ち上げは成功するのか！？

なんて、どこかのアニメの次回予告みたいな感じにしてみました
次回予告です。

ややこしかったですかね？

十月下旬～十一月中旬（13）（前書き）

打ち上げと称したちよつとした騒動。連にそろそろ優しくしたいです
ね。

十月下旬～十一月中旬（13）

「ただいま。」「「「「「お邪魔します。」」「」「」「」

結局、僕の家までみんなついてきてしまった。その声につられたのか、姉さん達が玄関に来てしまった。そして、姉さんが口を開いた。

「お帰り、連。早かったな……って、なんだこの人数！？見知った二人と女装してたやつは知ってるが、後の人達は誰なの！？」

「落ち着いて！それに、別に問題は無いでしょ？以前両親が会社の同僚を二十人くらい連れて来た時よりは。」

後ろで、「二十人って……。」「……知らないかった。」と、「「「「「ええええ！！！」」「」「」」という声が聴こえた。姉さんはいと、

「あれは確か五年前に私が家を出て行くころだったな。……ま、あの時よりはマシだな。」

落ち着きを取り戻していた。姉さんが家を出て行った理由は、女優として仕事があったから。

突飛な両親のかなりの無茶ぶりを経験してきた僕達。たかだか七人では驚きません。

そして、その光景を見ていたレミリアさんは「やっぱり姉弟ね。」と言っていた。

あまり驚いていない庄一と圭は、すぐレミリアさんに視線を移してから、こう言った。

「圭。俺、幻覚でも見えてるのか？エミリーさんが見えるんだが。」

「……幻覚ではない。本物。」

エミリーって、レミリアさんのタレント名かな？素直に僕はそう思った。

当然、元たちもレミリアさんに気付き、結局、僕が一人で尋問を受けることとなった。

なんで、こんな目に……！！

僕の姉とレミリアさんの説明を聴いたみんなの反応は、驚いていたと言えなかった。

もうすぐ昼だという事で人数分の昼食をつくらないといけなくなったから、僕だけで買い出しに行くことになった。今日だけで食費が大変だなあと思いながら。

商店街で昼間から値切りまくって買い出しを終え、家に帰ってきたらみんな思い思いに過ごしていた。久実さんと董さん、藤木さんは姉さんと話しており、レイジニアさんはレミリアさんと話しており、庄一と圭と元はゲームをしていた。おい。

何を言うのも面倒になったので、僕はおとなしく昼食をつくることにした。それに気付いた久実さん達が手伝おうとしてくれたけど、姉さんが「あんたたちにできる事は無いよ。」と言って引き下げさせた。そりゃあ、そうだろうけど。

ちなみに、料理を作っている間、何故か女子の視線が凄かった。キッチンに近いテーブルに女子はみんな座っていたので、僕の事は見える。どうしてなのか気になったけど、気にしないことにした。

考えるのが面倒だったので、料理はみんなと一緒に食べれるものにした。で、つくっている間にまた人が来たみたいだった。姉さんが玄関に行ってくれた。

そして、姉さんが連れてきた人を見て、レミリアさん以外は驚いた。来た人はなんと、董さんのお母さんだった。

「お母さん！どうしてここが分かったのですか！？」

「それはね、前にあなたがここに来たからよ。」

というわけで、一人増えました。なんでも、体育祭と学園祭のお礼がしたかったから、だって。

姉さんとレミリアさんは分からなかったみたいだけど、庄一が説明してくれた。

料理を作り終わったので、僕は皿に料理を移し、二つのテーブルにそれぞれ同じ料理を運んだ。男子がテレビに近い方、女子がキッチンに近い方。見事に固まったね。

食べている間の会話、男子の場合。

「それにしても驚いたよ。連のお姉さんが女優だったなんて。」

「俺はエミリーさんが居た事に驚いたんだが。」

「…同感。」

「僕は堇さんのお母さんが家に来たことに驚いたんだけど。」

「それもそうだけど……………」

「いつからだ？」

「一昨日からだよ。姉さんがしばらく泊まらせたい、って。」

「…………どうして？」

「本人の意思なんだ。」

「詳しく訊いてねえのか？」

「普段話をしないから。」

「それにしても、本当だったね。」

「なにがだ？」「……………」「え？」

「連が一人で家事をやってるの。」

「そんなことか。」「…今更。」「あはは。」

女子の場合。

「それにしても、池田君に会いに来たのに大女優とお会いできるなんて。嬉しい誤算ですね。」

「社長夫人であり、作家であるあなたにお会いできて光栄です。」

「はじめて池田君の料理食べたけど、すごい美味しいね。そこのレストランで食べたら物足りなさを感じそうだね。」

「前にも食べたことあるけど、それよりおいしくなってないかしら？」

「そうね。もしかして、学園祭の調理がほとんど一人だったからじゃないかしら。」

「料理教室を開いたら生徒が沢山来そうですね。」

「あの、皆さん。」

「なに？エミリーさん、でいいかしら？」

「レミリアでいいですよ。」

「そうそう。私の事だって渚でいいんだよ。」

「そう。なに？レミリアさん？」

「皆さんは、超能力とかありますか？」

「私はあるわよ。」「私は魔術師です。」「私はネクロマンサーよ。」

「私は普通のか弱い女性だ。」「私は…普通の人ですね。」「私は天才科学者だよ。」

「そう言うレミリアは？」

「私は…魔術師なんです。」

「へえ。」「私と同じですね。」「そうなの。」「何回かみたことあるな。」

「そうなんですか。」「身近に結構いるんだねえ。」

十月下旬～十一月中旬（13）（後書き）

報告です。十月下旬～十一月中旬の話が終わったら、連たちの過去話をしたいと思います。ご期待ください。

十月下旬～十一月中旬（14）

そしている内に食べ終え、姉さんが食器を洗って片付けている間に、僕は自分の部屋に行って家計簿を持って一階へ降りた。

一階へ降りた時。すでに姉さんとレミリアさんは仕事へ行ったらしく、二人の姿はなかった。

「どこ行ってたの？」

「どうせ自分の部屋だろう。」

よくわかってるね、庄一。そう思いながら、僕は空いていた椅子に座ってさっき買ったも食材の領収書を、家計簿に書き留めていった。結構な量を買ったから大変だなあ。

そうやって家計簿をつけていたら、みんなが僕の周りに集まっていた。

僕は、動かしていたシャーペンを止めてこう言った。

「どうかしたの？」

すると、代表してなのか庄一が言った。

「いや、客が来てるのにもいつも通りだなあと思って。」

「暇な時にやらないと、すぐにできなくなるからね。」

僕はそう言って、再び家計簿をつけ出した。うーん。ちょっと出費が多いかな？ 久し振りに赤字になりそうだ。ま、今回は仕方ないかな？

そう思いながら続けていたら、堇さんのお母さんがポツリと漏らした。

「すごいわねえ。私もやったことはあるけど、ここまでマメにやれなかったわ。」

それに反応して、圭が言った。

「…連はこれを十年もやっている。もはや習慣。」

そういえば、前に僕の事調べてたんだっけ。そう思いながら、作業はやめなかった。

家計簿をつけ出してから二分。そんな時間がかからなかったね。

終わったので、ノートを自分の部屋へ戻そうとしたら、みんなに立ち塞がれた。

「どこへ行くの？」

「どこって……自分の部屋だけど？」

当たり前のことを何で聴くのか、僕の事には判らなかった。そして、レイジニアさんがこう言った。

「なら、一緒に行ってもいいかしら？」

「どうして？面白い物なんか一つもないよ？ね、庄一。圭。」

「面白いというか……」「……中学生の部屋じゃない。」

僕が庄一と圭に話を振ると、二人はそんなことを言った。失礼な。単純にものが無いだけだよ。

庄一と圭の話でますます興味を持ったのか、みんなが僕の部屋に行きたいと言い出した。断っても面倒なので、仕方なく許可した。本当に面白い物なんてないのに。

二階へあがって、僕の部屋の前に来た。

「ここが僕の部屋だけど、みんないっぺんに入れないよ。」

「入らなくても見えるだろ。」

と、庄一の鋭いツツコミ。そうだけどさ。

そう思いながら僕はドアを開けて部屋の中へ入っていき、いつもの所へ家計簿を置いた。

ドアを開けたままにしておいたので、元たちが入ってきた。

初めに感想を言ったのは、久実さんだった。

「凄いわね。きちんと整理整頓されてるわ。物が散乱していないわね。」

それに続いて、

「この本棚、きちんと整理されています。ちゃんと、どこに何があるのか分かりやすく整理されています。……あ！お母さんの本が置いてあります！」

「あら嬉しいわね。こんな身近にファンがいたなんて。」

「ハジメの部屋とは大違いね。」

「そうだね。僕の部屋が凄い汚い部屋に見えるよ……って何言わせるの！」

「自分で言っただよ。」

「……庄一は見習うべき。」

「うっせ。捨てたくても捨てられないんだよ。」

と口々に言っていた。そして最後の言葉を聴いて、

庄一、それはダメだよ。と、庄一以外がそう思った。

と、ここで堇さんのお母さんがこう言った。

「そういえば、私はあなたにお礼をしにきたんです。それなのに昼食をごちそうしていただいて、ありがとうございます。」

僕は頭をかきながら、堇さんのお母さんを見てこう言った。

「いえ、お礼だなんてそんな。たいしたことはしていませんし。」

「さて、本来はこれまでのお礼をしに来たのですが、今回のも含めて三回のお礼をしないといけませんね。」

あ、スルーされた。堇さんを見ると、「お母さん。私を泊めてくださったのですから、四回ですよ。」「あ、そうですね。」と何やら増やしていた。そんなものが目的じゃないんだけど。

「さて、四回分のお礼をしないといけないのですが……そうですね。全部あなたが決めてくれませんか？」

スルーされたまま、強制的に話を進められた。

四回、か……。意外と多いね。と、なると……。

僕は簡単に四回分を使える方法を思いついたので、本棚からお気に入りの本を四冊とってこう言った。

「これにサイン書いてくれませんか？一冊で一回分。計四回分です。」

すると、堇さんのお母さんが何やら考えた後にこう言った。

「本来ならお断りなのですが、仕方ありません。いいですよ。」

そして、僕が渡した本四冊にサインしてくれた。やったね。

一階へ降りて、僕達はみんなでゲームをした。基本的に庄一、圭、

元、久実さんの四人で、僕達はそれをキッチンに近いテーブルで眺めていた。

三時になった時、みんな帰っていった。みんなの表情を見てみると、どこか満足したみたいだった。僕としても嬉しいけどね。

十月下旬～十一月中旬（15）

夕飯の買い物から帰ってきた後すぐに家計簿をつけ、夕飯をつくっていった。

そして夕飯を作り終え、洗濯物をたたんで自分の分を運んでいった。それが終わったら、テレビを見ることにした。暇なもんでね。テレビを見るのも飽きたので、僕は両親たちを待たずに食べることにした。

僕が食べ終わって食器を片付けていると、両親が帰ってきた。帰ってきて早々に両親は弁当箱を流し台に放り出してきて、僕は何も言わずに弁当箱も洗いだした。

両親が夕食を食べていると、姉さん達が帰ってきた。僕はソファに座って本を読んでいた。

両親と一緒に姉さん達も夕食を食べながら、僕達はみんな今日の出来事を話した。

僕は友達が家に来たことを、姉さん達は仕事のことを話した。途中、姉さんと両親が僕に愚痴しか言ってこなくなった時、僕は話をほとんど聞き流した。あと、姉さん達につられてなのかレミリアさんも言ってきたけど、それを同じく聞き流したら姉さんに「相談くらい真面目に聴け。」と怒られた。僕には愚痴にしか聴こえなかったんだけどなあ。

夕食を食べ終えた両親たちは、各々適当にやっていた。風呂に入ったり、明日のスケジュールを確認したり、台本読んだり。僕はひとりで後片付け。理不尽だね。

後片付けが終わったら、洗濯機を回してから風呂に入った。僕が最後なのはいつものことなんだよね。風呂から上がってから自室に戻ろうとしたら、レミリアさんに止められた。

「あの、レン。」

「なに？レミリアさん。」

リビングでは、両親と姉さんが三人で酒盛りをしていた。片付けしてくれるかな？

「レンって、本当に大変なんですね。これを毎日？」

「姉さんが出て行ったあとが大変だったけどね。」

レミリアさんの質問に、僕は苦笑しながら答えた。姉さんが出て行ってからの数週間。僕にとっては仕事のバイトより重労働だった。やったことないけど。学校で寝るのは当たり前。酷い時には学校を休んで寝ていた。病院に行ったら、『その年で過労って、何をすればなるんですか？』と訊かれたこともあった。適当に誤魔化したけどね。

僕がそう答えたら、レミリアさんは驚いてこう言ってきた。

「えっ！？ 渚さんもこんな事をしていたんですか！？」

「うん。といっても、洗濯と料理ぐらいかな。」

「他の事はレンが……？」

「うん。」

僕の答えに、レミリアさんは「すごいね、レン。」と笑って言うてくれた。その笑顔を見て、僕は顔が赤くなった。だって可愛かったんだもん。レミリアさんの笑顔。

そんな僕の顔を見て、レミリアさんも顔が赤くなった。あれ？ どうしてだろう？

レミリアさんの顔が赤くなった理由を考えようとしたけど、それより先にこの気まずい雰囲気は何とかしないといけない、と思った。でも、何を言えがいいのか分からなかったので、

「お、お休み。」

と言って、いそいそと自室へ戻っていった。それを聴いたレミリアさんは、

「あ。は、はい。お休みなさい、レン。」

と言った。まだ話をしたかったのか何か言いたそうだったけど、僕はそのまま自室へ戻って寝ることにした。

十月下旬～十一月中旬（15）（後書き）

次、閑話を書くとしたら誰がいいでしょうか？

十月下旬～十二月中旬（16）（前書き）

レミリアが連のことを好きになった理由の回想から始まります。

十月下旬～十一月中旬（16）

「はう。まだドキドキする。」

連が二階へあがっていったのを見届けた後、レミリアは階段に座って赤くなった頬を両手で押さえていた。

「今でも嘘のようだよ。レンの家にいることが。」

そう言った後、レミリアは深呼吸をした。しながら、思い出していた。

四年前。レミリアは渚と初めて共演した。その時に、渚に「あなたを見てると弟の事を思い出すよ。」と休憩中に話しかけられたことがあった。

『弟、ですか？』

『そう。連、って言うんだけどね。あいつに親の事全部任せてきちゃったんだよ。』

『そうなんですか。』

そこから、渚は休憩時間のほとんどを、連について話した。それは、姉が弟を自慢するようなものだったが、不思議と気にならなかった。撮影が終わり、帰ろうとしてる渚にレミリアはこう言った。

『また共演したら、レン、って人の事をまた話してくれませんか？』それに対して、渚は振り返って笑いながらこう言った。

『いいぜ。そのかわり、あんたも自分のことを話さないよ。』

虚を突かれたレミリアは、呆然と立ち尽くしていた。

それから、共演する度に連の話を聴いた。話を聴いてるうちに、連の事が気になっていった。その理由は、渚の話を聴いてると、連は苦労してるはずなのにいつも楽しそうに過ごしている風にとれるからだ、本人は思っていた。

しかし、そのうち段々と連の事を想像しだし、頭から離れなくなっていた。インタビューで『好きな人は？』と訊かれた時、とっさに『風さんの弟』と言いそうになった。

これが何の感情なのか渚に訊いてみたところ、『恋じゃね?』とあっさり言われた。

そう言われて、嘘だと思う自分がいる反面、納得してる自分がいた。それ以来、連の事が好きになった。

そこまで思い出して、レミリアの顔がまた赤くなった。

「明日も朝と夜は一緒に居られるからその時にいっぱい話そう!」
赤くなりながらもそう決意して、レミリアも寝ることにした。

学園祭の片付けが終わって一週間後。僕達三人はいつもの場所にいた。

「学祭終わったな。」

「それから二日後に、どっかの犯罪組織が壊滅したっていう報道があったんだよね。」

「……これからその話をする。が、その前に」

ん? 圭が僕の事を見る。顔に何かついていたのだろうか?

「……ちよっと実験をする。」

と言って、僕に箱を渡してきた。

なんだろう? と思って箱を開けると、その中から煙が勢いよく噴射してきた。

「うあああ!! ゴホッ! ゴホッ!」

噴射されてからすぐに、僕はその箱を投げた。その箱は煙を噴射しながら壁に激突し、いきなり爆発した。

「……ここでやらないで欲しかった。」

「ゲホッ、ゲホッ! なんだこれ!? 前が見えねえ!」

「庄一! ドア開けてよ!」

「分かった!」

という声と一緒にドアが開く音がして、煙が外へ出て行った。

煙が全部出て行ったあと、僕と庄一は圭に詰め寄った。

「僕に何渡したの!」 「いつもの事だから分かっているつもりだが、ちゃんと説明しろよ!」

僕らの言葉に、圭はいつもの口調でこう言った。

「…連に渡したのは試作品の新作、逃げれる君（仮）。箱を開けると煙が噴射し、箱を何かにぶつけると爆発する音と共に煙が出てくる。これくらいの場所なら二分で周りが見えなくなる。いつものところからの依頼。」

薄々感じていたけどね。そう思っていたら、圭がさらに言った。

「…結果は上々。依頼料を二人に渡しておく。」

そう言って、圭は僕達に封筒を渡してくれた。これが、僕の自分用のお金の収入源。

僕達は封筒の中身を確認しないで、圭の言葉を待った。

「…分かってる。まずは、発端である藤木花音の転校から。その目的が、元の能力の解明。学園祭の時期に転校してきたのは、単に調整が出来なかっただけらしい。」

ちゃんとスケジュールの調整しようよ。

「…学園祭までの間、元の後を追っていたのはそれが理由。しかし、元は普段能力を使わないため解明できなかった。そして学祭初日。開店直後から花音はいなくなった。それは、仲間からの指示を受けるため。その指示が、学祭最終日に元を誘拐するというものだったらしい。」

そこからは僕も知っている。指示を受けた藤木さんはそれにシヨックを受けてしばらくどこかをさまよっていた。それを、両親が場所を特定して元たちが迎えに行った。その時に、元をその組織に渡さないと決めたらしい。

「…そして、学祭最終日の夜。花音は一人で組織へ赴き反対した。当然、組織は反逆罪として花音を捕らえたのだが、元たちが組織の場所へ行き、攻撃した。結果、その組織は壊滅。花音は被害者という事で保護。組織の人間は全員逮捕された。これが学祭での一幕。ただ、一つだけ分からないことがある。」

「珍しいな。圭でも分からないことがあるのか。」

「…ああ。元たちがどうして組織の場所を知ったのか。それと、元

私たちはどうして花音がそこにいることを知ったのか。」

と言って、圭は僕の事を見た。

「…知ってるだろ？」

「相変わらずそういう勘は鋭いんだから。僕の話も誰にも言わないでよ。」

そう前置きして、僕は話した。

「学祭三日目が終わった時に、明日の準備とかをし終え帰る準備をしてたら、藤木さんもいてね。その時に話を聞いたのを、最終日の打ち上げ前に元たちに話したんだ。場所も藤木さんから教えてくれたから、ついでに話したんだよ。」

「そうか。だからお前、あの時ああ言ったのか。」

「…ありがとう。これで納得がいった。これ、提供料。」

そう言って、圭はもう一つ封筒を渡してくれた。僕は、それを受け取らないで圭に訊いた。

「でも圭。元的能力ってなんなの？」

「…分からない。けど、昔の文献で似たような能力を使った人がいたらしい。黒曜から聴いたから、これは確かな情報。」

「ってことは、元的能力って遺伝じゃないのか？」

「……分からない。」

庄一の言葉に、圭は首を横に振りながら答えた。

元って本当に不思議だなあ。僕はこのやりとりを見てこう思った。それから、僕達は明日の確認をして家に帰った。

十月下旬～十二月中旬（17）（前書き）

八十話行きました。早く過去編に行きたいので早めに更新しています。

十月下旬～十一月中旬（17）

「はう。まだドキドキする。」

連が二階へあがっていったのを見届けた後、レミリアは階段に座って赤くなった頬を両手で押さえていた。

「今でも嘘のようだよ。レンの家にいることが。」

そう言った後、レミリアは深呼吸をした。しながら、思い出していた。

四年前。レミリアは渚と初めて共演した。その時に、渚に「あなたを見てると弟の事を思い出すよ。」と休憩中に話しかけられたことがあった。

『弟、ですか？』

『そう。連、って言うんだけどね。あいつに親の事全部任せてきちゃったんだよ。』

『そうなんですか。』

そこから、渚は休憩時間のほとんどを、連について話した。それは、姉が弟を自慢するようなものだったが、不思議と気にならなかった。撮影が終わり、帰ろうとしてる渚にレミリアはこう言った。

『また共演したら、レン、って人の事をまた話してくれませんか？』それに対して、渚は振り返って笑いながらこう言った。

『いいぜ。そのかわり、あんたも自分のことを話さないよ。』

虚を突かれたレミリアは、呆然と立ち尽くしていた。

それから、共演する度に連の話を聴いた。話を聴いてるうちに、連の事が気になっていった。その理由は、渚の話を聴いてると、連は苦労してるはずなのにいつも楽しそうに過ごしている風にとれるからだ、本人は思っていた。

しかし、そのうち段々と連の事を想像しだし、頭から離れなくなっていた。インタビューで『好きな人は？』と訊かれた時、とっさに『風さんの弟』と言いそうになった。

これが何の感情なのか渚に訊いてみたところ、『恋じゃね?』とあっさり言われた。

そう言われて、嘘だと思う自分がいる反面、納得してる自分がいた。それ以来、連の事が好きになった。

そこまで思い出して、レミリアの顔がまた赤くなった。

「明日も朝と夜は一緒に居られるからその時にいっぱい話そう!」
赤くなりながらもそう決意して、レミリアも寝ることにした。

学園祭の片付けが終わって一週間後。僕達三人はいつもの場所にいた。

「学祭終わったな。」

「それから二日後に、どっかの犯罪組織が壊滅したっていう報道があったんだよね。」

「……これからその話をする。が、その前に」

ん? 圭が僕の事を見る。顔に何かついていたのだろうか?

「……ちよっと実験をする。」

と言って、僕に箱を渡してきた。

なんだろう? と思って箱を開けると、その中から煙が勢いよく噴射してきた。

「うあああ!! ゴホッ! ゴホッ!」

噴射されてからすぐに、僕はその箱を投げた。その箱は煙を噴射しながら壁に激突し、いきなり爆発した。

「……ここでやらないで欲しかった。」

「ゲホッ、ゲホッ! なんだこれ!? 前が見えねえ!」

「庄一! ドア開けてよ!」

「分かった!」

という声と一緒にドアが開く音がして、煙が外へ出て行った。

煙が全部出て行ったあと、僕と庄一は圭に詰め寄った。

「僕に何渡したの!」 「いつもの事だから分かっているつもりだが、ちゃんと説明しろよ!」

僕らの言葉に、圭はいつもの口調でこう言った。

「…連に渡したのは試作品の新作、逃げれる君（仮）。箱を開けると煙が噴射し、箱を何かにぶつけると爆発する音と共に煙が出てくる。これくらいの場所なら二分で周りが見えなくなる。いつものところからの依頼。」

薄々感じていたけどね。そう思っていたら、圭がさらに言った。

「…結果は上々。依頼料を二人に渡しておく。」

そう言って、圭は僕達に封筒を渡してくれた。これが、僕の自分用のお金の収入源。

僕達は封筒の中身を確認しないで、圭の言葉を待った。

「…分かってる。まずは、発端である藤木花音の転校から。その目的が、元の能力の解明。学園祭の時期に転校してきたのは、単に調整が出来なかっただけらしい。」

ちゃんとスケジュールの調整しようよ。

「…学園祭までの間、元の後を追っていたのはそれが理由。しかし、元は普段能力を使わなかったため解明できなかった。そして学祭初日。開店直後から花音はいなくなった。それは、仲間からの指示を受けるため。その指示が、学祭最終日に元を誘拐するというものだったらしい。」

そこからは僕も知っている。指示を受けた藤木さんはそれにシヨックを受けてしばらくどこかをさまよっていた。それを、両親が場所を特定して元たちが迎えに行った。その時に、元をその組織に渡さないと決めたらしい。

「…そして、学祭最終日の夜。花音は一人で組織へ赴き反対した。当然、組織は反逆罪として花音を捕らえたのだが、元たちが組織の場所へ行き、攻撃した。結果、その組織は壊滅。花音は被害者という事で保護。組織の人間は全員逮捕された。これが学祭での一幕。ただ、一つだけ分からないことがある。」

「珍しいな。圭でも分からないことがあるのか。」

「…ああ。元たちがどうして組織の場所を知ったのか。それと、元

私たちはどうして花音がそこにいることを知ったのか。」

と言って、圭は僕の事を見た。

「…知ってるだろ？」

「相変わらずそういう勘は鋭いんだから。僕の話も誰にも言わないでよ。」

そう前置きして、僕は話した。

「学祭三日目が終わった時に、明日の準備とかをし終え帰る準備をしてたら、藤木さんもいてね。その時に話を聞いたのを、最終日の打ち上げ前に元たちに話したんだ。場所も藤木さんから教えてくれたから、ついでに話したんだよ。」

「そうか。だからお前、あの時ああ言ったのか。」

「…ありがとう。これで納得がいった。これ、提供料。」

そう言って、圭はもう一つ封筒を渡してくれた。僕は、それを受け取らないで圭に訊いた。

「でも圭。元的能力ってなんなの？」

「…分からない。けど、昔の文献で似たような能力を使った人がいたらしい。黒曜から聴いたから、これは確かな情報。」

「ってことは、元的能力って遺伝じゃないのか？」

「……分からない。」

庄一の言葉に、圭は首を横に振りながら答えた。

元って本当に不思議だなあ。僕はこのやりとりを見てこう思った。それから、僕達は明日の確認をして家に帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5693x/>

普通の人を送る日常

2011年10月29日22時43分発行